MONSTER HUNTER第四章～赤眼の王女、凍土を奏でる～

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ第四章～赤眼の王女、凍土を奏でる～

【Ｎコード】
Ｎ５３１４Ｏ

【作者名】
後藤正人

【あらすじ】
これは昔話。凍てつく冷気と闇の中、そいつは水晶の森から這い出て来る。その体は毒で作られ、その心は非情にして残酷。決して理解されず、そして理解されることも望まない。人の意識を許す度量を持たない狭量。それは古龍。命を蝕む毒と、すべてを憎む毒持つ者。この大地を賭けた戦いの始まりをもたらす害意。

第一話「赤眼の王女と魔女の王国」（前書き）

早速新連載。モンスターハンターの短編第四作目です。
基本トライの凍土を舞台としますが、設定上、２Ｇの装備やモンスターが登場します。
凍土に狩猟笛を持ち込むこともできませんし、フルフル装備で乗り込むこともできません。

第一話「赤眼の王女と魔女の王国」

ミスカトニック王国。

レムリア大陸に三つ存在する王国の中でもこの王国が知られているのは、優秀なハンターを多く抱え、組織だった環境調査を行うことである。そのためハンターズ・ギルドと最も密接な関係にあることでも知られている。

その城は海岸から突き出た小島を埋め立てる形でその上に築かれている。波の音が絶えず城内を包み、穏やかな時間が流れる。海岸からは桟橋で行き来するこの城は美しさとともに、堅牢な城壁と限られた進入経路からまさに要害であった。

青い海に包まれるこの王国は、同時に徹底した情報統制の元、様々な禁断の知識を収めた図書館を備えていることが公然の秘密として語られていた。

そこには世界の起源が描かれた禁書があるとも噂されれば、そこには世界の終わりを記す偽典が死蔵されているともされている。

事実として、ミスカトニック王国が莫大な予算と人員を用いて調べあげた多くの知識は環境の保全と管理に利用されているが、核心部分を公表していないという噂はまことしやかに囁かれている。そして、その噂は消えたことがない。

まさに海の王国である。

美しさも荒々しさも、猛々しさも険しさもそのすべてを見せてい

るようでありながら、それはあくまでも表層のことでしかない。

深い深い懐の底を、その大部分を隠して見せないのである。

ミスカトニック王国。まさに海の王国である。

ここに立ち入ることができる者は数少ない。

決して口外してはならない知識の巣窟であり、特に最重要の機密事項ともなると、その一つが流出しただけで学者が泡を吹いて倒れることだろう。常識から学説まで一変させられてしまうからだ。

王国の代表者は代々その秘密を守り通し、ミスカトニック王国第二王女セントポーリアもまたその一人である。

わずか一五であるセントポーリア王女は機密の重要性を理解し、その管理を任せられていた。その王女に使えるハンターたちが人の間に紛れ、あるいは人の踏み入らない秘境へと出向き、さらなる機密を持ち帰る。

そして、図書館はさらに禁断の知識を肥大化させていく。

それは必ずしも本の形をしてはいない。クシャルダオラの角や、テオ・テスカトルの爪。古龍と呼ばれる、空想の産物の素材であることもあれば、それ以上のものであることもある。

図書館は、その名ばかりである。薄暗く、城の最深部にあるため日光が踏み入る余地などない。薄暗く、蝋燭のわずかな明かりだけ

がその輪郭を示す。

円形の部屋。石造りの壁に、敷かれた赤い絨毯には複雑な幾何学模様が描かれている。城ならば、どこにでもありがちな部屋である。

これが禁断の図書館だと言われても多くの者は納得はしないだろう。古びた棚に並べられる怪しげな薬瓶もなければ、鎖と鍵で厳重に封印された小箱もない。まるで宝石箱のような重厚な木箱に封じられた古書を期待する人もいただろうか。

そんなものは何一つない。

部屋の中央には大きな円柱状のガラスケースが飾られている。富豪の中には特製の水槽で黄金魚を鑑賞する者もいる。ガラスケースがあるというだけでは、欲求はことごとく満たされることはない。

禁忌はどこにある。禁じられた知識は何をもったいぶっているのだろう。

水槽に映る、赤い瞳を持つ顔が口元を緩ませながら水で満たされた容器の中を覗き込んでいる。

波立つ長い髪に、町娘が着ることなどない華美なドレス。その肌は異常なほどに白い。こんな姿をしている者は世界広しと言えども、そう多くはないだろう。

少なくとも、ミスカトニック王国第二王女セントポーリアは自分以外でこのような姿を持っている者を見たことはない。

「神託のフィロソフィア、お話を聞かせて」

水槽に顔を映したまま、セントポーリアは後ろでかしづく配下へと問いかける。水槽にさえ、堅苦しい姿勢でひざまづく女性たちの姿は映っていた。主である姫君の道を塞いでしまわないよう、両脇に整然と整列している。

左右合わせて四人。セントポーリアが自らを含めて七人の魔女と呼ぶ側近たちである。

この中では最年長である、“神託の魔女”フィロソフィアが姿勢を崩すことなく答える。

「ハイパーボリア文明、我々が最後の審判と呼ぶ壁画を完全な形で入手することができました。恐らく、姫様のご懸念は杞憂ではないものと思われます」

普段城内で着ることを義務づけている特務騎士用の金の刺繍が施された白い礼装を身につけたフィロソフィアは、その長い髪がほどよく赤く、色映えがする。それは凛々しさを感じられるもので、彼女ほど礼装が似合う者もそうはいないだろう。

しかし、姫であるセントポーリアを満足させる答えではなかった。

「恐らく？」

「いえ！　間違いないものと」

言い直すフィロソフィア。ここで少しでも弱気な態度を見せれば

それこそ叱責の対象であるが、自身の研究と発掘成果に自信を抱くこの女性は、言い直すことに抵抗を見せなかった。

言葉のあやをこれ以上問題にしたい訳ではない。

セントポーリアの関心はすでに次移っていた。姉であるフィロソフィアの向かい側で、形式的な忠誠を示しているのはフィリア。

同じく赤い髪を、今は三つ編みにしている。その顔や態度にふてぶてしさが現れており、礼装が似合わないことこの上ない。

「剛腕のフィリア、あなたを一猟団長としてドンドルマの街に留めている意味を教えて」

「へいへい」

「フィリア！」

いい加減な態度を姉に注意されても改まることはない。

「姫様、うちの猟団員も異変を感じてる。勘のいい奴はモンスターの行動が一貫しておかしいと言ってるし、勘の悪い奴だって不安を口にしてる」

ドンドルマの街を甲殻種シェンガオレンが襲った際には負傷しながらも優れた活躍を見せたそうだ。また、他の魔女がドンドルマの街で活動する際には、拠点としてもフィリアの猟団は機能している。

このことへの褒美ではないが、セントポーリアにその不遜をたしなめるつもりはない。その奥、三姉妹の末妹は、短く整えられた髪

の下で、どこか楽しげな笑みを浮かべながら姿勢を正していた。

「神速のソフィア。あなたは古龍を見たんでしょ？」

「はい。古龍は明らかに活動範囲を広げています。恐らく、僕たちが見たクシャルダオラは、ルルイエ山脈から飛んできたものでしょう。アマランサスさんが見た巨大なヒプノックのように、本来は深奥に留まっている種が人里近くにまで出ていることになります」

今、世界で起きている異変を、各地に放った魔女たちは目撃しているのである。この図書館に蓄積された知識は、事態の悪化を告げている。

「結界のスノードロップ。あなたの考えは？」

白にも近い銀髪に、前髪が目にかからないようにするためだけの質素な髪留め。その表情は極めて冷淡。意識してセントポーリアの視線から目を背けている。

「私は考えなどしません。見たことを語るだけです。古龍は、動物でありながら人にとても近い。臆病でありながら、何を恐れるべきかを知っています。よって、そんな彼らが行動を起こす理由があるということです」

追従とは最も遠い場所にいる“結界の魔女”でさえ、セントポーリアの考えを支持している。このことは、時が近いことを確信させることに十分な事実であった。

セントポーリアは振り向く。暗い部屋の中を、四人の魔女が列をなし、セントポーリアの道の両脇でかしずいている。

まだ、二人が足りていない。

「博識のグラジオラス、今はあなたの報告を待ちましょう」

魔女の中で最年長の女性はセクメーア砂漠の最奥とも言える西部へと出向いている。砂漠の西側にあるルルイエ山脈を観測に出向いているのだ。異変の中心であるドリームランド峡谷のさらに南に位置するこの山々は、古龍の生息地としてミスカトニック図書館は禁断の知識の一つとして記録している。

「そして……」

セントポーリアが最も信頼を寄せる魔女の姿が、ここにはなかった。

“凶眼の魔女”。かつて、自身を七人目の魔女と数える王女とともに古龍を打ち倒した魔女の到着を、“赤眼の魔女”セントポーリアは待ちわびていた。

部屋に唯一備えられた扉を眺めながら。

水槽を背に。

水槽の中、透明な濃緑色の液体の中に浮かぶ、四肢と翼を併せ持つ朽ちた獣の屍を背にしながら。

その意識は、かつての日々へと向けられていた。

「ねえ、お父様、どうして私はお日様を見てはいけないの？」

お父様は答えてはくれなかった。

「ねえ、お母様、どうして私の目は真っ赤なの？」

お母様も答えてはくれなかった。

「ねえ、お姉様？」

ミスカトニック王国には花のように美しい第一王女がいた。美しく聡明な王女は誰しもに愛され、また誰もを愛した。

ミスカトニック王国に、雪のように白い王女が生まれた。

その肌は一切の色素を持たず、瞳が血の色を映す赤。日の光を浴びることのできない王女は、城から出ることはなく、外の世界を知らずに育った。

そんな王女様を慰めたのは、りりしい王子様の登場するおとぎ話ではなくて、血生臭い、モンスターとの戦いに明け暮れるハンターたちの語る事実であった。

「私はみんなと違う。それとも、みんなが私と違うの？」

「お見事です、姫様」

ナコタス沼地を縦断する洞窟の中、分厚いグローブをつけた手が拍手する。

固い岩肌の地面にたまった水たまりに、甲殻種の青い血が混じる。背負ったヤドは砕かれ、その象徴とも言える長く、鋭い鎌は両手ともへし折れ痛々しい断面をさらしていた。声を出すことを知らない口の周りに残された泡が、断末魔の代わりである。

まだセントポーリアが十二――ハンターは原則的に一五からだが、王女という立場は例外を押し通せる――であった頃、父にハンターになりたいと告げた。このわがままは条件付きで通ったのだ。

狩りには優秀なハンターとともに行くこと。決して無理をしないこと。

父の用意したハンターたちは優秀で、無理などしようがない。身を包むフルフルからはぎ取った皮を用いた――鎧というよりは厚手の衣服である――防具はくたびれさえほとんど見られない。フルフル亜種の赤い皮を張った狩猟笛ブラッドフルートは滑り止めを塗り直す必要さえなかった。　その白い体色からアルビノと呼ばれるフルフルの素材で装備を調えていることは、特に必然性はない。言ってしまうなら、単なる皮肉である。

そう、自然界ならすぐにでも死んでしまうようなセントポーリア王女が生きていること自体、一つの皮肉だと言ってしまえた。

長さだけで小柄なセントポーリア以上もある狩猟笛を背負いなおす。柄から先の膨らんだ構造の先端には歯が並びフルフル亜種の不気味な口を模した吹き出し口は今にも叫び声を上げそうなほど生々しい。

「囮の大半はあなたたちが引き受けた。攻撃もほとんどあなたたち。私はとどめをさしただけ」

甲殻種、鎌蟹ショウグンギザミのくずおれながらなおセントポーリアと同じ高さにある頭には雷の焦げた跡と、強打された陥没。

爪を砕いたのも、殻を割ったのも他の三人のハンターたちである。

「お父様からいくらもらったかは知らないけど、おべっかも報酬の内なの？」

拍手している女ハンターに目を向けると、社交慣れしていない狩猟者は苦いものを噛んだような顔をしながらも文句は言ってこない。少なくとも、子守の分くらいは報酬を上乗せされているらしい。

狩りから帰ると、決まってドレスを着せられる。窮屈で動きにくい。装飾過多のドレスは動きにくく重い。機能性に優れたハンターの装備を着た後だと、ドレスの無意味さが強調される。

これはいつものこと。そう、いつも決まって、暗い部屋にこもって、豪華な設えが施された椅子に座る。客人を迎える時はいつもこうしている。

扉を抜けてきたのは男が一人。上下とも黒い薄手の衣服を羽織っている。本来はハンターであるこの男も、さすがに城内に装備を持ち込むことは許されていない。

もっとも、右目を額から頬にかけて通り抜ける傷跡は、男の職業を容易に想像させるだろう。

“夢狩り人アレス”。そんなたいそうな通り名で呼ばれるハンターなのだそうだ。

「ショウグンギザミを倒したと聞いた。腕を上げたな」

ショウグンギザミどころか、火竜さえ狩猟するこの男は、笑いもせず言ってくる。

「四人パーティで、上位ハンターが三人もついた。嫌みにしか聞こえないよ」

「会う度僻みっぽくなるな、お前は」

「ミスカトニック国王女にそんな不遜な態度を働くのはあなただけ。あなたも会う度厚かましくなっていく」

セントポーリアはこれまでに多くのハンターを呼びつけ、狩りの様子を聞いていた。アレスはその中の一人にすぎないが、しかし、最後まで残った一人である。

不遜だからこそ、傲慢であるからこそ、セントポーリアはアレスを話し相手にした。おもねってご機嫌をとろうとする相手は大したハンターではない。どちらかというと、ハンターとしての十分な実

績と実力を持つ者ほど態度は悪い。王女の機嫌を損ねようと、追い出されようと、いくらでも食べていく方法があるからだ。

アレスが、ここを訪れたハンターの中で最も高慢で、最も実力があった。それ故に、最後まで残された。

「それで、今度は何をしとめてきたの？」

椅子の肘おきに寄りかかりながら、こんなことも、いつものことだ。

「馬鹿げたこと聞くな。ハンターは、何をしとめたかではなくて、誰のどのような助けなったかにに名誉を感じるものだ」

アレスに言わせると、誰も行かないような極地にわざわざ行って巨大な竜をしとめるよりも、家畜を荒らす鳥竜種ランポスを倒すハンターの方が何倍も讃えられるべきなのだそうだ。

この話を始めさせるとすぐに説教臭くなる。

「で、ターゲットは？」

アレスは鼻から息を軽く吹く。

「氷牙竜ベリオロスだ」

「ベリオロス？」

聞き覚えのない名前に、つい聞き返す。

「ドンドルマ以東では見られない種だが、西のロックラック群島にはこことは異なった生物層が見られる。その中にでも一際高い山がある場所には、地元で凍土と呼ばれる場所がある」

ずいぶん遠くにまで行っていたようだ。ミスカトニック王国はレムリア大陸の中央やや東よりの海岸に位置している。ロックラック諸島にまで行きたければドンドルマ地方から大陸北側のンガイの森を抜けていくしかない。南西のセクメーア砂漠は周囲を高山に囲まれており道には使用できないためだ。

「セイレム山。聞いたことはないか？」

「セイレムの魔女」

聞き覚えのある名前に、記憶から引きずり出した単語を被せた。

セイレム山の麓の里には、女性が中心となって狩りを行う伝統があり、またその優れた技法――魔女とまで言われるほどの――で知られている。

「そうだ。凍土は極めて寒冷地にあり、酸素も薄い。加えて、この地方ではあり得ないほど深い洞窟さえ狩猟の場所とする。そこには日の光は届かない。完全な暗闇でな。目はまともに役にたちはしない」

闇の中に生きる狩猟の民。同じく闇を友人として過ごさなければならないセントポーリアが興味を引かれないはずがなかった。

「もっと話を聞かせて」

「俺は依頼を受けてベリオロスの狩りに出向いた。氷牙竜の素材は断熱材として利用可能だ。その素材を試してみたいという話だった」

順序だって話すアレスの生真面目さが、今は恨めしい。

「アプトノスに引かれて一〇日。船旅は一週間にもなる。そこで、ようやく目的地に到着するわけだ」

まだ本題に入らない。

「セイレムの里は、村と集落の中間の大きさでな、一応分類としては集落なんだが……」

「そんなことはどうでもいいよ」

アレスは、また、ため息の代わりに鼻から軽く息を吹く。

「ここでは伝統的に男たちは街の方に出稼ぎに行く。そのため、凍土での狩りはほとんど女性が行っている。セイラムの魔女。このように呼ばれているのはそれだけ女性ハンターが優秀だからだ」

ようやく、聞きたい内容に入ってくれた。

「彼女たちは闇を見通す力を持っている。凍土の暗闇の中でも問題なく狩りを行う。太陽の光なんて差し込まないような場所でさえ、まるで見えているかのように戦っていた」

「俺と組んだのはハンターは、まさに魔女と呼ばれてしかるべき実力を備えた女だ。見事なものだ。彼女はガンナーだったが、まさに百発百中。単に狙えるというわけではなく、当てるということがで

きる人だからな」

気のせいか、ずいぶん饒舌に聞こえる。アレスが女の話をすることを耳にするのは初めてではないだろうか。

「ずいぶんご執心ね。そんなに魅力的な人だったの？」

「魔女について話を聞きたいんじゃないのか？」

口が自然と尖っていた。不機嫌になるとなかなか行動を抑えることができない。悪癖だとは思うが、癖というものはなかなか直るものではない。

そう、つい行動が先だってしまう。

「連れていって」

「何？」

アレスはすぐに話を飲み込むことができないようだった。

「私をセイレムに連れていって！」

権威に逆らうことができない人間は、王女よりも大きな権力を恐れて聞き入れようとはしないだろう。常識のある人間だとて、王女を城外に軽い気持ちで連れ出そうとはしないだろう。

アレスはそのどちらでもなかった。

「それは構わないが、国王が許すのか？」

「お父様は私のこと厄介者としか感じてない。喜んで送り出すよ」

背もたれに寄りかかる。きっと顔は、自嘲に歪んでいることだろう。アレスはそんなセントポーリアの心をいともたやすく一変させた。

「それはそうだな。少々体に障害があるだけ周りに当たり散らすガキは面倒この上ない。かわいげがないって言われることはないか？」

苛立ちの矛先があっさりと変わったのである。

「あなたの減らず口も十分腹立たしいけどね！」

優秀なハンター様は王女を怒らせたことにも無頓着であった。

「まずは国王の許可をとってこい。そうすれば案内しよう。魔女の里にな」

第二話「赤眼の王女と魔女の里」（前書き）

世にも珍しいドスバギィと狩猟笛の戦闘です。サードが出る前は……。

第二話「赤眼の王女と魔女の里」

空気が張りつめ、川には巨大な氷の塊が漂い流されていく。洞窟の中のような肌に浸透してくる寒さとは違う。突き刺すように体の奥へと侵入してこようとする寒気が、分厚い毛皮を通して伝わってくる。

歩けば、雪が踏みしめられる音か、氷の堅い感触しかない。

木々も吐き出す吐息さえ、何もかもが白く化粧された大地。

「ここが凍土？」

フードを目深にかぶり、コートが開いてしまわないよう腕で押さえる。すると、その手が寒くなってしまうため、できるかぎり体から離さないように引き寄せる。寒い。セントポーリアの第一印象は、この一言に尽きた。ホット・ドリンクで無理矢理体温を上げておかなければすぐに走ることもできないほどに消耗してしまうに違いない。

つい、歩む足取りも遅くなる。その隙を見計らう用に、アレスがセントポーリアを追い抜いて前に出た。防具の上からコートを羽織っているセントポーリアとは違い、この男は蒼火竜の鱗と甲殻で作られた鎧をさらしたままで歩いていた。重厚な槍を――こちらも蒼火竜の素材から作られたものである――背負っている。

「呼吸は深くするな。肺が焼ける。それに、高所だからな、紫外線は見かけ以上にきつい。あまり体を光にさらすな」

「わかってる」

フードの中にこもっているのは、何も寒さのせいばかりではない。それでも、寒さが堪えていないわけでもなかった。つい、口を開くことが億劫に感じられて、アレスの後を黙々とついてくことになった。

川沿いの場所から道なりに進むと、木々のない、開けた場所に出た。すぐ目の前の切り立った崖が印象的である。とても登れる高さではないが、つい上に乗ってみたくなる、そんな崖だった。残念ながら、見上げても崖の上の様子ははっきりとは見えない。先程から雪混じりの風が吹くようになっていた。

いくら冷たくとも、洞窟の中では起こりようがない、吹雪の前触れである。

「吹雪いてきたな」

アレスは唐突に立ち止まった。その視線はあたりを泳ぎ、何かを探しているようである。

「まさか、道に迷った？」

普段から落ち着いた様子のアレスは、よほど深刻な事態でも生じなければ取り乱すことなんてないのだろう。慌てふためいてもらいたい訳ではないが、冷静すぎても状況の深刻さを計りかねる。

「いや、待ち合わせ場所はここだ」

「こんな場所にいて、モンスターに襲われない？」

妙な不安に駆られて、ついアレスの顔を見上げるように覗き込む。やはり、表情に変化は見られない。残念なことに、それは必ずしも安心を約束はしない。

「もう里が近い。こんな場所に大型のモンスターはいない。加えて、もし住み着こうものならすぐに追い払うなり狩猟されるはずだ」

表情も言葉さえあてにならない。何故なら、この広間かに通じる道の奥から、近づいてくる何かの影が見えていた。ずいぶん背が高い何かを先頭に、小さな何かがついてきている。

「じゃあ、あれは何？」

近づくに連れ、白ずんだ視界がより鮮明に何かを捉える。

それは、一瞬鳥竜種ドスランポスを思い浮かべる姿をしている。青い体色に、たくましい足と不釣り合いな腕を前に垂らした前傾姿勢。細く長い首の先に小さな頭を乗せ、バランスを取るように尻尾を伸ばしている。

「ドスバギィだ。鳥竜種の一種で、麻酔性の体液を体内で生成することが特徴だ。凍土などの寒冷帯に生息する種で、中型の鳥竜種の多くがそうであるようにバギィと呼ばれる小型の個体を引き連れていることが常だ」

「そうじゃなくて！」

とうとうとモンスターの解説を始めるアレスに、つい怒鳴る。

「モンスターじゃないの！？」

こんなことをしている内にも、人と同じくらいの背丈をした方――バギィと言うらしい――がセントポーリアに狙いをつけていた。

コートを脱いでいる余裕はない。背負った赤い狩猟笛を握りしめる――フルフルのブヨブヨとした皮の感触が伝わる――と背中から一気に振り抜く。

内蔵された電気袋が激突の衝撃をエネルギーに変え、電気を瞬かせる。ちょうど足を叩かれ、バランスを崩したバギィは凍土の凍った大地を滑るように倒れた。

狩猟笛は笛である。音を出すために内部は空洞になっており、見かけほどの重さはない。同じ打撃武器であるハンマーとは違った攻撃を可能とする。同時に、その軽さは、セントポーリアのような少女にも辛うじて扱える負担であった。

ひとまずバギィを撃退しておきながら、セントポーリアの顔色は冴えない。狩猟笛は他の武器とは比べ物にならないほどデリケートな武器である。内部構造が複雑であるため、歩行する程度のわずかな衝撃でも重心の位置がずれ、手に馴染まなくなってしまう。

調律の必要があった。

「アレス、少しでいいから相手してて！」

突き出す槍が風を切る音を返事の代わりとして、アレスはバギィたちの前に出る。親玉を含めてもバギィたちは四体。アレスなら問題ない。

セントポーリアは笛を腰だめに構え、柄の部分に取り付けられている吹き込み口に唇をつけた。息を吹き込み、音を出す。音は何でもいい。それでも、お決まりのこととして、狩猟笛を使うものはどの笛にも使われている紫の音階を使用する。

フルフル亜種の恐ろしげな口が紫の音色を響かせる。これで、どこが悪いのかを掴む。手で笛の表面をなめして、重心の位置を調整してやる。これだけでも扱いやすさがまるで違う。続いてもう一度。これで、調律が完了したことを確認する。

セントポーリアは笛を肩に担いだ。重さがほどよい位置によく馴染む。調律は成功し、これで動きやすい。

この頃にはアレスがすでに二頭のバギィをしとめていた。もしかすると、援護をするのではなく、一人でバギィたちをしとめてしまうつもりだったのかもしれない。

そんなことはさせない。

アレスが槍を突き出すと、槍が先端から炎を吹き出す。寒冷地に生息するドスバギィはやはり火に弱いらしく、怯えたように身を翻そうとして、それを構わないアレスの容赦ない突きをわき腹に浴びた。

肉の焦げる臭いと仰け反るドスバギィ。

動きをとめたその隙に一気に――調律を終えた狩猟笛ならそれができる――接近する。ハンマーにはなかなかできない、振り上げる一撃で頭を狙う。

角竜のように頑強な骨格で防御されている種でもなければ、多くの生物にとって頭部は弱点である。特に打撃は脳に直接響く攻撃で、脳震盪を引き起こすこともできる。よって、ハンマーや笛が頭を狙うのは常套にして定石。ブラッドフルートは雷の弾ける音を響かせてドスバギィの頭――人のそれより高い位置にある――を捉えた。

確かな手応えと違和感。

「こいつ、頭が重い！」

しっかりとダメージが通った感触はあった。しかし、脳を揺さぶることができた確信はない。

見ると、ドスバギィの頭には鶏冠のような突起物があった。如何にも重そうで、これが頭を上から押さえることで揺れを抑制しているのだろう。

これではなかなかスタンが取れない。

次の手を考えるつもりで、ドスバギィの側面に回り込む。

青い体は、しかしドスランポスとは異なっていることが今になってわかった。ランポスの体は鱗に覆われているが、バギィは完全に皮に包まれている。比較的温暖な地に暮らすランポスと、極寒の地を選んだバギィとではやはり体の構造が違うらしい。そのことに感心する以上に、気づいたことがある。

それは、このドスバギィにいくつもつけられたいくつつもの一直線の傷。アレスのランスではない。では、一体誰が。

「目を瞑れ！」

そんな声が聞こえてきたのは、ちょうどその時のことだった。とっさに瞼を狭め、入る光量を絞る。その次の瞬間、光が弾ける。ハンターなら誰でも一度は目にする、閃光玉の輝きである。

こんなものに視界を潰されるハンターなどいない。よって、響いたのはバギィたちの悲鳴であり、視力を一時的に消失したドスバギィが立ち往生していた。

威嚇するか、ただ暴れ回るだけのドスバギィ。

吹雪の中、ハンターが一人ボウガンを構えていた。上半身は、ドンドルマ地方とは異なったデザインの角竜ディアブロスの防具。たくましく湾曲した角と頑強な甲殻の土煙に適度に汚れた色をしている。ただし、下半身は赤い鱗をした火竜リオレウスが守っている。地方によって装備の加工は異なり、一風変わった性能を有することになると聞かされている。このガンナーは、この地方のハンターであるということになる。

そして、手にしているボウガンは、何とも――あまり人のことを言えたものではないが――グロテスクな姿をしていた。黒ずみ、嫌な印象を与える皮が張られ、銃口は鋭い牙がいくつも並んだ大口のように開いている。そこから飛び出すものが穏やかなものでないことくらい、容易に想像がつく。

撃ち出された弾はドスバギィの頭を捉えると、首筋に吸い付いたように皮を切り裂きながら胴に突き刺さる。柔らかい弾頭と細かい針の構造で相手にへばりつき傷を付け続ける弾丸。貫通弾である。

貫通弾が次々と放たれる。三発目のあたりで、鶏冠が砕けて落ちた。五発目が一際大きな血しぶきを上げると、ドスバギィはゆっくりと、しかし加速しながら体を冷たい地面にその体を投げ出した。

最後に一頭残されていたバギィは、ボスがしとめられたと見るやあっさりと逃げ出して行った。

当面の危機は去ったらしい。

すると、視線は自然とガンナーの方へと吸い寄せられる。ディアブロスの無骨な兜を外すと、長い髪が吹雪になびいた。声の高さからわかっていたこととは言え、ハンターは女性であった。切れ長の目に、小さな唇。声を荒がる様子が想像できないほど落ち着いた顔立ちは、大人の女性というものをセントポーリアに見せつけていた。

鏡を見て、少しずつ大人になっていく自分に成長を確信できても、この女性の前では身の程知らずを教えられてしまう。セントポーリアはまだ子どもなのだ。

「久しいな、アレス」

女性特有の高さこそ維持しながら、男性的で落ち着きはらった声音。

「お前らしくもない派手な登場だな。それに、待ち合わせの時間を過ぎている。どう落とし前とってくれる？」

アレスと知り合いであるらしい女性は、目を細めただけで品よく笑う。

「君もひどい裏切りを働いてくれた。それを帳消しにしてあげよう」

「裏切り？」

女性がふとセントポーリアの方を見る。その瞬間、セントポーリアは言いしれない不安を覚えた。どう言っていいのかわからないが、何か、心の中まで見透かせてしまったような。そんな感覚である。

別に、睨まれたというわけでもないのに。

「まさか君がこんな若い子が好みとは知らなかった。あの夜、私に囁いた言葉は偽りだったのか？」

女性は、やはり小さく、静かに微笑む。

「子どもの前だ。冗談は選べ。それに、こいつはただの雇い主だ。お前に会いたいんだそうだ」

子どもと呼ばれたことに抗議するつもりで、肘でアレスのわき腹を突いた。もちろん、こんなことで蒼火竜の甲殻を突き破れる訳がない。肘を痛めただけだった。

「では君がセントポーリア王女か。話に聞くとおり、見事に赤い瞳だな。それに、ずいぶんわがままなそうだ」

「アレス、一体どんな話を通したの？」

セントポーリアよりも背の高いアレスを見上げる。

「王女のわがままに付き合わされてる。できれば助けてもらいたい、だが」

ちょうどいい高さにあった胸を叩く。やはり、手が痛むだけである。アレスは――当然ではあるが――平然としている。そんな様子を、女性は微笑みながら見ていた。凛々しくて穏やか。異性よりも同姓に慕われそうな人である。

「歓迎しよう、姫」

アレスが導いたこの場所で、彼女は待っていた。魔女と呼ばれるハンターたちが暮らす極寒の地。

「じゃあ、あなたが……」

「紹介しよう、セントポーリア。彼女はセイレムの魔女。そう呼ばれる一人だ」

これが、王女と魔女の出会いであった。

「洞窟の中に里があるのね」

ここには風はない。吹雪の中を抜け、切り立った凍り付いた岩肌に切り裂かれたように開いた洞窟の入り口から中へ入ると、そこは思いの外開けた場所へと通じていた。

天井は高く、飛竜が軽く飛ぶ程度ならできるほどの広さがある。外の太陽の光を屈折して取り込むようにでもなっているのか、とこ

ろどころで立ち並ぶ篝火の光だけでも見渡すことができるほど明るい。

そこには、見えている範囲だけでも一〇を超える家が並んでいる。どれも比較的小さなもので、その特徴として柱を立ててその上に家が立てられる、いわゆる高床式の構造が採用されていた。

「この一帯は言うまでもなく寒冷地にある。そして大半の岩盤が氷で覆われ、直に家に建築した場合、立ち上る冷気が家屋の中にまで侵入してしまう」

女性ハンターが簡単に説明してくれた。

「それで高床式に」

「だが、同時に夜間は天候が荒れる。高床式では突風に耐えることができない」

「すると、自然と洞窟の中に居住を構えるようになったそうだ。生活の知恵だな」

アレスが説明の締めくくりをしている間、ハンターは里の住民からお疲れさまと声をかけられていた。それに手を挙げて応える様は手慣れている。

これまで幾度となく期待され、その期待に応えてきたという自信に満ちていた。

「では、私の家に案内しようか」

女性はアレスを伴って歩いていく。アレスにしても、すでに家の場所を知っているようで、その足取りに迷いはない。はぐれたら置いて行かれてしまいそうだ。

それでも、セントポーリアはつい足を止めた。そして、振り向く。

この里に入る際通った門がどうしても気になって仕方がなかった。木製ながら所々金属製の金具で補強され、外に向かって大仰な突起がいくつも植えられていた。大きさも見上げるほど大きく、モンスターの襲撃を想定したものであることは明白である。

こんな小さな集落がこのような門を備えることは大変な負担であるはずだ。それでもこんなものを作らなければならないほどの相手とは、一体どのようなモンスターがこの里には来るのだろう。

外から通り抜けた風――それは決して見えなくとも確かに気配を感じることができるもの――が、フードを外したセントポーリアの頬を撫でた。

篝火が揺れ、肌寒い。ここは凍土。闇に生きる魔女の里である。

第三話「赤眼の王女と闇の中」

家は、城のどんな質素な物置よりも小さなものであった。もっとも、ハンターとして旅をしたこともあるセントポーリアにとって、それが苦痛になることは決してない。雨風をしのげて、囲炉裏にくべられた火が体を温めてくれる。それで十分だった。

この部屋の主であるハンターは、例のグロテスクな口を開けたヘビィボウガンを分解整備していた。恐暴竜イビルジョーと呼ばれる、この孤島生態系の頂点に立つとされる獣竜種の素材から作られた、威力だけならトップ・クラスのボウガンなんだそうだ。

さすがに今は防具を身につけていないが、ゆったりとした厚手の衣類の下にのぞかせる引き締まった肉体は、優秀なハンターであることを十分に証明している。特に胸の大きさなど、セントポーリアでは及びもつかない位置にいる。

部屋の中にはほかにアレス。三人がいても、決して手狭な感じはない。

「あなた、ここに一人で暮らしてるの？」

「いや、妹が一人いる。親は、五年前に流行病で私たちを置いて逝ってしまった」

手は止めていない。親を亡くしたことを今では気にした様子がないにしろ、それはセントポーリアがそう思いこんでいるだけかもしれない。

話題を、無理矢理にでも変えようとする。

「アレスとはいつ出会ったの？」

「かれこれ三年前だったな。流れのハンターとして訪れた時に出会った。腕のいいハンターだったが、寒冷帯での戦いに慣れていなかった。あの時はずいぶん世話を焼かせてくれたな、アレス」

アレスの体が目に見えて動いた。その様子を、女性は楽しそうに眺めている。

「私、聞いてないけど？」

「昔の話だ」

話をはぐらかそうとするアレスに、セントポーリアは疑惑の眼差しを強めた。

「もう生肉とホット・ミートを間違えたりしてないだろうな？」

ホット・ミート。こんがり焼き上げた肉に、トウガラシを大量に擦り込んだ肉料理のことである。食べると体から発熱し、ホット・ドリンクと同じだけの効果を得ることができる。また、もう一つの特徴として、トウガラシの色素で肉が真っ赤になるため、赤みの生肉と一見すると区別がつきにくくなるのだ。

もっとも、落ち着いてみれば簡単に識別できそうなものだが。

アレスは女性二人から目をそらしたまま、しかし否定しようとしない。女性はとどめを刺そうとする。

「ホット・ドリンクの代わりに捕獲用麻酔薬を飲みだした時はさすがに私も慌てさせられた」

どちらも、似たような容器に入った赤い液体である。

「ふ～ん、アレスもかわいいとこあったんだね」

ついにいたたまれなくなってしまったのだろう。アレス――やはり、防具は着ておらず、厚手の衣類を身につけている――は突然立ち上がった。

「族長に挨拶をすませてくる」

どうやら、うまい口実を見つけたらしい。扉を荒々しく開くアレスを、女性はなま暖かい目で見送っていた。扉が閉まるまで。

「さて、今度は私が質問させてもらおうか。王女である君がここに来た訳を聞かせてもらおう」

整備はそろそろ終わったのだろう。どうしても好きになれない形をしたヘビィボウガンを組み立て終えた女性は、セントポーリアの方をまっすぐに見てくる。

青いその瞳は、まるで鏡のようにセントポーリアを映す。

「見ての通り、私には太陽を目にすることができない。だから狩りをする時はいつも洞窟の中や夜間での戦いになる。そのことで、敵が見えずらかったりだとか、そんな不利をいつも感じてる」

しかし、太陽の下に出れば、先に倒れるのはセントポーリアの方が先だろう。自然界の中で、太陽の光を浴びることができない生物なんているものか。

「でも、あなたたちは知ってるんでしょ。闇の中でも戦う術を」

女性は否定しない。その瞳は静か。

「教えて。あなたたち魔女の戦い方を！」

しばらくの沈黙。ただそれは、悩んでいるというよりも、セントポーリアの言葉を待っていたらしい。

「姫は、私の質問に半分しか答えていないな」

ほかに言うことなんてあっただろうか。考え込むよりも先に、女性は表情を緩める。

「まあ、アレスの頼みを無下にすることもできない。私でよければ指導しよう」

自分でも喜びがゆっくりと胸の中で広がっていることがわかる。女性はあくまでも微笑みながら、しかし言うべきことは言ってくる。

「ただし、一朝一夕で身に付くものではなければ、誰しもに体得できる技術でもない。そのことを、姫には覚悟してもらうことになる」

「構わない」

こうこうこうです。そんなに簡単に身に付く技術は、それこそ、

その程度の価値しかない。誰もが簡単に身に付けられるような技で、魔女は魔女と呼ばれてきたはずがない。

「それと、姫って呼び方、やめてくれない？」

ここではミスカトニック王国第二王女ではなく、ただの一人のハンターにすぎないのだから。

女性は顔の形を崩すことなく笑う。

「姫は姫だろう」

「それなら、私もあんたのこと、魔女って呼ぶわ」

「凍土は構造が複雑で、少し洞窟の奥に進んだだけでもこのように完全な暗闇になる。見えるか、姫？」

魔女の声だけが聞こえている。姿が見えないのではない。凍土の暗闇が、魔女と言わず、すべてのものを覆い隠している。

「見えるわけないでしょ」

わかるのは、ここが寒いということくらい。もっとも、吐く息さえ見えないので、白い吐息を確認することもできない。

「耳を澄ませ」

魔女の声に、意識を聴覚に集中する。まるで、巨大な耳を持つ怪

鳥イャンクックにでもなったように聞くということに意識を集めた。

まさにイャンクックに成りきっていたのだろう。突如鳴り響いた甲高い爆音に、つい体が強ばる。足から力が抜け、背中から地面に打ちつけられた。

かすかな爆音の中、火薬の発する光が見えた。

音爆弾だ。本来鋭敏な聴覚を持つモンスターを驚かすために使われるものだが、意識していなければ人間相手にも絶大な効果を発揮するらしい。

セントポーリアがその先例である。

勢いよく立ち上がりながら、セントポーリアは闇の中へと叫んだ。

「な！　な！　何すんのよ！　急に！」

悔しいことに、叫んだ方角に魔女がいるという保障はない。聞こえてきた返事は、若干ずれた方向から聞こえてきたものであった。

「セイレムの魔女は、これで闇を裂いてきた」

態度はふざけきっているのに、声は真剣そのものである。つい、追求の手も弱まってしまう。

「音だ。音の反響から地形を割り出し、足音から敵と自分の位置を確認する。それが、セイレムの魔女の力だ」

目は光を必要とする。しかし、光はどこにでもあるわけではない。

簡単に遮られ、夜にはなくなってしまう。

耳は大気さえあればいい。生命の生存に不可欠な大気はどこにでも存在する。日の光の届かない洞窟の奥であっても、夜闇の中でも。

ただし、その精度はまるで違う。どんな人でも目で周りの状況を確認することはできるだろうが、耳でそれができる人は聞いたことがない。

「そんなこと、本当にできるの？」

「できるとも。それが、私たちが魔女と呼ばれている理由だからな」

特訓が始まった。音を頼りに相手の位置を捉える。難しいことでありながら、セイレムの魔女にとって、これは初歩的な技術なのだそうだ。幼少の頃から鍛えられた魔女ともなると、耳だけでモンスターの位置と距離、どちらを向いているのかさえ掴むことができるのだそうだ。

「音を掴め。どちらから来るかではなく、どのように響いてくるのかを包括的に掴め、姫」

音は凍土の複雑な地形に反響して、どちらから聞こえてくる音なのかわからない。魔女が言うには、最初に聞こえてきた音がした方向が、正しい方向なのだそうだ。もっとも、音は飛竜よりも早く飛ぶ。反響した音と直進した音の時間差は一秒もないと、笑いながら付け加えてくれた。

「さあ、私はどこにいる？」

「そこ」

たぶん、最初に聞こえて声は、こちらからであった。と思う。

松明に明かりがつけられ、防具を身につけた魔女の姿が露わになる。その位置は、セントポーリアが指し示す方向とは違っていた。

「不正解だ。距離は掴めているようだが、方角をまるで捉え切れていない」

「いきなりできるわけないでしょ。こんな、寒い中！」

叫ぶと、吐き出した息と同じだけの息が鼻を伝い逆流してくる。冷たい外気は、寒さを強調しかしてくれない。

「実際の戦いではさらに複数の要素が絡む。そんなことを言っているようでは甘い」

寒さにあてられた呼吸器が息苦しい。そもそも、理屈を並べられただけで耳がよくなる訳ではない。魔女になることができるわけではない。

「仕方がない。ヒントをやろう」

松明の明かりが照らしたのは、小さな水たまりであった。

「地形の中には、そこにしか発しない音というものが必ずある。その特徴を掴めば、それは大きな助けになる」

要するに、水音がすれば、相手はそこにいることになる。セント

ポーリアは、他に目敏く骨が密集して、歩けば確実に骨を踏みしめる音がする場所を見つけおいた。

「もう一度よ」

松明の炎が消されると、すぐに闇が帳を降ろす。

水の音がした。いきなり水たまりを踏んだのは、サービス問題のつもりだろうか。

「そこ」

再び、松明の光。しかし、水たまりに魔女の姿はなかった。代わりに、先程までなかった気がする骨が一つ、冷たそうな水につかっている。

「骨の欠片一つで音はいともたやすく起こすことができる。もっと想像力を働かせろ」

とうの魔女の姿は、セントポーリアが目をつけていた骨の散乱する場所にあった。

再び、消える松明の炎。

また水の音。そして骨の音。どちらもフェイク、だと思う。足音がした方角を割り出して、距離は、きっと五mくらい。

「そっち！」

松明の光が灯されると、セントポーリアの顔の前には、細かい歯

をびっしりと並べた丸い口が口腔の赤い肉を見せつけるようにいっぱいに開かれていた。

声もなく卒倒するセントポーリア。背中をしこたま打ちつけた痛みに意識が覚醒する。凍土の冷たささえ忘れ、尻餅をついたまま声を張り上げた。

「な、何なのよ、一体！？」

魔女は右手に松明を、左手には白いブヨブヨした――どこか、フルフルを連想させる――白い生物をまるで猫でも抱き上げるかのように抱えていた。全体として円筒形。手のように見えるヒレが一対あるが、足に当たる部分には見られない。その最大の特徴は目がなく、体の太さほどにも開かれた口である。それがまるで活のよい魚のように暴れていた。

「言い忘れたが、セイレムの魔女は闇の中での音の消し方と反響を意図的に操作して居場所を攪乱する術も学んでいる」

「そうじゃなくて！」

その出来損ないのお化けは一体何なのか。魔女はちょっと考えたような顔をして、すぐに何かに気づいたような顔をして。

「言っただろう。一朝一夕で身に付くものではないと」

何もわかっていなかった。

「そっちじゃない！　何、その白いの！？」

魔女がそいつのことを見ると、そいつも首――胴体と地続きで首と言っていいのかわからない――を魔女の方へと向けた。そして、魔女が視線をセントポーリアの方へと戻すと、お化けも――偶然なのだろうが――セントポーリアの方へ大きな口を向けた。

まるで、この喚き散らす子どもをどうしようかと顔をむき合わせて相談しているようにも見えてしまう。

「ああ、この子はギィギだ。ドンドルマの方ではフルフルと呼ばれる種がいるそうだが、こちらでも近縁種でギギネブラという種がいる。その幼体だ」

あの大きな口で張り付いて獲物の血を吸うらしい。フルフルにも、フルフル・ベビーと呼ばれる吸血性の幼体が知られている。

だが、どうして抱き上げているのか、そのことへの回答は一切ない。

「時々ギギネブラが卵を産みつけていくんだが、とにかく子沢山でな。この地方では新婚の夫婦に子宝に恵まれることを祈ってギィギを形作った置物を送る風習がある」

膝を折り、ギィギを優しく床に降ろす。すると、ギィギはその手を必死に動かして、お腹を擦りつけながら闇の中へと向かっていく。その姿はよちよちと歩く赤ん坊を連想させなくもない。

腰に力が戻り、ようやく立ち上がることができた。

この女、人をからかうことにかけては天賦の才に恵まれているらしい。初対面の時に感じられた洗練された雰囲気は今も変わってい

ないが、別の何かが印象に加えられようとしていた。

「さて、では訓練を再開しようか。まだ日没まで時間がある。叫ぶ元気があるなら、まだまだいけそうだな」

松明が消され、闇の中に魔女の静かな微笑みが消えていく。その顔に、凍土を凍り付かす冷気以上の寒気を覚えた。悪魔に魅入られた女は、セントポーリア――帰り道を知らず、松明は魔女しか持っていない――を闇の中へと放り込んだ。

セイレムの里は、山の中にある施設らしく温泉を有していた。温泉の溜まった池を木の仕切りで男女用に分けているだけの簡単な作りで、壁は洞窟そのままである。脱衣のための小屋がなければ、寒風が吹き付けてくることだろう。

お湯の暖かさが芯まで冷えきった体を温めてくれる。そう、体は芯まで冷えきっていた。

「何が魔女よ。あれじゃ、鬼か悪魔じゃない……」

訓練は、あれからも続けられたが、セントポーリアは結局、一度も闇の中の魔女の姿を捉えることはできなかった。何故かことある毎に驚かされ打ちつけた体に、温泉がしみた。

温泉には他にも何人かの姿があった。雪国育ちらしく、誰も白い肌をしている。そんな肌の色の人に囲まれていると、自分の肌の白さが如何に病的であるのかがよくわかる。

何人かは見慣れない顔に興味引かれたらしく、こちらを見てきたが、すぐに興味をなくしたように温泉を楽しむことに戻った。恐らく、アレスから話が伝わっているのだろう。

もっとも、中にはなかなかこちらから目を離さない娘がいる。

魔女を少し幼くして、自信を取っ払った上でおどおどとした態度を付与したような少女である。体を小さくして湯船に浸かっている。魔女が話していた妹ではないだろうか。

「ねえ、あなた？」

「ご、ごめんなさい」

恫喝したつもりはなかった。ただ、ちょっと話を聞きたかっただけだったが、少女は怯えた草食種アプトノスのように出ていってしまった。

入れ替わり、入ってくるきたのは、魔女である。やはり、セントポーリアの控えめな体とは違う。年齢は八つ上の２０と聞かされている。やはり八年の差というものは、それほど大きなものなのだろうか。

髪を頭の後ろで束ね、ゆっくりと温泉に浸かる姿は、何かこう、大人の色香というものを感じさせる。

「あまり妹を苛めてくれるな。あの子は人見知りが激しい」

それは言われなくてもわかる。ちょっと知らない人に声をかけられたくらいで逃げ出すくらいなのだ。

「暗い場所ばっかり歩いてるからいけないんじゃないの？」

顔を合わせる必要もなければ、視線を交える必要もない。そんな闇の中での狩りばかりしていれば、人との距離感の取り方を忘れてしまうかもしれない。少なくとも、人の顔を見ることが不慣れになってしまいそうだ。

「かもしれんな」

姉の方はこんなにも図太いのに。こちらがまじまじと眺めても、一向に気にした様子がない。

「ねえ、アレスとは、どんな関係なの？」

「男と女の関係だ」

「な！？」

セントポーリアも十二になる。子どもではない。その言葉の意味するところを察して、温泉の湯気以外の理由で顔が高揚することを感じていた。

つい体が必要以上に力んでしまい、危うく溺れかかった。

「私は女で、あいつは男だ。その二人の間柄、だろう」

どうやらからかわれたらしい。

赤く火照ったことを隠すように温泉に顔を半分ほどつけながら睨

みつける。どうしてもペースを握られ、魔女の言いように進んでしまう。魔女は大人の余裕を見せつけるように、静かに笑うばかりであった。

第四話「赤眼の王女と七人の魔女」（前書き）

まだ今回のメインターゲットは出てきません。

第四話「赤眼の王女と七人の魔女」

さすがに何日も通い慣れれば、訓練の場所にたどり着くくらいどうとでもない。松明の明かりに頼らなければならないのは仕方がないが、セントポーリアは一足先にいつもの場所を訪れていた。

魔女に先駆けてここに来たことに特に意味はない。敢えて付け加えるなら、ちょっと気になるものを眺めるためだ。

松明で照らす先、そこには七つの石碑が並べられていた。そして、固い氷に突き立てられた錆びた大剣。石碑は不規則に並べられ、大剣がその中心に突き立てられている。

どう見ても人工のもので、誰かが酔狂で作ったとするには、人の胴体ほどもある石碑は重すぎる。これが何であるのか、魔女は意図的に話題に乗せないようにしていたように思われる。

さて、これは一体何なのか。

セントポーリアは物音に振り向いた。里に来て以来受け続けている訓練は、着実に成果を上げているらしい。聴覚自体に変わった印象はないが、小さな音が意識に上がるようになっていた。

松明の光が届くぎりぎりの場所には、老婆が立っていた。厚手のコートを着込み、フードの下に覗く顔はしわが深い。鼻が高くて、ちょっとしたお伽話の魔女のようである。

「こんにちは」

しわがれた声で、老婆は挨拶をした。ゆっくりとセントポーリアの方へと歩いてくる。

「セントポーリアちゃんだね。アレス君から話は聞いているよ」

城では誰もセントポーリアちゃんだなんて呼んではこなかった。少々面食らってしまう。

「えっと、あなたは？」

「ヘラと言ってね、この集落の族長を務めておるよ。みんなと同じように、ヘラばあさんとでも呼んでおくれ」

思えば、一度だけ顔を合わせたことがあっただろうか。ただ、その時はアレスに任せっきりで、ろくに顔なんて見ていなかった。

「ごめんなさい、満足な挨拶もしなくて」

「いいさ。それより、訓練は辛くはないかい？」

セントポーリアの側で立ち止まった老婆は、頬骨をつり上げて笑った。腰が曲がっているのに、視線の高さがセントポーリアとそんなには変わっていない。

ちゃん付けといい、姫として立場といい、どうも、この里の人間はセントポーリアのことをまず見くびってかかるらしい。

鼻息荒く返事しておく。

「このくらいで根を上げてなんていられないわ」

「そうかい。それは残念だね。私はセントポーリアちゃんがすぐに諦めて帰っていく方にかけてたんだけどねぇ」

「な！？」

つい目を見開いて老婆を見つめる。ヘラと名乗った老婆は、微笑みを崩すことなくセントポーリアのことを眺めている。

魔女と同じだ。この里の住民は闇を見通す力の他に、人をからかう術も伝わっているのではないだろうか。賭の有無は知らないが、どちらにしろ本気ではないようだ。

上体をふんぞりかえしたのは、お前の企みは見抜いたと伝えるための空威張りである。

「さすがは魔女の里ね。冗談がきついったらありゃしない」

「すまないねえ。ところで、これが気になったのかい？」

ヘラばあさんは笑いながら手を振る。食えない人とは、このような人のことを言うのではないだろうか。手はそのまま、石碑の方を指し示した。

「ええ、七つの石碑。それにさびた大剣まで飾られてる。ただごとじゃないんでしょ」

松明を近づけると、白い石碑に、炎の揺らめく黄色が写り込む。

「これはね、七人の魔女のお墓さ」

老婆の細く、骨に皮が張り付いただけのような指が石碑の一つを撫でた。

「この里にはね、お伽話があるのさ。森から悪魔がやってくる。それは音もなく、姿も見せずにやってきては、残酷で残忍な本能の命ずるまま破壊の限りをつくしていくというね」

声音は真剣な抑揚を含み、セントポーリアに口を挟むことを許さない。

「私らはね、悪魔がやってくる度に戦い、それを追い返してきた。でもね、その度に村で最も優秀なハンターを一人ずつ失っていったんだ。ここは集落のために戦い、そして散っていった魔女のお墓さ」

全部で七つ。よって、七人の魔女の墓。

「この石碑を見る度、皆誓うのさ。もうこれ以上の犠牲は出すまいと。ただ、それでも犠牲は増えていった。三人の魔女が四人の魔女になり、五人、六人、しまいには七人の魔女となってしまった。そしていつも思うんだ。八人の魔女にだけはしてはならないとね」

それは、新たな犠牲者を出してしまったことを意味するから。老婆が石碑から手を離すと、どこか重苦しい雰囲気が和らぐ。口を挟むなら今しかない。

「街に救援は頼まないの？　そんなモンスターがいるなら、討伐してもらった方がいいと思うけど」

「それができないんだよ。悪魔は水晶の森と呼ばれる場所から気ま

ぐれにやってくる。いつ来るかわからないし、こちらから打って出ることもできない。水晶の森には、誰も足を踏み入れることはできないのさ」

現実のようで、同時に非現実的なお話。人が踏み込めないだなんて、まるで呪いのような、空想の中にしかない力がなければ無理だろう。それでも、疑問を挟むには老婆の顔はあまりに真剣である。

「何だか、怖い話ね」

「悪魔が前に訪れたのは五年前。いつも決まって、厳しい冬の時だった。だから、今年は大丈夫じゃないかね」

老婆の乾いた笑い声が洞窟に響いた。失礼この上ないが、真夜中には聞きたくない声である。

「ちっとも安心できないんけど……」

魔女の里と呼ばれる住民がここまで恐れる相手というのは、孤島生態系の頂点に位置するというイビルジョーとかいう獣竜種のことだろうか。しかし、魔女が持っていたヘビィボウガンのことを考えると、そうとは考えにくい。もしかすると、大挙して押し寄せてくるのかもしれない。

嫌な想像をしてしまった。頭を振って、考えを振り払う。考えが潰えるにはもういい頃と視線を戻すと、目に付くのはやはり錆びついた剣である。

「じゃあ、これが、七人の魔女が使っていた剣なの？」

随分な錆びつきようである。いくら野ざらしとは言え、こうも劣化が進むものだろうか。太い刀身は刃の部分がなくなるほど腐食し、一回りほど小さくなっているようだ。一体何年放置すればここまでなるのか。

興味本位で、手を伸ばす。すると、すごい勢いで、枯れ枝のような手がセントポーリアの手を掴みとった。

「お触りでないよ。こいつには、悪魔を殺すための、悪魔の毒が染み着いているからね」

白い指は、後少しで剣に触れるところだった。気のせいか、指の先に弱い痛みがあった。これが、悪魔の毒なのだろうか。

ヘラばあさんは、セントポーリアの指が剣に間違っても触れてしまわないよう、ゆっくりと引き戻す。その表情は真剣そのもので、決して逆らわずなすがまま引き戻させる。

手が完全に剣から離れたところで、ヘラばあさんは柔らかく表情を崩した。

「おや、すまないね。客人を怖がらせてしまった。それに、あの子が来たみたいだ」

老婆の振り向きに合わせて闇の中に視線を送ると、確かに、足音が聞こえ始めている。セントポーリアが気づくことのなかったかすかな音を、ヘラばあさんは拾ったのだ。

やはり、魔女の里に棲むものは魔女であるらしい。

「ありがとね。こんな年寄りのお話を聞いてくれて」

「うんうん、結構興味深い話しだったし」

手を振って、ヘラばあさんは行ってしまった。入れ替わって姿を見せるのは、セントポーリアが唯一魔女と呼んでいる女性ハンターである。石碑の前にいるセントポーリアの姿を見つけると、何やら苦笑しながら歩み寄ってくる。

どうやら、面倒なことになりそうだと察したらしい。では、お望み通りにして差し上げよう。

「七人の魔女か。ここには何度も来てるけど、どうして話してくれなかったの？」

「どうしてここを訓練の場所にするか。それは、訓練を始める前に、この石碑に誓いを立てるためだ。もう2度と石碑を増やすことはしないというな」

魔女は話ながらセントポーリアの脇を通り抜ける。そのまま石碑を見つめ、視線を外そうとしない。

「だが、これはこの里の話だ。君には関係がない」

「それは、そうかもしれないけど……」

言い返すことができない。正論であること以上に、魔女の横顔がいつになく真剣であったからだ。考えてみれば何のことはない。七人の魔女は伝説などではない。少なくとも七人目の魔女は五年前――魔女と見知った仲であっても不思議はない――に命を落としたの

だから。

この五年前という数が、妙な既視感を与えた。

「ねえ、魔女のお母さんも五年前に死んだんでしょ。七番目の魔女って、もしかして」

その横顔は、いつになく気弱そうで、瞳はうっすらと潤んでいるように見えた。

「関係がない、そう言えば嘘になるな。死んだ魔女は、私の母、の従姉妹の友人の姉の夫の母の妹の娘が住んでいた家の隣の人だった」

「他人じゃない！　てか、従姉妹の友人て言う時点で完全他人！」

魔女の里に、ミスカトニック第二王女の怒鳴り声が高らかに響きわたった。

暗闇の中。聞こえるのは獣が足を擦りつける音と、その荒々しい吐息。音。意識をしてみると、モンスターほど音の塊はそうそういないだろう。歩けば足音がして、羽ばたけば羽音がする。

そして、闇の中とて、完全に姿が見えないわけではない。

かすかに見えるモンスターの姿と、聞こえてくる音。それらを統合して、敵の動きを掴みとる。

見えたのは足が雪を踏みしめるかすかな姿。前足、後ろ足、さて、

どちらだろう。音は、その設置面積の広さから前足だと告げてきた。

見えずともわかる。モンスターがこちらへと振り向こうとしている。吐き出される息の音から頭の位置を掴み、目の輝きがそれを確信させる。

狩猟笛を両手で振り上げ、見えない闇の中、頭を狙って叩きつける。準備していたタイミングで伝わる鈍い衝撃。雷電袋の発する雷が瞬き、モンスターの白い体を明らかにした。セントポーリアが見ている前で、氷牙竜ベリオロスの琥珀色の牙が砕け落ち、ベリオロスもまた、断末魔の悲鳴を奏でる。

そして、二度と起きあがってくることはなかった。

一瞬の雷が止み、また訪れる暗さ。その中から拍手が聞こえてきた。

「ベリオロスの相手がそこまでできるなら大したものだ」

今ではもう、よほど変則的なことをされなければ音だけで位置がわかる。魔女のいる方へと一応目を向けてみる。何も見えはしないが、視力に頼りきる人間の癖だ。

これまで何度もモンスターにとどめをさし、その度に讃えられ、そして憤ってきた。ただ、今は、あまり悪い気はしない。

「狩りはこれが初めてじゃないからね。まあ、目にほとんど頼れないのは、さすがに疲れたけど」

照れ隠しに顔をそむけてから、ついそんなことしても意味がない

と気づかされた。闇の中、どうせ見えてなどいないのに。

思えば、魔女とは一日の半分を一緒にいても顔を合わせないで過ごしてきた。別に仲が悪いわけではないが、そういうことだ。魔女の妹が人の顔を見ることができない性格に育ってしまったのも頷ける。

狩猟が終わると、することがない。本来ははぎ取りに参加すべきなのだが、さすがに暗闇での作業に参加することは許されなかった。同じ狩りを共にしたハンターの肉を切り裂く音を聞いていることにする。

「大物ですよ」

若い女性の声。確かイシュタルとかいう、里のハンターの一人だ。若いとは言ってもセントポーリアよりも年上で、どんな顔をしているのかはわからない。はじめから闇の中で紹介され、闇の中で狩猟を終えてしまった。実際、外で会ったらわからないのではないだろうか。

「これで今年の寒冷期を越すことができそうですね」

セントポーリアが里を訪れたのは繁殖期の中頃。今ではもう温暖期が終わりを迎えていた。

厳しく辛い、寒冷期がやってくる。

寒冷期の間、雪山や凍土のような寒冷帯は原則立ち入りが禁止さ

れる。ホット・ドリンクのような道具で誤魔化すにはあまりに厳しい寒さであるからだ。

そのため、寒冷帯の狩猟は繁殖期、温暖期の間に必要な分を狩って、その後は狩りを休む。セントポーリアたちがしとめたベリオロスが必要な最後の狩りであったため、里では休むための準備を始めていた。

早い話が、祭りが行われているのである。年に一度。自然の恵みへの感謝と来季の安全を祈るお祭りは、里の中央にともされた大きな篝火の周りで盛大に執り行われていた。

祭りの中心から少し離れた場所におかれた椅子に座って見ていると、篝火の周りでは男女が一組になって踊っていた。出稼ぎに出ていた男たちが帰郷しているのだろう。里の人口が一気に増えたように賑わっている。

祭りに加わらないのは、別に騒ぎが嫌いだとかそんなひねくれた理由からではない。ただ、火のような強い光に近づくことが躊躇われた。

そうしている内に、一人の男が断ることもなく隣に座った。別に遠慮されるような間柄ではないが、相変わらず、無遠慮な男である。

男、アレスは傷ついた方の目を向けて、その顔は少し笑っていた。

「どうだ？　少しはものになったか？」

セントポーリアをおいてとっとと別の狩猟に出かけた分際で、ずいぶんと偉そうである。まあ、この里を紹介してくれたことで帳消

しにすることにしよう。

「まあね。結局、超人的な耳なんて持てないから、視力と組み合わせて戦うことにした」

しかし、今最も鋭敏に働いている器官は嗅覚である。アレスが口をつけたグラスから漏れてくる強烈なアルコール臭が鼻についた。寒い地方の酒は、度数の高いものが多い。そんな話を思い出した。

「あいつに預けたことは正解だったようだな」

寒冷地の酒の飲み方に慣れていることといい、魔女との親しげな様子といい、セントポーリアに聞かせたような一期一会の関係でなかったことは容易にうかがいしれる。

「ねえ、あの魔女とどんな関係なの？」

「まあ、恋人だな。俺も流れのハンターだ。ここに定住している訳にはいかないが、必ず一定期間ここを訪れることにしてる。もちろん、あいつに会うためにな」

やはり、酒の臭いがきつい。嗅いでいるだけで気分が悪くなる。それこそ、胸の奥が苦しい感じさえした。

「結婚とか、考えたことないの？」

「一度申し込んだことはあったが、断られた。することがあるんだそうだ」

そう言うと、アレスは再びグラスに口をつける。先程よりも口に

含む酒量が多い。まさか、やけ酒ではないのだろうが。

「ところで、お前はどうする？　ここでハンターとして暮らすつもりはないんだろ」

「そりゃ、そうだけど……」

答えに窮したのは、突然話題を振られたこばかりではない。

「お前はまだ肝心なことを話していないな。優れたハンターになりたい、そこまではわかった。だが、ハンターになって何がしたいのかがわからない」

アレスがグラスを床に置いたのは、単に飲み終わっただけだからだろうか。それとも、酒を飲みながらする話ではないということだろうか。

「お前はミスカトニック王国の王女だ。しようと思えば、椅子にふんぞり返っているだけで一生安泰で暮らしていける。違うか？」

違わない。ムキになって否定しようとしたところで、それを裏付ける根拠がないから黙っておく。

「お前がハンターになったのは、親への当てつけか。確かにお前は体に障害を抱えている。親はそんなお前を心配して、つい過保護に、過剰な心配をかけてしまうことも頷ける。お前は、それが嫌だったんだろう」

「別に、心配かけたい訳じゃないよ。ただ、外に出るな、日の光を浴びるなか、息が詰まっただけ」

「それなら、別にハンターでなくてもよかったはずだ」

いつもは話を聞いていればよかったのに。

「別に、きっかけなんてないよ。ただ、ハンターのお話を聞いて、勝手に憧れてただけ。ハンターのこと、人々のために命がけで戦う英雄みたいに思ってたから」

それが違うということにはすぐに気づいた。多くのハンターにとって狩りは生活のための手段であり、危険な仕事ではあっても命をかけてなどいない。

「なるほどな。それなら不満だったろう。優秀なハンターに守られて、ハンターの真似事をさせられているだけの狩りには。王国から離れれば、そんな狩りができると思ったか？」

わざわざ答えようとは思わなかった。肯定するまでもないだろうと判断したからだ。

「七人の魔女はな、お前の言う英雄に間違いないだろう。しかしだな、魔女たちは、死ねて嬉しいと思うか？　大切な人たちを残すことになる。まだまだやりたいこともあっただろう」

アレスは何かあるとすぐに説教くさくなる。以前、自分の身勝手な行動で大勢の人に迷惑をかけたという経験が、軽率な行動を戒めるのだろう。危うく失明するほどの傷を受けながら、アレスはまだ自分のことを許せていない。

「死にたがりは英雄にはなれない。失いたくないほど大切なものが

ありながら、そのために命を落としたものこそ英雄と呼ばれてしかるべきだ。英雄になんてなれなくてもいいんだ。ただ、もし英雄にはなりたいのなら、まず自分とその周りの人を大切にしろ」

周りの人と聞いて、思いついたのはアレスや魔女。そして、お父様にお母様、お姉様のことであった。王女の地位だとか、そんなものに何の未練もない。だから、魔女から姫としか詠んでもらえないことが嫌だった。反対に、アレスには姫と呼ばないからこそ、信頼を寄せていったのかもしれない。

そして何より、アレスは――多少説教くさかろうと――優れたハンターであった。

「失いたくないものがある。守りたいものがある。そのために死にたくない、もっと生きたいと必死に思って、とにかく泣いて、それでも命をかけることができたのだとしたら、それは尊い」

アレスはこう言いたいのだろう。死んでもいいなんて考えて死んでいった人よりも、死にたくないと最後まで足掻いて、戦って、それでも守りたい人を守るために死を選ぶほかなかった人の方が、英雄と呼ばれるに相応しい。

それだけの思いと覚悟を胸に戦ったからだ。

セントポーリアに、果たしてそんな覚悟があるだろうか。英雄に憧れながら、とても英雄のような戦いはできそうにない。

「俺は、そんなやつらを英雄と呼んでやりたい」

そんなことを言いながら、アレスはセントポーリアの頭に手を置

いた。

「セントポーリア、お前は、英雄になんてなるな」

死ぬんじゃない。そう気遣われて嬉しくなかったわけではないが、子ども扱いなんてされたくない。ムキになってその手を振り落とした。いきなり激しい運動をしたのだ。多少顔が赤くなっても仕方がない。

大きく呼吸して、気分を落ち着けた。

「アレスにも、守りたい人っているの？」

「いるさ。ここにはいないがな」

ここには、魔女の姿はなかった。

第四話「赤眼の王女と七人の魔女」（後書き）

次話で、メイン・ターゲットは出てきますけど姿は見せません。

第五話「赤眼の王女と悪魔の来訪」（前書き）

今回ちょっと短めです。

第五話「赤眼の王女と悪魔の来訪」

そこはセイレムの里を抜けて、月が照らす小さな丘の上だった。里ではまだ宴が続いていることだろう。それでもセントポーリアが途中で抜け出したのは、他にも抜け出している人物を探すためである。

せいぜい三mほどの壁を、わずかな手がかりを頼りに上ると、丘の上は広く開けた場所になっていた。セントポーリアから見て左側、崖のすぐそばに目当ての人影があった。

今夜は寒冷期が近いにしては比較的気温が高い方である。吹雪いてもいなければ、雪も降っていない。地面に残された足跡をたどるように、セントポーリアは進む。

あくまでも比較の問題として暖かいだけである。もちろん、寒くないわけではない。毎晩寒風の中、魔女は崖の下を眺めている。

「こんな場所にいた」

呆れながら声をかけた。魔女はハンターとしての完全防備をしたままで座っている。その眼差しは前を向いたまま、微動だにしない。

「魔女？」

明らかに反応が鈍い。魔女の横顔に、こちらに気がついた様子はなかった。

「ねえ！」

声を張り上げたことで、ようやく魔女は気づいた。瞬きを一度。それからセントポーリアの方へ首を曲げる。

「おや、姫か。さては、アレスが話したな」

そんなに注意を引かれるものでもあっただろうか。

崖の下には森が広がっている。果てしなく大きく、広く、その端は地平線の向こうに消えている。特徴を挙げるとすれば、木々が全体として白く、そして月明かりを異常なほどに反射していた。

それこそ、水晶が木の形をしているみたいに。

「あれが水晶の森？」

「北海から吹き付ける風が強風のまま通り抜け、またセイレム山を吹き降ろす過程で暖められた大気が蓋をして冷気を閉じこめる。おまけにセイレム山の北側にあるせいで、温暖期にさえまともに日の光が入らない」

聞くからに寒そうな場所だ。見ているだけで、魂まで冷えてくる思いがする。

「結果として、あらゆる水分は凍り付き、鋭いナイフのような枝を伸ばす。ハンターの大剣でも砕けなければ、ホット・ドリンクなどものの役にも立たない極寒の世界だ」

空気中の水分が木にまとわりつく形で凍結し、それを繰り返すことで木を完全に包み込み、白く染めてしまうのだろう。そして、強

烈な冷気で凍り付いた氷が極めて高い強度を有することは想像に難くない。

なるほど。人が踏み入ろうものなら氷の枝に体をずたずたにされてしまう。冷気はホット・ドリンクのようなその場しのぎでは役に立たない。

猟団を結成しても、森に立ち入るだけで多大な労力と犠牲を必要とすることになる。

「ここが、悪魔の棲む森だ」

悪魔は潜む。人が、ありとあらゆる命の存在を許さない森の奥で。再び、暴虐に身を任せるその日まで。

暗闇の中に潜むことは、目に依存しないことにはもう慣れてしまった。

音を聞き、闇の中に揺らぎを見る。聴覚が方角を拾い上げ、視覚と統合する形で距離を算定する。

ゆっくりと手を伸ばし、意識した一点を指さす。

「そこ！」

何かが擦れる音。すぐに松明に灯された光が闇を和らげた。その松明を持つ少女は、セントポーリアが目星をつけた場所に立っていた。

「正解です。だいぶ、捉えられるようになってきましたね」
「まあ、私にはあんたがこうして口利いてくれるようになったことの方が大きな成果だけど」
そうは言いながら、少女、魔女の妹であるスノードロップは目を合わせてはくれない。多少慣れてはきても完全ではなかった。
「まだ顔を合わせるのは難しいか」
まさか闇を見通すよりも一人の少女の視線を見ることの方が難しいとは思ってもみなかった。
松明が消されると、再び闇が包む。セイレムの魔女にとて、闇とは恐怖の対象ではなく、守ってくれる衣のようなものなのかもしれない。スノードロップの声は光の中よりもしっかりと通る。
「じゃあ、今日は早いですけど、これくらいにしましょう。実はお肉が足りなくなってしまって、ポポを少し狩っておかないといけません」
ポポの肉は寒気に耐えるため脂身が多いため少々くどいが、雪国に暮らすものにとって貴重なタンパク源である。完全に寒冷期に入ってしまう前に狩っておかなければならないことは理解できる。
邪魔をすることはできない。
「そっか。でも注意して、何だか、今日荒れそうだから」

肉食獣は、草食獣に比べると大変脆い。草食の生き物は草をはむだけで生きていくことができるが、肉食の獣は他の生き物を捕食することでしたか生きていくことができない。

それを人間に当てはめるとわかりやすいかもしれない。草食種は一人でも生きていくことができるが、肉食獣は誰かに頼ることでしか生きていくことができない。

加えて、肉を食らう獣は臆病で卑怯である。自らの保身ばかりを考えて群れ、そして弱った相手をつけ狙う。

一人では何もできない。

太陽がセイレム山の向こうに落ちて行く。緩い風が、それでも吹雪を予感させて吹き抜ける。

鳥竜種バギィは一人、雪原に打ち捨てられていた屍から、骨にこびりついた肉を剥がすように食事をしていた。

本来、バギィは群れる生物である。ところが、群を率いていたドスバギィがハンターに狩られたことで所属する群を失ってしまった。体重の軽い鳥竜種では、たとえ子どものポポとて狩るのは大きな労力を必要としてしまう。このまま他の群と合流できなければ、今わずかな食事にありつけた屍と同じように他の誰かの腹を満たすことになるだろう。

骨に噛みつくようにわずかな肉でも得ようともがくバギィは、突然口を離し、首を持ち上げた。細い首の先の小さな頭――とは言え、

人間の子どもほどもある――を小刻みに動かし、あたりをうかがう。

何かが見えたわけではなかった。雪の混じる風の中、危険を告げるものは何もない。

血の臭いが漂ってはいない。獣の声を聞いた訳でもない。何より、周りに風に揺れる木々や雪に覆われた大地以外の何者も見えることはない。

安心して食事に戻ろうとするバギィ。屍へと下ろされた首がくの字に折れ曲がり、断末魔の悲鳴もなくバギィの体が地面を転げ回る。地面にくずおれたバギィは完全に息絶えていた。首には赤黒い圧迫痕が残り、だらしなく開かれた口からは血が流れ出していた。

何があったのか。何故自分が死んでいるのかさえ、バギィは理解していないだろう。そして、誰も理解できない。

バギィの体がゆっくりと浮かび上がる。あまりに異質な光景であった。翼もない。支えられてもいない。それでも、バギィの体は完全に雪の大地を離れ、力を失った首が歪な角度のまま垂れ下がる。

かすかに風景が揺らぐ。目の錯覚かと疑うほどかすかに。その錯覚はゆっくりとバギィの死体を包み込むと、骨と肉とが押しつぶされる音がした。肉の間を粘性の高い液体に包まれたものが進んでいく音。何かが何かを飲み込む音がした。セイレム山には再び静寂が訪れた。

ただ一つ、バギィの吐いた血が残した染みだけが、ここで起きた惨状を唯一物語るばかりである。

寒冷期が間近にまで迫っているというのに、魔女は毎晩の日課をやめようとはしなかった。セントポーリアは時々――毎日していては体がもたない――、横に並んでは水晶の森を眺めた。

今晩はまだ魔女は来ていない。

悪魔が棲む森は、いつもよ変わらず、まるで時間さえ凍り付いた情景を維持していた。

本当に、毎日変わらない森の様子を眺めて、何がおもしろいのだろう。

そうしている内に、魔女が雪を踏みしめる音を発しながらやってきた。やはり、そんなに意識していなくとも足音くらい気づくことができる。

「今日は私の方が先」

手を振ると、魔女も軽く手を振ってくる。

「毎日毎日水晶の森なんて見て、楽しいこともないだろう」

それはこちらのセリフである。そう言ってやりたいので、言ってやることにした。

「じゃあ、魔女はどうして森なんて見てるの？」

「大切な仕事だからだ。こうして森を眺めることが……」

森を眺める魔女の顔が見る間に変わっていく。瞳孔が開き、目が見開かれ、頬の筋肉が張りつめた。

「どうしたの？」

こんな魔女の表情は初めて見た。

「急げ、姫！」

突然何の説明もなく里の方へと走り出した。急いで後を追う。

「だからどうしたの！？」

「奴が来たんだ。水晶の森の悪魔がな！」

魔女は振り向きもせずに答えた。五年前、里を襲った悪魔が再び現れたのだと。

里は騒然としていた。無理もない。悪魔が現れたのだから。戦えない者は家の奥に閉じこもり、ハンターが思い思いの装備で慌ただしく動き回っていた。

今里にはハンターの姿しか見えない。こんな偏った光景はそうそう見れるものでもないだろう。

セントポーリアは事態をただ見守っているしかなかった。

族長であるヘラばあさんを中心に、アレスや魔女、主だったハンターが集まっていた。それを、遠巻きに眺めているのである。

「まさか今年とはね。油断していたよ」

声は、十分に聞くことができる。

「無理もない。いつもなら、ベリオロスでさえ出歩けないような吹雪の日に奴は現れる。それこそ、セイレム山そのものが水晶の森にでもなったような日にな！」

名前も知らないハンターが吐き捨てるような口調で怒鳴り散らした。緊張と、ある種の苛立ちがここにまで伝わってくる。

里の入り口で、初めて訪れた時に見た大きな扉がゆっくりと閉じられようとしていた。まだ、ここにスノードロップの姿がないのに

「ねえ、スノードロップは！？」

思わず叫ぶと、ヘラばあさんを中心とした一団がそろってこちらを向いた。

「まだ、帰っていないよ」

ヘラばあさんの言葉に、空気が一段と張りつめる。それを軽く笑ってすませたのは、魔女ただ一人だった。

「ちょうどいい。私がさがしてくることにしよう」

ちょうどいい。まるで何かのついでのような気軽さで、魔女は歩

きだした。大口を開いたボウガンを背に、防具はすべて身につけている。これから、悪魔と戦うかもしれないというのに、魔女は笑っていた。

怖くはないのだろうか。得体の知れない相手と戦うことが。

「俺も行こう」

歩きだそうとするアレス。すると、魔女はこの時ばかりは真剣な様子で、それを制した。

「いや、アレスは村を守ってほしい。スノードロップは必ず村に戻すから」

村に戻す。違和感があった。なぜ、連れ帰ると言わないのだろう。

「しかし！」

「これは私の役目なんだ。それに、村が襲われたんじゃ、もともこもない。アレス、私は君を頼りにしている。わかってくれ」

アレスは黙ってしまった。互いの信頼を人質にとられては、見送るほかないのだろう。

いくつかの疑問と違和感。魔女をこのまま行かせたくないのは、単に信頼できるハンターが自分のそばからいなくなってしまうことへの焦りだろうか。

何だとしても、このまま行かせたくなんてなかった。

「魔女！　私も行く！」

とっさに思いついた理由は、セントポーリアを助けたいから。それは確かなようで、後から無理矢理こじつけたものでしかないような気もする。

ただ何にしても、魔女をこのまま行かせたくなくて、ついその手を掴んだ。

「姫は……」

「別に足手まといにはならないし、危なくなりそうだったらちゃんと逃げるよ。それに、もしかしたらスノードロップが怪我してるかもしれないし、人手は多い方がいいでしょ！」

どうせアレスほど里の防衛には役立たない。とは、さすがに言えなかった。魔女は笑いながらため息をついた。

「わかった。協力してもらおう。ただし、逃げるべき時はしっかり逃げるんだぞ」

「わかってる」

風が吹いて、雪が横から降ってくる。こんなことは雪国では珍しいことではない。寒冷期にでもなれば、毎日吹雪いているような場所だからだ。

ただ、慣れていることと耐性がついていることは違う。セイレム

山の麓で育ったスノードロップだとしても、太陽がしずみ、吹きすさぶ風には肌寒さを覚えた。

それは、後ろを歩く相棒も同じはずだ。

同じくポポを狩りにきたのはスノードロップよりも一つ年上の女性である。名はイシュタルと言い、スノードロップと同じくバギィから作られた防具を身につけている。もっとも、弓を使うスノードロップに対して、イシュタルは片手剣を使う剣士であるため、デザインと構図に若干の違いが見られる。

スノードロップの耳にも、内部構造の違いが音として届いていた。見るまでもなく、音からイシュタルの様子はわかる。両手を頭の後ろにおいて、ふてくされているのだ。両手を下げているにして風のあたり方がおかしいし、何より、不機嫌そうな声が聞こえていた。

「今日は全然ポポが見つからなかったな～」

獲物としたかったポポが見つからず、成果のないまま、2人は歩いていた。

「そんな日もありますよ。今日は……！」

風の音。足音。服のこすれる音や、武器のかき鳴らすやかましい音。そんな聞こえていて当たり前の音の中に、何かが混ざった。

スノードロップは、狩りの腕はまだまだだが、聴覚に関しては里でも指折りの能力を有している。突然立ち止まり、何もない方向を振り向くと、イシュタルが驚いたような声を上げた。

「な、何？」

その瞬間。風を切る音と、大気を裂く音。そして、強く打たく音しか、聞こえなかった。

イシュタルの悲鳴は聞こえない。何が起こったのか見えていない。ただイシュタルの体が浮き上がり、体勢を崩したまま雪原に叩きつけられた。

「イシュタルさん！」

何かに吹き飛ばされた。では何に。

ハンターの鉄則として、倒れた仲間にかけよってはならない。どうせモンスターの攻撃をくい止めることができるわけでもなければ、複数のハンターが一カ所に集まることで狙われる確率が増大してしまうからだ。

スノードロップは弓を構え、状況の認識に努めた。

突風が吹いたのでは説明がつかない。雪に足を滑らせたわけでもない。何かがイシュタルを叩き飛ばしたのだ。

では何が。

風に混ざるまばらな雪。薄く積もった雪。遮られ、かすかに輪郭を浮き上がらせる。踏みつけられ、そこに何かがあることを知らせてくれる。

しかし、見えない。夜闇の中だとて、月明かりが照らす雪原は十分に見渡しがきいている。それなのに見えない。

見えなくとも、何かがあって、何かがスノードロップを見下ろしていた。

「水晶の森の悪魔……」

震えた声は、寒さのせいばかりではない。

第六話「赤眼の王女と不可視の殺戮者」

「イシュタルさん、しっかりしてください！」

スノードロップの背には、意識を失ったままのイシュタルが担がれていた。

二人とも、バギィの皮を張り合わせた防具がところどころ破損し、青いはずの色の上に雪の白と、得体のしれない赤黒い色が浮かんでいた。

足取りは重い。二人分の重さを支える足は悲鳴を上げていた。まだ薄くしか積もっていない雪がひどく厚いものに感じられた。

目指すは里。洞窟に入り、七人の魔女の石碑が置かれている場所を抜けて里を目指した。

スノードロップは、いつしか振り向くということをやめてしまった。気にならないわけではない。確認したくないわけではない。意味などないからだ。

どうせ、悪魔の姿は見えはしない。気配を探ることもできない。

洞窟に足を踏み入れる。途端に風が止み、光が届かない空間が広がった。普段なら、この闇がスノードロップには安寧を与えてくれた。

誰に見られることもなく、それでいて、相手の位置を掴むことは楽にできるから。

足音が響く。洞窟に地形に反響して、その構造を伝えてくれる。スノードロップは自らの足音で地形を確認しながら、まるで見えているように闇の中を歩いた。

この聴力をもってしても、悪魔の気配に気づくことはできなかった。

闇は、もうセントポーリアを守ってくれない。

悪魔と戦い、命を落とした魔女たちの石碑が聞こえてきた。見えなくとも、すぐそこに魔女たちがいる。

「魔女様……」

助けてください。私に悪魔は倒せません。でも、魔女が戦えば魔女が死ぬ、そして、八人目の魔女をスノードロップは知っている。

「お姉ちゃん……」

意識が後ろに引っ張られた。音がしたのだ。糸のようなものが切れた音が、斜め後ろから聞こえた。人の頭の位置よりもさらに高い場所に張られた糸があったのだ。

では、何のために、そして、何故切れた。

スノードロップは足に力を込めた。一気に駆け出す。振り向くなんてしない。どうせ闇の中。そして、スノードロップは目以上に耳を信用している。

あいつがいる。水晶の森の悪魔が。追いつかれた。それともつけられたのか。

途端に騒がしくなる洞窟。悪魔の足音が聞こえた。息づかいが耳に届く。嫌な音ばかりが、それでも聞こえてきたわけではなかった。

とても耳慣れたリロード音が、スノードロップの向かう先から聞こえていた。

「全力で走れ！」

姉の声に、スノードロップは体を後押しする力を感じたようだった。

人には触れることのできない高さに糸を張る。単純明快な方法だが、悪魔は見事にそれにかかった。

暗闇の中、魔女の放つ貫通弾が飛び出す音が幾度も響くと、岩でもぶつかったような音が続く。悪魔の体がそれだけ固いということだろう。

姿は見えない。足音の性質からして、四足歩行の生物であるらしい。轟竜ティガレックスのような翼と前足がまだ未分化の種なのだろうか。

だとすると、狙いは前足か頭。安全性を優先して、セントポーリアは足を狙うことにした。狩猟笛を振るう。手応えは、不思議なものだった。何か柔らかい壁を叩いたような感触の後、岩にこすりつ

けるような感覚。二度に渡る調律を終えた狩猟笛はほどよく手に馴染み、弾かれるようなことはない。そうでもなければ攻撃を中断される形で大きな隙をさらしていたことだろう。

「何なのよ、こいつ！」

雷が爆ぜたのに、そのかすかな光はその姿を見せてはくれなかった。

「姫はスノードロップと里に迎え！　こいつは私が引きつける！」

次々放たれる発砲音。魔女が悪魔の注意を引こうとしている。

「こっちだ！」

魔女の駆けていく音。足音がそちらの方へと小さくなっていく。里に向かっているのはもう一つの足音。スノードロップたちの方へ、足早に向かう。

セイレムの里に来て最も大きく変わったことは、闇に対する恐怖が減ったことである。未知が既知に変わっていく感覚。すると、自然と恐怖は減っていった。それが再び悪魔の存在をとけ込ませたようにいつ鋭い爪が突き立てられてもおかしくないような恐怖に襲われるのは、まだ私は消えてなどいないと、未知が警告を発しているのだろうか。

洞窟から雪原に出る。この時まで、魔女は確かに自分を追う足音を聞いていた。出口の左側は崖。右側は丘になっている。聞こえる

方向などわからずとも、聞き逃すはずがない。

囮を買って出たつもりが、どうやら振られてしまったらしい。

人数では姫たちの方が多いが、それでもなお御しやすい相手と判断したのだろう。

「お前は、そこまで相手を選ぶのか！？」

まったくもって異常である。あれがモンスターか、あれが動物か。

命さえ凍り付かせる森に棲み、まるで食欲を満たすように殺戮する。火竜リオレウスとて、満腹の時は草食種アプトノス子どもを襲わないというのに。

だから誰も奴を呼ぶ術を知らなかった。そう、悪魔という名前以外には。

途方もないほどに静かで、時折里を吹き抜ける風さえ耳障りに感じる。

アレスは強大な防御壁の裏側に設けられたアロースリットから洞窟を覗いていた。扉に3段にわたって設けられた床は狭く、居心地のいいものではない。白と青とが混じりあった寒冷帯特有の岩肌が何とも寒々しく、スリットを吹き抜けた風が鎧の上から体を冷やす。目がすぐに乾き、瞬きの回数が多くなっていた。

つい、耐えきれなくなって目をスリットから離す。風を浴びない

だけでも随分と違うものだ。

床には、アレスの他に何もの女性ハンターが完全防備の状態で目を閉じていた。さぼっている訳ではない。耳を頼りに生きる魔女たちにとって、視力は時に邪魔になるのだ。

実際、里に近づく足音に気づいたのは、魔女の一人だった。

「戻ってきたぞ！」

すぐさまスリットに視線を戻す。すると、洞窟の暗がりの中からバギィ装備――どこかの軍服のようなデザインだ――のスノードロップが他のハンターを背負っていた。その後ろには背部を警戒しながら歩くセントポーリアの姿があった。

残念ながら四人目の姿が見えないが、彼女のことだ、囮を買って出たのだろう。

こうしている内に、魔女たちが慌ただしく動いた。扉の脇には人が屈んでようやく通ることができる程度の小さな扉が設けられている。緊急用の扉である。これを用いれば、安全に仲間を里に入れることができる。

しかし、族長はそのことさえ許さなかった。

「開けるんじゃないよ！」

門を見渡せる場所から響いた声に、魔女たち、そしてアレスは動きを止める。そして、突如魔女が揃ってスリットへと殺到する。何かを聞いたのだ。

アレスも顔を近づけると、扉の近くのスノードロップを庇うように狩猟笛を構えるセントポーリアの姿が見えた。ここからでは顔は見えないが、緊張の糸が張りつめている様子がよくわかる。

何かがいるわけではない。しかし、魔女たちは誰一人として警戒を解かない。アレスとて、まるでモンスターに射竦められているような気味の悪さを感じていた。

誰も、何もここにはいないというのに。

いるがいない。見えないがいる。

「姿が……、見えない……のか？」

里の者は悪魔について多くを語りたがらない。アレス自身、漠然とした印象しかなかった。まさか、姿を消すことができるとは思いもよらなかった。

自然界にも擬態する生物はいる。しかし、それは姿を他の何かに似せる、あるいは色を変える程度のもので、人の視覚ならば注意を払えば察知できることが多い。では、どれほど目をこらそうと、関心を払おうと冷たい岩肌しか見えない今の状況をどう説明できよう。

「これが悪魔か……」

「そうさ、お伽話、民話、そして神話。何だっていいさ。これが恐怖なのさ。人が考えついた飛びきりの恐怖さ。悪夢からの来訪者なのさ！」

どこいいるのかもわからない。見当違いな場所を見ているのかもしれない。誰もが確信のない憎悪と敵意を虚空へと向けている。

空振りの睨み合いが、どれほど続いただろうか。耳を鍛えていないアレスにさえ、隣のハンターに息づかいが聞こえてくるほど静寂と沈黙が肌を刺す。

緊張が突然晴れた。何がきっかけであったのか明言することは難しい。まるでどのような緊張の中でもふと気を抜いてしまう一瞬。この場の全員が同時に油断したかのように、空気が和らいだ。

アロースリットから目を離さなかった魔女たちが、戸惑ったように顔を見合わせていた。

「行ったの……？」

一番危険な場所にいるはずのセントポーリアが一番混乱しているようであった。

少なくとも、奴がここにいるという確信はぬぐい去れている。同時に、いないとも言い切れない。

「よし、俺がサポートにつく。非常用の扉を開けろ」

高さにして二階ほどの位置にある床から飛び降りる。するとすでに扉の錠は外され、魔女の一人がアレスが前に立つまでしっかりと押さえていた。アレスの盾が扉の代わりを務めることが期待されているのだ。

扉が開かれ、アレスはランスを構えたまま――多少無理な姿勢を

せざるを得なかった――、狭い扉をくぐった。周囲を警戒しながら盾を構え、壁として立つ。後ろをスノードロップが通り抜けた。

次はセントポーリアの番だが、わがままな王女は、やはり聞き分けが悪い。

「ねえ、魔女はどうするの？」

アレスの横に来たまではいいが、扉に入ろうとしない。

もっとも、アレスとて彼女を見捨てるようなことを望んでいるわけではない。

「お前は早く扉に入れ。救援には俺が行く」

白状するなら、セントポーリアがこれですんなりと言うことを聞くとは考えていなかった。どんな言葉が赤い唇から飛び出すかと身構えていると、声は意外な方向からやってきた。

しわがれた声が後ろから。ヘラばあさんだ。

「お待ちよ！」

警戒を解くことはできない。前を向いたままだ。セントポーリアの視線から、非常用扉から体を乗り出していることくらいなら察することができる。

「行くことは許さないよ。犠牲は、少ない方がいいからね」

「どういう意味だ？」

言葉は自然と棘を含む。

「悪魔は狡猾なのさ。大勢の狩猟団を結成した時には守りが手薄になった里が襲われた。里の守りを固めた時は一人で狩りをしていた魔女が襲われた。選んでいるのさ。モンスターが子どもを優先的に狙うことなんて比じゃないよ。弱い相手を、殺しやすい相手を選んでいるのさ」

疑問に思わなかった訳ではない。七回の襲撃で、何故ちょうど一人ずつ当時魔女が一人ずつ亡くなっていったのだろうかと。

「あれがモンスターなもんかい。化け物だよ。悪魔さ。そんな悪魔を、魔女はたった一人で退けてきたのさ」

背中越しの対話。

里が攻め込まれないだけの戦力を集め、そして、最小ながら最大の戦力で戦う。それが、一人のハンターという人の最小単位で、最強のハンターという最大の防衛力であるということなのだろう。

「今回はあいつの番だって言うのか？　村を守るために命をかけて戦えというのか？」

「こんな小さな里が、君のような流れ者のハンターに寛容な理由を知らないはずはないだろう。ここは重要な拠点だからね」

人は弱い。いくら装備が整えられ、道具が発展したとしても、寒冷地で生きられる訳ではない。必ず拠点を必要とする。ここ、セイレムの里はベリオロスやギギネブラなど寒冷地に生息するモンスタ

ーを狩るための拠点なのだ。

アレスとて、それを頼りにこの里を訪れ、また受け入れられた。

そんなことは、わかりきっている。

「私たちはここを離れるわけにもいかないし、離れるつもりもない」

だが、それで納得できるかと言えば、問題が違う。

槍と盾を背負う。これで、重心位置が整い、ずいぶんと歩きやすくなる。足は、勝手に前へと出た。

「そうやって、戦力を分散してしまったら、それこそ悪魔の思うつぼだよ！」

そして、意志が足を無理矢理押し留める。振り向いたのは、罵倒しやすくするためか、それとも感情論だけで動きたくなかったからかもしれない。少なくとも、言い負かすこともなしに、行動したくはなかった。

不退転の覚悟も、ヘラばあさんの顔を見た途端に、小さく消えてしまった。

「本当なら、お前を殴り倒してでも助けに行くところなんだがな！」

残された、やり場のない怒りだけが声を荒げる。

「お優しいね。老人を労ってくれるのかい？」

「減らず口は、鏡を見てから言うんだな」

この老人は気づいてさえいないのだ。自分の瞳から涙が流されていることを。

聞けば、ヘラはこれまで5度の襲撃を体験しているのだそうだ。言い換えるなら、里からすべての責任を押しつけた犠牲者を5度も見送ったことになる。そして、それを里の為と受け入れてきたのだ。

無理を通すには、アレスにはヘラの半分ほどの覚悟も責任も合わせ持ってはいなかった。

里の中に戻ろうとすると、思いも寄らない一言が背中に浴びせられた。

「魔女は、私が助けるよ」

「私、魔女を助けにいく」

アレスは驚いたような顔をして、傷の下の瞳が大きく開いた。

「馬鹿なことを言うな。お前一人が加わったところで、どうにかできる相手だと思うか？」

「だからだよ。いくらこの里に魔女がたくさんいても、襲われたら甚大な被害が出てしまうでしょ。アレスがいれば奴はここを襲わない可能性が高まるけど、私なんていてもいなくてもあまり変わらない。でも、魔女と一緒にいれば2人とも生きて帰れる可能性がわず

かでも高まる」

理屈っぽい男ほど御しやすいものも珍しい。正論さえ持ち出してしまえば、簡単に納得させられるからだ。

アレスは渋い顔をしていた。

「だが、お前が死ねば、国王はどうなる？」

「そのことも、アレスにはお願いしたいんだ。お父様はそんなことしないとは思うけど、もし問題になりそうだったら、これは私の意志だったことを証言して」

「馬鹿なことをいうな」

「頼んだからね」

アレスはどうせ里から離れるわけにはいかない。こちらが走り出してしまえば、追ってくることはできないのである。追いかけるには躊躇すると思われるくらい扉とは距離を開けてから、振り向くために立ち止まった。

「大丈夫。私は、英雄になんてなれないから」

正確には、なれない。アレスは何か言おうと、言葉を探している様子だった。しかし、うまい言葉を見つけられた様子もない。代わりに声をかけてきたのは、ヘラ――涙は拭われている――の方だった。

「セントポーリアちゃん！」

「止められても、聞くつもりないけど？」

「そうじゃないよ。ただね、一応心に留めておいてくれないかい？例のさびた剣の話さ」

さびた剣。そう言われて思いついたのは、もちろん七人の魔女が使っていたとされる朽ちた剣。

「あれには悪魔を殺す毒が染み着いている。もう力を失って久しいけどね、もしかしたら、助けになるかもしれないよ」

「ありがとう」

悪魔の毒。それがどれほどのものであるのかわからない。錆び付いた剣がどれほど助けになるだろう。

そんな軽い気持ちで、セントポーリアは里の人々に手を振った。

里の人が悪魔と恐れ、ぼろぼろの剣にまで期待を込める理由を考えもしないで。

悪魔は、やはり悪魔以外の何者でもないというのに。

第七話「赤眼の王女と古の剣」（前書き）

ようやくメインターゲットが姿を見せました。

第七話「赤眼の王女と古の剣」

悪魔は雪原を歩いていた。特に明確な理由があるわけではない。強いてあげるなら、壊すこと、そして殺すこと。それは呼吸をすることにも等しい。生物が息を吸い、吐き出す度にいちいち理由をつけないように。

全身からにじみ出る毒が悪魔に破壊と殺戮を強要する。殺戮の衝動を抑えることができないのだ。毒を一度放つと、それは放出し終えるまですべてを苛み、蝕む。

そして悪魔の体は、毒を放たずにはいられない。よって、蝕まずにはいられない。殺さずにはいられない。

光を完全に透過させ、姿を消す力は、しかし毒の放出を妨げる。時折姿を現し、その身に貯まった毒を吐き散らさなければならない。

悪魔は月明かりの下で、ゆっくりと姿を現した。

それは、何とも奇妙な生き物であった。

ごつごつとした体表は、毒々しい紫に覆われ、四肢を備えながら歪な形をした翼はあった。尻尾は平たく広く、どの生物種とも近縁を見いだす分類形質とはなり得ない。その頭もどうように平たく、大きく、太い首によって持ち上げられていた。丸く突き出した目がせわしなく動く。頭の先の角は鋭い。口からだらしなく飛び出た丸められた舌は口の前で伸び縮みを繰り返す。

悪魔が姿を現した途端、世界はそのおぞましさに震えた。

かすかな赤黒い光が雪を苛み、湯煎にかけられたように消えていく。むき出しの大地は悪魔の足から逃れないと身悶え、自ら砕けてしまった。無能な将に率いられる兵士と同じく、なす術なく突進させられる吹雪は、悪魔に触れた途端に次々と討ち死にを果たす。

悪魔は鳴いた。乾いた、他のどの生物とも異なる異端の声。そして、毒を吐き散らしながら飛び上がる。

紫の煙に混ざる赤黒い毒。触れたものから急速に腐食し、形と存在を失っていく。

悪魔が再び降り立った時には、そこには雪ではなく、雪に守られた大地でもなく、赤茶けた荒野が、丸く繰り出されていた。

そして、悪魔は再び姿を消す。

吐き散らした毒と、その惨状に満足したように。

セントポーリアは、ミスカトニック王国の王の娘として生まれた。アルビノとして生を受けた。

では、セントポーリアとは何者なのだろうか。

王女。しかし、王の娘らしい振る舞いと言えば、王の権威を笠に着てわがままを通しているだけでしかない。

ハンター。しかし、どこかの集落や村という拠点を持つわけでは

なく、ただモンスターを狩るだけの者がハンターと呼ばれる理由はない。

アルビノ。しかし、そんなことに甘えたくなんてなくて、だから必要以上に気を使われることがいつも嫌だった。

英雄。守るべき者も、大切な者もそのいっさいを持っていないセントポーリアにはすぎた称号である。到底、手の届かないものであった。

「アレス、私はきっと英雄になんてなれない。でも、今のままじゃ、私は何にもなれないよ、きっと」

姫でもない。ハンターでもない。アルビノであることには違いないが、それだけで判断されたいわけでもない。そして、英雄には手が届かない。

セントポーリアは走った。里から南の方へと進んで、日の入らない洞窟に入る。すると広がる闇。つい、悪魔のことを想像して体がすくんだ。見えていない以上、視界があろうがなかろうが、何も関係などないはずなのに。

魔女にさえなれないらしい。

闇の中をゆっくりと――どうしてもこうなってしまう――歩いて、思い出すのは魔女の言葉だった。

姫は姫だろう。

意味はよくわからない。あの時は、セントポーリアを単なる王国

のお嬢様と見くびった発言だと考えていたが、魔女の接し方は未熟なハンターに教授する以上の何者でもなかった。

「姫は姫だろう、か……」

闇は、セントポーリアの声だけを響かせる。

「じゃあ、姫って何さ……？」

国王の娘。しかし、それはあくまでも立場でしかなく、何か明確な職業でもなければ、生き方の指針でもない。お父様が国王をやめてしまえば、ただの娘でしかなくなってしまう。

魔女は、いつも肝心なことを教えてくれない。

音の反響具合から、魔女の石碑が近いことがわかる。里の魔女のように、音だけでも物の形がわかるような芸達者――スノードロップなど、目隠しをした状態で複雑な武器の形を言い当てて見せてくれた――ではない。ただ、何度も同じ場所を通っていると、音の癖というものくらいわかるようになる。

松明に明かりを灯すと、光がゆっくりと闇をはみ、魔女の石碑は姿を現した。しかし、そこには、大切なものがなかった。

「ない！　剣がない！」

どれだけ体を近づけても、松明の炎にさらしても、あるべきはずのものがなかった。石碑に守られるように中央に、突き立てられているはずの剣が存在していなかった。

「どうして、どうしてさあ！」

まさか悪魔が剣の力を恐れて持ち去ってしまったのだろうか。

別に錆び付いた剣に期待していたわけではない。しかし、手数の一つを失ってしまったということは、セントポーリアを自身が予測していた以上に動転させた。

意味もなく石碑の裏――剣が隠せるほどの面積はない――まで松明の光を送って、失望と落胆を繰り返す。極度に張りつめた感覚は、突然背中側から聞こえた物音に、断ち切られてしまった。

振り向こうとあがいて、うまく体勢を整えることができない。松明を取り落として、背中を石碑にぶつけてしまった。短い悲鳴を上げる。

ところが、地面に落ちてもなお燃え続ける松明が照らし出したのは、とぼけたように瞬きを繰り返す魔女の顔であった。

「姫、どうした、こんなところで？」

「魔女、剣が、剣がないの！　あれがないと！」

起き上がり魔女へと駆け寄る。もしかすると、すがりつくと言った方が正確であるかもしれない。魔女は冷静に白い吐息を吐いた。

「ないのは当たり前だ」

魔女が体を揺する。背負っていたものを片手で体の前にまで持ち出すと松明の光にかざす。

「私がもっているのだからな」

それは紛れもなく、凄くさびた大剣であった。

見上げると、魔女はウインクを一つ。

「悪魔に効くかもしれない武器が錆びている状態とはいえ存在している。試してみないわけにはいかないだろう？」

それは、凍土を構成する氷河の中から発見された。

氷河は一見固いように見えて、徐々に動いている。一度氷河に閉じこめられたなら、何十年もの間に長い距離を移動し、それが時折人の目につく表層に露出することがあるのである。

それはそうして氷河の中から掘り出された。

一見すると単なる巨大な錆の塊でしかなかった。しかし、微弱ながらもそれは毒を発し、氷河から取り出した途端に錆そのものが砕け落ちた。中から出てきたのは、平たく厚い刃の形をした塊を有する大剣であった。

発見したのは第三の魔女であった。第四の魔女が大量の研磨材――主に大地の結晶が用いられた――で錆を磨き始めた。それは第五の魔女に引き継がれた。

錆は徐々に剥がれ落ち、くすんだ金属光沢を放つ刃が姿を現した。

古の剣は悪魔と同じ毒を放ち、悪魔を倒す武器となることが期待された。

しかし、それが完全な形を取り戻すことはついになかった。刃に深々と刻まれた巨大な爪痕を思わせる傷にこびりついた錆は、どうしても剥がすことができなかったのである。

第七の魔女がこの太古の剣を手に戦い、それでもなお悪魔を殺すことはできなかった。

主を亡くした大剣を――まるでその意味を自ら消失させるように――再び錆が覆い始めた。すべてを蝕む毒は、刀身自体を腐食したのである。

死と再生を繰り返し、腐食と腐敗を身に纏う。

その力は、第八の魔女へと引き継がれた。

赤い樽を転がす。大タル爆弾。衝撃を加えると膨大な熱量と爆圧を生み出すタルを、セントポーリアは手で押していた。人がすっぽり入るほどの大きさが適度に転がしやすいのだ。

「罠とか爆弾って、あまり使ったことなかったなあ。何だか誘導するのが面倒でさ」

暗い中、ずいぶん手慣れて動けるようになっていた。さすがに地面の凹凸を耳で感じることなんてできないが、魔女の石碑がある場所はこれまで何度も来ている。危なげなく大タルを運ぶ。

だいたいこのあたりだろうか。外からかすかに漏れてくる光がここに入るための入り口の位置を教えてくれる。念のため、手で壁の位置を確認して、タルを立てた。

またタルが転がる音が聞こえてきた。魔女が二個目の大タル爆弾を持ってきたのだ。

「そうか。私はよく使うな。確かに扱いづらいだろうが、使いこなすことさえできれば強い力になるからな」

そうだろう。爆弾を用意していたのは魔女の方だ。すでに悪魔が通りそうなところにはシビレ罠が張られている。麻痺毒が黄色い色を照り返しているのがそれだ。もっとも、これまでの経験上、罠は効果がないとわかっているので、あくまでもおまけのようなものであるらしい。

本命はあくまでも爆弾。さすがの悪魔の単純な破壊力の前にはダメージを免れることはできないことはこれまでの魔女の戦いで証明されているのだそうだ。

「ねえ、魔女。思ったんだけどさ」

どうせ姿は見えないので、魔女の方を見ずに声をかける。

「あの悪魔って、もしかしたら目が見えてないかもしれないよね」

「どうしてそう思う？」

きっと、魔女もこちらを見てはいないだろう。

入り口の狭くなった部分に糸を張る。手で岩肌を確認しながら、糸を巻き付けた釘を打ちつける。グローブ越しでも、岩の冷たさが伝わってくる。

もはや外ではとっくに日が落ち、夜風が吹きすさんでいることだろう。寒く、そして長い夜になりそうだ。

「だって、人の目って、ものに当たって反射した光を捉えて映像にするでしょ、たしか。それなら、眼球も透明ってことは、光が素通りしてるってことだから……」

「なるほど。確かにな。だとすると、聴覚か、あるいは嗅覚で知覚している可能性が高いな」

入り口の反対側の壁から釘を打ちつける音が消えた。糸がしっかりと張られていることを指で触って確認する。完璧である。

「だからさ、もしかすると、音爆弾が効くかも！」

準備はできた。そして、弱点の導き方も悪いことはないだろう。

「面白い意見だが、これまでにも爆弾を至近で爆発させたことがあったそうだ。ダメージは与えられたようだが、姫が期待しているような成果はなかったと聞いている」

どうやら、みんな考えることは同じらしい。闇の向こうから、魔女の笑い声――こういうと、不気味なものしか連想できないかもしれないが、普通の微笑みである――が聞こえてくる。

嘆息する。その間に、何かが放り投げられた音。そして、闇の中をかすかにこちらに飛んでくる物が見えた。視覚で位置を確認して、聴覚で距離を計る。すると、簡単に受け取ることができた。拳大の玉。それが三つ、紐で結わえられている。

手触りからして、音爆弾――これには嫌な思いがある――である。

「どうせ常識外れな相手だ。色々と試すのは悪くない」

聴覚に頼る生物。たとえば、魚竜種の多くや、飛竜種に含まれる角竜のように地中潜行を行う種は大きな音に脆く、音爆弾が効果的である。ちなみに、時に盲竜と呼ばれるフルフルは判然とはしていないが、嗅覚を利用しているらしく音爆弾は効果がない。

悪魔も嗅覚を頼りにしているのなら、音爆弾は効果がない。これもシビレ罠同様、あくまでもおまけにすぎないのだろう。

ともかく、準備は終えたのだ。セントポーリアは罠から離れ、はじめから決めていた岩のくぼみに身を寄せた。

「さて、どうやっておびき寄せようか」

「その心配はない。悪魔は毒に導かれる性質があるらしい。この剣がまだその力を維持していてくれるなら、奴から勝手に来てくれるはずだ」

どうやら、それが里に剣が置かれていなかった理由でもあるらしい。

悪魔が持つ毒でありながら、悪魔を蝕む不思議な毒。それが指に

与えたかすかな痛みを思い出しながら、セントポーリアはこれからの戦いのことを考えた。

相手は文字通り見たこともないモンスター。里で優れたハンターであった魔女たちでも撃退することしかできなかった。

そんな化け物に挑もうとする理由は、どうにも考えがまとまらない。魔女を助けたいというのは嘘ではないだろう。しかし、どこまでセントポーリアが加わったところで助けに繋がるのかはわからない。姫として扉の後ろで守られているのが嫌だったから。それは無理矢理こじつけたものであるような気がする。では、ハンターとして、里を守りたかったのだろうか。それなら、里の守りを固めるべきであった。

結局堂々巡りなのだ。どうしてハンターになりたかったのかわからなくて、わからないから何がしたいのかがわからない。

何とも間抜けな話ではないだろうか。これから命をかけるというのに、それに見合うだけの覚悟も理由も持ち合わせていない。

風が突然吹き付けて、寒さに手がかじかんでしまわないように吐息を吹き付ける。白い息は、残念ながらグローブの下にまで温もりを届けてはくれなかった。

こうなれば早く来てもらいたい。そんな気さえする。どうせいつかは戦わなくてはならない。そして、どちらかが死ぬまで何も終わらないのだから。

張りつめているのは糸だけでいい。

入り口付近には探知用の糸が張ってあるのだ。糸は表面積が極めて小さいため、音をほとんど反響しない。さすがのセイレムの魔女でもよほど集中していなくては察知は難しいだろう。

闇の中、目を凝らすのではなく耳を澄ます。しかし、意識を集中した時に都合よく現れてはくれない。つい気がゆるんで背中を壁につける。冷たい岩が背中から体の中にまで伝わり、肺が痛みを覚えた。やはりつい、体をそらす。

その時、音が闇に染み渡った。甲高い、糸が引きちぎれる際の独特な音。

悪魔が来たのだ。入り口にいることは間違いないが、入射してく光量にまるで変化は見られない。本当にそこにいるのか疑わしく思えるほどである。

弾丸が凍り付き重い空気を裂いて飛ぶ音と、続いて、耳をつんざく轟音が響いた。爆発の閃光がわずか一瞬だけ洞窟を照らす。

響くのは悪魔の悲鳴。目一杯乾燥させた空気を強引に吹き付けたようなかすれた声はどんな生物とも違う。

姿は見えず、ただ炎が虚空に燃え移ったように揺れ動いていた。悪魔の腕あたりを燃やしているのだろう。

これほどの火力にさらされようと、轟音を聞かされようと、悪魔は目に見える変化を見せはしない。そして、シビレ罠に足を踏み入れているはずが、動きを止めた気配はなかった。

「やはり効果はないか。だが！」

魔女の言うとおりである。効果があると期待されていた訳ではない。元々の予定通りの結果にすぎないのだ。

あとは正攻法の肉弾戦。

肩に狩猟笛を担いで、駆け出す。すでに魔女は前に出ていた。

「姫、無理はするな！」

「わかってる！」

見えない敵と見せない闇。二重のヴェールに隠された敵との戦いが始まった。

第八話「赤眼の王女と異変の蠢動」

地面が強く踏みつけられる音がした。これは、悪魔が強く地面を踏みしめた音だ。とすると、攻撃は反対側から。悪魔が左前足で体を支えようとすると、攻撃は右前足の薙払い。

案の定、固い地面を擦る音がした。

闇の中に瞬く赤黒い光。これが、悪魔の持つ毒。光の輪郭から、ずいぶんと太い腕を持っているようだ。一体どんな姿をしているのだろう。トカゲのような姿を想像して、地面にへばりつくように姿が自然と思いつく。

すると、頭は前足の間に突き出されていることになる。

以前王国お抱えの学者が言っていた。生物の多くは脳を守るために頭蓋骨を分厚くし、その結果持ち上げると筋肉に多大な負荷がかかるようになってしまった。よって動かし回すことができず、安定して置いておけるよう、首を寝かしているのだそうだ。

音で足の位置は掴めている。相手の斜め前に立つことを意識して、狩猟笛を振りあげる。

このくらいが頭の位置ではないだろうか。そう考えた場所には何もなかった。素通りした狩猟笛は、悪魔のどこかに当たり、固い手応えを伝えてくる。

まさか頭がないわけではないのだろう。たまたま、動かしていただけかもしれない。

いつまでも相手の正面に居座ることはできない。攻撃の隙を消すために体を横へ頃がして、距離を開ける。すると、セントポーリアを追いかけてくる音があった。

見えないため、何が起こったのかわからない。何かが広範囲をさらって、その何かが肩をかすめた。それだけでも体がもっていかれる。体の浮き上がる感覚を歯を食いしばって耐えていると、地面に叩きつけられ滑っていく。固い地面の感触に、防具がなければ血塗れであっただろうとフルフルに感謝した。

「こいつ、爆弾がまともに利いてない」

体を起こしながらできることなんてせいぜい悪態をつくくらいだろう。

魔女の放った貫通弾を音だけで確認する。弾は空を裂いて鋭い音を発し、目標に到達すると岩にでも命中したかのような鈍い音を出した。

「弾がここまで効果がないとはな」

体が凄まじく固いのだ。おまけに、体の回りに得体の知れない衣――もしかすると、これがこの怪物を透明しているのかもしれない――を纏っていて、それが緩衝材のような役割を果たしている。

まさに化け物だ。こんなのがいると知ったら、学者連中の度肝を抜くとこになるのではないだろうか。

考えても詮無い。今は何としてもこいつを撃退する必要があるの

だ。

もう一度、頭を狙う。狩猟笛を振り上げると、しかしそのわずか前に悪魔が体の向きを変える音がした。今回は完全な空振りに終わる、はずであった。

頭上に間で持ち上がった狩猟笛が何かを叩いた。固い感触は相変わらず。見えないことも変わらない。そしてそれは、まるで翼のような広い膜状をしていた。

「え？」

つい惚けた声を出してしまった。悪魔には四肢がすでにある。では、翼のように思えた器官は何なのだろうか。人もモンスターも基本的な構造は一致している。これは両種が同じ起源を持つことの証拠である。これも、学者から聞かされたことだ。

では、悪魔とは何なのだろう。モンスターとはあまりに異なっていて、人の英知さえ及ばない存在。どこから来たのか。そもそも生物なのか。

理解できない。わからないから怖い。

悪魔とは、これまでセントポーリアが相手にしてきたどのモンスターとも違う。

「姫！」

魔女の声は、危機を告げていた。

突然風が吹いた。飛竜の羽ばたきによって生じる風圧のように丸く広がる風。悪魔が――どのようにかはわからないが――風を起こしているのだ。

別段強い風とは思わなかった。しかし、風が足に触れた途端、筋肉が一気に弛緩した。まるで自分の体ではなくなってしまったみたいに後ろへと倒れてしまう。

風に、悪魔の毒が含まれていたのだろうか。かすかながら、赤黒い光が洞窟の闇を漂った。

「姫！」

魔女が駆け寄ってくる。すぐにでも立ち上がらなければならないことはわかっていても、足腰が立たない。狩猟笛を握りしめたまま、手で体を持ち上げようとしても何ともならなかった。

風が吹く。何か、翼のように広いものを地面に叩きつけることで風を起こしているらしい。それを４回ほど――正確に数えていたわけではない――した頃だろうか。セントポーリアに駆け寄っていた魔女の体が浮き上がった。

「魔女！」

強靱な前足で叩かれたのだ。それだけは確信できる。何故なら、暗い昏い闇の中で、悪魔がほんの一瞬だけ姿を見せたから。

それは翼があって、やはり足もあって、大きな顔を軽々と高く持ち上げていた。それを吐き気を催すような紫色が包み込んで、おまけに起伏の激しい皮膚は嫌悪感を助長させる。

どのモンスターとも違う。まさに怪物で、魔物で悪魔。動物と呼ぶにはあまりに異質でありすぎた。

吹き飛ばされた魔女のこと――魔女なら、大丈夫に決まっている――を忘れて、つい見入っていると、悪魔は再び姿を消した。

「こいつ、一体何……？」

やや語弊はあるが、悪魔はセントポーリアの目の前で高く飛び上がった。それは風が突然巻き起こったことで判断できた。ただし、飛竜のように二度、三度と羽ばたいた様子はなく、一飛びである。低い洞窟の天井にぶつかりもせず、悪魔は闇の中のどこかに降り立った。

ここでようやく立ち上がることができた。魔女も、シルエットが特に怪我をした様子もなく起きあがった。

急に、静けさが洞窟を占有した。

音が聞こえない。無理矢理聞こえている音があると判断するなら、自分の息づかいだけ。

悪魔の居場所がわからない。

セントポーリアに、セイレムの魔女と同じだけの技能はない。せいぜい距離と、だいたいの方向を判断して、視力で補うことで補完しているだけなのだ。闇の中とは言え、見えない相手と戦うことができるわけではない。

セントポーリアは魔女ではない。そして、悪魔でもない。

悪魔もまた、この安寧の闇に身を浸しながら、獲物の息づかいを感じている――あるいは匂いを――のだろうか。

居場所を察知されることが怖くて、息を潜める。緊張が邪魔をして、息苦しさばかりが募った。

天井から滴が落ちる音。それだけでもつい体が反応する。悪魔が、極端な話をするならすぐ後ろに寄り添っていてもおかしくはない。それでも後ろを振り向けないのは、悪魔がいるのは、実は目の前かもしれないからだ。

魔女も悪魔も動こうとしない。

肺に貯まった冷気が徐々に体力を奪う。瞬きを繰り返さなければ瞳が凍り付いてしまう。

時間の感覚というものがなくなっていた。まだ数分しかたっていない気がすれば、反対に数時間が経過したと言われても納得できてしまうかもしれない。しかし、体力の残り具合から、せいぜい一〇分程度のことだろう。もう一つの論拠として、セントポーリアの忍耐がそんなにもつはずがないのだ。

足を踏みならした。地面を叩く高い音が洞窟に染み渡る。

音は、大気を震わせる波であり、球状に広がる。セイレムの魔女たちは、音が何かに反射して戻ってくるまでの時間を計測と同時に戻ってきた角度を把握すると、だいたいどのような位置にどの程度の大きさのものがあるのかがわかるのだそうだ。こんな複雑怪奇な

計算を、セイレムの魔女たちは感覚として行ってしまう。もっとも、形まで把握できるのは魔女たちの間でもほんの一握りで、魔女の妹であるスノードロップが該当する。

ただし、魔女がどの程度まで耳で周囲を把握できるのかは聞いたことがない。

セントポーリアは自ら音を出しておきながら、悪魔の居場所を掴むどころか、地形の把握さえできない。

魔女もまた――何故かはわからない――、動かない。先手を打ったのは悪魔の方であった。

けたたましくはないが、不愉快な鳴き声。これでたいだいの位置を掴むことはできたが、すぐさま砂が舞う光景が確認できた。また飛んだのだ。

次は一体どこに。

後ろに感じた振動と音。着地音である確信もないまま振り向こうとすると、胴を細くて長い何かが払った。息が肺から叩き出される。戻さなかったのは、胃が空であったからにすぎない。踏みとどまることなんてできないまま、地面に叩きつけられる。

再び、悪魔が飛んだ。これでまた位置を掴むことができない。

今度は魔女の方に行ったらしい。地面を擦る音の中、魔女が必死に動き回っている様子がわかる。

右手には狩猟笛を、左手で腹部を押さえながら立ち上がる。幸い、

防具に破損はない。ただし、赤黒い粒子状の付着物があった。これが悪魔の毒なのだろうか。何にせよ、気味が悪い。はたき落とすことにした。

弾丸の放たれる音と弾かれる音。魔女が戦っている。

こんな怪物とどう戦えばいいのだろう。姿は見えない。肉質は固い。加えて、得体の知れない毒まで持っている。

唯一効果があるとすれば、魔女が背負う、錆び付いた大剣しかない。

どうにかして隙を作らなければならない。そんな気持ちばかりが急いてアイテム・ポーチに手を伸ばした。感触だけで目当てのアイテムを探し出す。

魔女から与えられた音爆弾。効果があるかなんてわからない。ずいぶんと分の悪い賭だが、何もしないよりはいいだろう。

一つ目の音爆弾を放り投げた。

意識が覚醒するにつれて、背中に鈍い痛みを覚え始めた。離れたところにある火にくすぶられるような痛み。悪魔にやられた傷だとわかると、記憶が意識の上に上ってくる。

スノードロップは悪魔にやられて命辛々里へと逃げ込んだ。扉をくぐったあたりから記憶が曖昧であるため、恐らく、このあたりで気を失ったのだろう。

瞼を開くと、自宅に敷かれた布団の上にうつ伏せで寝ていた。背中が肌寒いのは、手当のために上半身の服が脱がされ、薄い布切れ1枚を被せられているだけだから。

首を回して状況を確認しようとすると、すぐに目に付いたのは、傍らに座る老婆の姿であった。

「ヘラおばあさま……」

この里を束ねる族長は、しわの奥で微笑みを作る。

「大丈夫。傷は浅いし、イシュタルも無事だよ」

枕に顔を押しつける形で姿勢は自然と安定した。体に無理をさせず、かつヘラの様子を観察しやすい。

「お姉様は……？」

「今、悪魔と戦っているところだよ」

起きあがろうとして、腕に力が入らないことに気づいた。結局、枕の抱擁から顔を引き剥がすことさえできない。

「無理はおよしよ。いくら命に別状はないと言っても、戦えるかは別問題なんだよ」

「でも、お姉様は一人じゃ戦えません……。だってお姉様は……」

セイレムの魔女ではないのだから。悪魔と戦う術を持たないのだ

から。

「それでも、戦うと決めたのはあの子なんだ。それに、私は信じてるよ、あの子のことを」

「私に、力があれば……」

姉を1人死地に送らなければならない悔しさに震える必要などないのに。無力感に苛まれ、拳を握りしめようとしても、力の入ることのない腕はかえって惨めさを募らせた。

老婆は目を閉じると、そのまま話始める。

「あの子も五年前、そう言っていたよ。そして、この五年の間、水晶の森を眺め続けたのさ」

五年前、スノードロップは怖さに震えていることしかできなかった。まだ駆け出しのハンターでしかなかった姉は、大切な人を見送った。今のスノードロップと同じように。

これは縮図である。セイレムの里が、悪魔を迎える度に繰り返される悪しき伝統なのだ。

魔女を見送った少女がやがて魔女となり、また誰かから見送られる。そして、見送った誰かが次の魔女となる。

瞳に涙がたまったのは、九番目の魔女となることへの恐怖ではなくて嘆きから。

「私もね、昔はハンターだった。でもね、七人の魔女には結局なれ

なかった。そして、五人の魔女を見送ってきた。魔女たちはみんな言うのさ。残された人が生き抜くことこそが願いだとね。だから、私はスノードロップを行かせることはないよ」

涙に目は曇っても、耳は、ヘラの言葉に冷たい抑揚が含まれたことを聞き逃すことはなかった。

「まあ、セントポーリアちゃんには、行ってもらったけどね」

急いで跳び起きようとしても、背中を走る痛みに苦悶するだけであった。

魔女を統べる長の言葉は、変わらぬ冷気を含んだまま続く。

「私らはね、別にここでの暮らしに不便を感じていないよ。でもね、王国の動きには反対なんだよ」

小さな里だ。ヘラが王国など、ほかの里に対して不満を抱えていることくらい、誰でも知っている。しかし、それをはっきりと言葉にしたことは、これまでになかった。

「今回のことでわかったよ。悪魔は明らかに行動のパターンを変えてきている。いいや、兆候はすでに現れていたさ。それなのに、王国やギルドはまともに取り合ってくれなかった」

悪魔の存在が、まるで言い伝えであるかのように扱われていることに不満を感じているのだろうか。他の集落では、セイレムの里の魔女の話の一部として、お伽話程度にしか捉えられていないと聞いたことがある。あるいは、単なる強烈な嵐の隠喩ではないかと思われているらしい。

現に、セントポーリア王女は悪魔の話を知らなかった。

「王女の一人でも犠牲になれば、王国もようやく重い腰を上げるんじゃないかね。悪魔は、もうセイレムの里の問題ばかりではないってことにね」

怖がらせてしまった。そんなことを悔いるように、ヘラは笑った。しかし、声音から冷たさは完全には消えていない。

「それに、あの子の助けになるなら、それでもいいしね。私はね、どちらに転んでもいいんだよ。あの子たちが勝てば無情の喜びさ。でもね、もしもの時の覚悟は、とうにできてるんだよ」

洞窟に響きわたる音爆弾の轟音。しかし、悪魔が怯んだような様子はやはりない。

「音爆弾は利かないか……」

悪魔は平然と闇の中に潜み、ご丁寧に姿を隠したままである。ただ、音そのものは聞こえているらしい。地面を擦る音がして、セントポーリアの方を向いた気配がする。

注意をそらした獲物を放っておくほど、魔女は温情でもなければ未熟でもない。悪魔へと駆け出す勢いと、かすかに見える動作は、明らかに剣士のそれであった。

ハンターの装備は剣士とガンナーとで分けられる。両者の大きな

違いは、やはり構造である。剣士用の装備は、動作こそ妨げない作りになっているが、その反面防御力を優先して制限される動作も多い。ガンナー用はその反対である。無理をすればガンナー用の装備で剣を振るうこともできないわけではないが、わざわざ薄い装甲でモンスターに接近したいと考える酔狂な人間はいないだろう。

少なくとも、魔女と知り合うまではそう考えていた。

魔女は背中から凄くさびた大剣を抜き放つと、悪魔の首があると思われる虚空へと叩きつける。とても生物を打ったとは思えないような音がして、悲鳴のような――事実、そうであるのだろう――声が響いた。

これまで見たことのない土煙がたって、それが悪魔が後ずさった証であると確信した。

「利いた！」

歓声を上げたのは、セントポーリアだけであった。魔女は自制したわけではない。単に手応えを感じてはいなかっただけである。

「いや……、どうやら、これでは駄目らしい……」

闇の中で赤黒い光が瞬いていた。それは折れた剣の断面からこぼれるように放たれていた。

錆び付き、劣化した剣は衝突の衝撃に耐えることができなかったのである。

悪魔の足音は力強い。致命傷を与えられたと確信できる要素は何

一つない。

魔女は大剣を背負い直す。

「まあいいさ。何か別の手を考えることにしよう」

これは強がりにすぎないのだろう。それでも、まだ何か、奥の手を用意していると感じさせる不思議な強さを、魔女は持っていた。

悪魔がまだまだ健在であると言う事実をほんの一時忘れさせてくれる。

そして、待ちかまえているのは現実である。突如洞窟内に腐臭が立ちこめた。思わず鼻を押さえたくなるような蒸せかえる臭いは、紫色のガスとして見えていた。漂ってくる中心に悪魔がいるのだろう。

「な、何!?　この臭い……」

「逃げろ、姫!」

訳は聞かない。ただ、考えている余裕はないということだけを理解して、セントポーリアは走った。一番近くの出入り口がかすかな光を示して居場所を明かしている。

とにかく走るほかなかった。理由や意味などわからない。ただ危険であることだけを理解しながら。

魔女はどうしたのだろう。うまく他の出口から逃げることができたのだろうか。そんなことをふと考えて、首だけで後ろを向く。

すると、そのタイミングに合わせるように何かが洞窟の中から吹き出した。風圧さえ感じるそれは、セントポーリアの体を軽々と跳ね上げると、そのまま夜空の下へと放り出した。

第八話「赤眼の王女と異変の蠢動」（後書き）

手ごたえとして、一一話くらいかかりそうです。

第九話「赤眼の王女と戦の笛」

あるところに一人の少女が生まれた。少女は、まわりの誰とも違っていた。だからまわりは少女を気遣い、少女はそれを重荷と感じていた。

少女は望んだ。人とは違っていても、それに甘えて生きたくはないと。

そんな少女が示した生き方は、世界の中で最も危険で最も臆病でありながら勇敢であることが求められるもの、そして、世界のあり方そのものに身を任せるものであった。

少女はハンターになった。

人とは違うことを受け入れ、そして、違うことに甘えもせずに。

少女はハンターになった。

そして、魔女ならぬ魔女として、悪魔に戦いに挑む。

「どうだ、傷の具合は？」

そう、扉を開けたのはアレスである。

現在スノードロップは治療のため背中を大きく開けた状態でうつ伏せに寝ており、要するに、背中を男性に見られてしまう。

顔が赤くなることを意識しながら、大慌てで隠そうとあがくも、傷ついた体では思うように動くことはできない。見かねたヘラが布をもう一枚かけてくれることで、体を隠すことができた。

毛布をかけながら、ヘラの声は明らかなと棘を含む。

「女の寝室に無遠慮に入ってくるものではないよ」

アレスは遠慮という言葉を知らない。張りつめた表情――いつものことだが――をしたまま、壁を背に座った。スノードロップに見える位置ではないため、音からそう判断した。

落ち着き払った様子で、一人慌てたスノードロップは気恥ずかしさを覚えたほどである。恋人の妹以上には見られていないという事実に、少し悲しくなった。

さすがに視線がどこを向いているのかまで音だけで判断することはできない。できなくとも、それがスノードロップでないことくらいは察しがついた。

「何故セントポーリアを行かせた？」

「おや、今更ご立腹かい？」

二人の会話を邪魔したくない。それとも、間にはとても立ち入れないと覚悟している。

スノードロップは意識して呼吸を抑えた。すると途端に息苦しくなり、重苦しい空気が肺を圧迫しているものと錯覚を覚える。

しばらく無言が続いた。均衡を破ったのはアレスの方である。息を吹きながら、壁により深くもたれかかった。いたずらに対立したいわけではないという意志の現れなのだろう。

空気が、途端に和らいだ。

「ばあさんの覚悟は知った。別に責めるつもりはない。だが、戦力の均衡を崩さない選択であるというのなら、セントポーリアである必要はなかったはずだな」

それでも、スノードロップの緊張は緩まない。セントポーリア王女を向かわせた理由を知れば、アレスはまた反発する、そんな予測が立てられていたからだ。

今度耳に入る音は、どのようなものだろう。

それが、まさか音色であるとは考えてもみなかった。

つい体を揺り動かす。ヘラも気づいたようで、その視線はどこへでもなく揺れ動く。魔女でない――特別鍛えられた聴覚を持たない――アレスだけが、変化を敏感に感じ取り壁から背を離した。

もっとも、これは緊急を要することではない。

「音色が、聞こえます。これ、狩猟笛の音です」

この近辺ではあまり使われることのない狩猟笛。しかし、一度でも耳にしたことのある音を聞き間違えるはずがない。

まだ、セントポーリア王女は無事である。しかし、これは朗報ではなかった。

戦いのために吹き鳴らされる音色は、まだ戦いが続いていることを告げる調べでもあるのだから。

薄く積もった雪でも、衝撃を十分に和らげてくれた。最も、口の中にまで入ってしまった雪を唾液とともに吐き捨てる作業は、若干の抵抗があった。雪を濡らす唾液の跡を、つい雪を被せて隠してしまった。

見渡すと、周りには誰もいない。もちろん、そんなことが何の安全を保障することではに代わりに、仲間とはぐれてしまったことが確認されただけであるということは理解している。

ここはどうやら、丘――魔女とともに水晶の森を眺めた――に通じる小道であるようだ。普段なら鳥竜種バギィの姿が見られることが多い場所だが、今は吹雪が吹き付けるだけで、何者の姿もない。

雪を踏みしめ、歩き出す。足を取られるほどではない適度な深さの雪は、悪魔の足跡くらい明らかにしてくれるのではないかと期待させる。

悪魔が放った風は恐らく、悪魔の毒を含んだものであったのだろう。悪魔の毒。悪魔自身を蝕む毒でありながら、悪魔自身がその毒を扱っている。悪魔とは、ずいぶんへそ曲がりな存在であるらしい。

足が自然と止まったのは、分岐点にさしかかった時のことである。

左手には奥まった浅い洞窟の先に人がしゃがんでやっと通ることができるくらいの穴が開いている。モンスターにはとても通ることのできない小道の先には、里がある。

右には丘へと登るための壁。

安全な左と危険な右。

どうして右を選んだのか、誰か人に聞かせるような理由を、セントポーリアはまとめることができなかった。ただ何となく、右手の壁を当然のように目指した。

決して高くはない壁には、大小の石が突き出ている。ほどよい形と大きさの石を選びながら、それを足がかり手がかりにして登る。

登りきると、風が吹き付けた。開けた盤状の丘は、まるで設えた舞台のよう。

セントポーリアはここで魔女と並んで眼下の水晶の森を眺めた。では、水晶の森の悪魔も、こちらを見上げていたのだろうか。

いつもと同じ場所にまで歩いて進む。ここは、ほんの数時間前に魔女と落ち合った場所である。下に見える水晶の森は、かつてのような不気味さはなかった。そこは、今は単なる危険な森でしかない。悪意が抜け落ちているのだから。

そして悪意は、不可視の塊となって凍土へとやってきた。

セントポーリアは笛を構えた。

狩猟笛の欠点にして利点。それは音を奏でるということである。打撃武器という荒々しさとは共生できない繊細さ。振り回せばすぐに重心が狂い、持ちにくくなってしまう。軽さ故の反動の少なさを利用して固い部位に攻撃しても弾かれにくいという特徴さえ、調律を怠れば効果を発揮しなくなってしまう。

吹き込み口から息を吹き込むと、フルフル亜種の口を模した吹き出し口から音――フルフルの叫び声のようで、決して耳に障りのいいものではないが――がが発せられる。同じ音を立て続けに吹き、重心の位置を確認しながら直す。

続いて、セントポーリアは演奏に入る。

狩猟笛の奏でる音色は、ハンターたちに力を与える。それは、精神を高揚させるためだとか、正のプラシーボ効果だとか様々言われているが、はっきりとしていることは、狩猟笛の音色は確かに、ハンターたちの力を高めるのである。

狩猟笛にはすべてで七つの旋律が存在し、各狩猟笛はその内の三つを演奏することができる。ハンターをそれらの旋律を二つから四つを続けて演奏することで曲を生み出し、それを力へと変えるのである。

ブラッドフルートに与えられた旋律は第二節及び、第六、第七節である。

セントポーリアは腰ためにブラッドフルートを構えると、静かに息を吹き込み始めた。

まずは第二節。第一節とならび、多くの曲の基点となる旋律は、それゆえ至高の紫の名を与えられた。「始まりの紫」。その音色はすべての基調となり、安定した音を響かせる。これを二節続けて吹くことで調律を行うとともに、続く音色の布石を置く。

続く音は第六節、「力の赤」と呼ばれる力強い音色。体の奥から力を湧き上がらせる楽譜は、始まりの紫に力の赤をさらに二度演奏することで完成する。

第一楽章「戦争をもたらす者」。迫り来る力強い旋律が力を沸き立たせる。

そして、演奏は続く。最後の「命の緑」。戦争をもたらす者の赤を受けて、それを緑が内なる力へと変える。それを力として発現するために吹かれた力の赤が、第二楽章「平和をもたらす者」が完成する。人の心を鎮め、それは防御力の向上を導く。

平和をもたらす者を構成する命の緑と力の赤。そこに再び緑の音色を加えることで、緑に挟まれた赤の旋律は命の音色へと変化する。それを、始まりの音、始まりの紫で締めくくったとき、第五楽章「老いをもたらす者」が音色を響かせる。力が命へと変換された楽曲が人の回復力を高める。

音は、始まりの紫に戻った。最後に、命の緑を演奏する。始まりの命がもたらすのは第四楽章「快楽をもたらす者」。純粋な命の音色は、痛みを和らげる。

誰一人観客のいない演奏が終わりを告げた。吹雪が音楽に取って

代わる。吹き付ける度、手がかじかむような寒さを感じる。

風がふと和らいだのは、決していいことではない。何かが吹雪を遮った。そして、その何かは見えてはいない。

もう飽き飽きした。姿が見えないことも、こんな化け物に里が危険にさらされ続けたことにも。

だからここで終わらせてしまおう。

笛を肩に担ぐように構える。声を張り上げたのは、自身を鼓舞するためである。

「魔女がきっと考えてくれる。こんな化け物をぶちのめす手段や方法を！」

悪魔は咽を鳴らす。表現しがたい音がすぐ目の前に悪魔がいることを教えてくれる。

「だから！」

吹雪に輪郭を縁取られ、だいたいの位置なら把握することができる。聴覚に頼れば、悪魔のかすかな動きを捉えることができた。

「それまでは私が相手をしてあげる！」

雪を踏みしめ跳び出す。悪魔が何をしようとしているのかはわからずとも、そこにとどまっていてはいけないことはわかった。悪魔の頭のあたりから放たれた何かが先ほどまでセントポーリアがいた場所に着弾した。まるで水風船でも叩きつけたように悪臭が広がる

と、雪と言わず岩と言わずそれを浴びたすべてのものが腐食する。かすかに見える赤黒い光が、それに悪魔の毒が含まれていたことを教えてくれる。

溶かされるということは、できれば避けたい七つの死に方の一つである。

そして、こんな場所で死ぬつもりもない。

狩猟笛を一度頭上に掲げ、振り降ろす。当たったのは前足の辺りだろうか。手が痺れるような固い感触は、どこを叩いても変わらない。叩きたい頭は遙かに高い位置にある。

すぐさま体を横へと転がし、悪魔の側面に回り込む。今度は狩猟笛を横に振る。調律を完全に終えた狩猟笛は弾かれることはないが、どこも手応えが弱い。

そして、攻撃を終えてすぐに体を横へと逃がすと、悪魔の攻撃は届く気配がなかった。

もしかすると、悪魔は動きそのものは鈍いのかもしれない。それなら、戦い方はいくらでもある。

狩猟笛を叩きつけては逃れ、逃れては叩きつける。雷電袋の雷が弾ける度、徐々にダメージが蓄積しているはずである。無理さえしなければ、時間を稼ぐくらいならできる。

慢心が入り込んだ訳ではない。油断を招いたこともない。全身全霊をもって、神経を研ぎ澄まし、それでも、悪魔はセントポーリアを軽々と上回った。

振り抜いた狩猟笛から手応えが伝わってこない。突風が雪を巻き込みながらセントポーリアを叩いた。前から悪魔の気配が消えている。

ここで考えられることは飛び上がったということなのだろう。そして、着地の音は聞こえなかった。

背中に痛みが走ったのは、次の瞬間である。

肺から無理矢理絞り出された声は、声にならない。強引に叩きつけられる感覚と、地面に弾かれる感覚。どちらが先であったのか曖昧なほど、意識が混濁する。

それでも狩猟笛を離さなかったこと、そして、すぐにでも逃げようと行動したのは、ハンターとして培われた感性に近い。

方向も満足にわからず飛び出すと、再び背中に走る痛み。張り付くような嫌な感覚が、背中を打たれたにもかかわらずセントポーリアの体を後ろへと飛ばす。また、雪の中を転げ回る痛みに襲われた。

今になってわかった。これは、悪魔が口から伸縮性の舌――あるいはそれに類するもの――を鞭のようにしならせて振っているのだろう。それこそ、見えないほどの速さ――何とも皮肉なことだ――で。

雪がクッションになってくれなければ、とっくにどこかを骨折している。痛みは激しいが、どこか折れた様子はない。狩猟笛を杖代わりに、何とか立ち上がることができた。

悪魔の姿はない。というよりも、どこにいるのか察することができない。

わき腹を支点として持ち上げられる。そんな浮遊感の正体は、腹部を強打されたことによる体の浮遊そのものであった。

雪を押し退け地面に落ちる。視界が瞬時に白く染まり、手からは狩猟笛がなくなっていた。

もはや抵抗するための手段さえ持ち合わせていない。傷む体を無理に起こすと、吹雪の中、悪魔はそれでも姿さえ見せてはいなかった。雪が積もっているのだ。くぼんだ場所を見れば、そこにいることがわかるはず。しかし、セントポーリアが見つける度に――まるでタイミングを合わせているかのように――、悪魔は飛び上がり、位置を変えてしまう。

それを何度か繰り返しただろうか。結局、居場所を知るすべさえ失ってしまった。辺りが均等に踏み荒らされ、もはや手がかりはない。

それでも首を回してしまうのは、諦めが悪いというよりは、単に視覚に頼りきった者の癖でしかない。

肩を抱いたのは、寒さに震えているからではない。寒さを感じていない訳ではないが、それが原因ではないのだ。

動くことが怖かった。狩猟笛を取りに行く。里に逃げ込む。そのどちらも、一歩を踏み出した途端に悪魔にぶつかってしまいそうでできない。

できることなら逃げ出してしまいたい。

どうして自分はこんな場所にいるのだろう。それは、望んで里を訪れ、望んで里の庇護を捨てたから。城の中で安寧に浸りきって生きるなんてできそうになかった。でも、こんな結末を望んでいたわけではない。

では、自分は何を望んでいたのだろう。

腹部にまるで鋼の棒でも押し当てられたように感じられたのは、舌に薙ぎ払われたからだろう。ほぼ真横に飛ばされて、雪が積もってできた山の一角をつぶす形で勢いが減少する。そのまま、山の向こう側の雪原に落ちた。

顔の目の前の雪には血が付いていた。口の中に感じる鉄の味は、どうやら口腔のどこかを歯で切ってしまったらしいことを教えてくれた。

ハンターの防具は優秀で、体を衝撃から幾度となく守ってくれる。

果たして、本当にそうだろうか。悪魔は、強力な腐食性の毒を持っている。やろうと思えば、毒液を頭からかけて溶かしてしまうことだってできるはずだ。セントポーリアにかわす術はなく、脆い人の体が悪魔の毒に耐えられる訳がない。

毒は一度放つと再度貯まるまで時間がかかるのだろうか。それとも、獲物をいたぶっているのだろうか。

思えばおかしな話だった。スノードロップは気を失った仲間を背負いながらも――傷は負っていたが――、里まで逃げ帰ることがで

きた。悪魔が本気になればひとたまりもないはずなのに。

モンスターが獲物をいたぶる行動は、多くの場合、子どもに狩りの仕方を覚えさせるために行うものであるらしい。では、悪魔も狩りの練習をしているのだろうか。

悪魔をモンスターの尺度で計ることなんてできない。だとすると、獲物をただ残忍にいたぶって、そのこと自体に愉悦を感じているのではないか。

殺される。痛めつけられた挙げ句に殺される。

理由や理屈を考えるまでもない単純化された思い――本能とも言うべきものである――は、セントポーリアに最後の力を振り絞らせた。

無様でもいい。不格好でもいい。顔は涙でグシャグシャで、立ち上がり方もひどいもの。足はふらついて、こんな歩き方を見せたらメイド長にどやしつけられる。セントポーリアの生まれる前からお父様に仕える年増もいいところの堅物で、反発ばかりしていたが、今ではそんな顔も懐かしい。

「嫌だ……、死にたくないよ……」

歩きだしてみると、左足を持ち上げることができない。雪の厚みさえまたぐことができず、一筋の轍が刻まれる。一歩一歩が辛い。一刻一刻が怖い。

「お父様……」

過保護にされるのが嫌で、心配そうな顔を見る度に反発していた。ハンターになったのは、そんな父への当てつけであったのかもしれない。

「お母様……」

口では決して言わなかったが、ハンターを泥臭い人間と蔑視していた。そのことに反発を覚えたのは、ハンターを英雄視する子どもじみたヒロイズムであったのかもしれない。

結局、セントポーリアがハンターになったのは親への反感を示す手段でしかない。別にハンターでなくともよかったのだ。何か父をやきもきさせて、母のプライドを刺激するものであれば。

では、それでもどうして、セントポーリアはハンターを目指したのだろう。

こんな怖い思いまでして。こんなに辛いことまでして。

「お姉様……」

姉がかけてくれた言葉があった。セントポーリアはセントポーリアです。意味がわからなかった。魔女に、姫は姫と言われた時と同じように。

何がなんだか、もうわからない。

どこかを叩かれて、どこかへと飛ばされて、どこかへと落ちる。

もう体中が痛んで、どこをどうされたのかさえわからない。

息苦しさから、何となくうつ伏せに倒れているらしいことはわかった。

セントポーリアはセントポーリア。姫は姫。では、セントポーリアとは何者で、姫であるとはどのような意味だろう。

お姉さまはセントポーリアを妹として接していて、魔女は単なる見習いハンターとして扱った。両者に共通するのは、ミスカトニック王国第二王女としてではなくて、一人の人として触れてくれたということ。

姉にとって、セントポーリアの王女であるということに意味なんてなかった。どのような出生であれ、妹であることに変わりないからだ。

魔女にとって、セントポーリアが王女であろうと関係なかった。見習いとして扱うことは変わらず、しかし、王女であるという事実は変わるものではないから。

もしかすると、王女という出生から逃れようともがくあまり、そのことを最も強く意識していたのはセントポーリア自身であったのかもしれない。

父が国王であろうと、父であることは変わらない。母が王妃であろうと、母であることは変わらない。王女であろうがあるまいが、姉は大切な人である。

「姫は、……姫だろう、か……」

魔女は、いつも肝心要のことを教えてくれない。はじめから言ってくれればよかったのだ。出生は変えられるわけでもないし、それを強く意識しすぎることは、反対にそのことに囚われてしまうことになるだけだと。

最後の力なんて使い果たしたとばかり考えてた。それでも不思議と、体を起こすくらいの力はあった。腕が震えて、それでも這い蹲って、体を持ち上げる。よろめいた体をとどめるほどの力はなくて数後ずさる。

「死ぬ……、もんか……」

魔女には文句を言ってやりたい。でも、家族には謝りたい。結局、家族の気持ちなんて考えもせずに喚き散らしていただけで、悲しい思いも、苦しい思いもたくさんさせてしまった。

こんなところで死んでしまったら、それこそ、過ちを重ねてしまう。

「死ぬ、もんか……！」

歩けば、わき腹が悲鳴を上げ、足が痛む。真正面から吹き付ける吹雪は、容赦なく体温を奪う。

悪魔が倒せるはずはない。それでもいい。魔女は必ず来てくれる。それまでは、倒れるわけにはいかない。

フルフル亜種の赤い皮を張り付けた狩猟笛は雪の中でとてもよく目立った。普段なら数秒で歩けるほどの距離をたっぷりと時間をかけてあるいて、狩猟笛を拾い上げた。本来なら肩に担ぐべきだが、

それほどの力はなく、フルフルの口は雪をかじっていた。

吹雪はやまず、悪魔は夜闇のどこか。

声は聞こえている。まるで空から降ってくるような声で、すべての方向から聞こえてくるような気がする。

吹雪が目に入って痛い。だから、セントポーリアは一気に振り向いた。

瞬間、虚空から霧状の何か――赤黒い光が含まれている以上、悪魔の毒に決まっている――が頭上を通り過ぎた。フード状の兜が霧を浴びると急速に劣化し、セントポーリアの頭から原型を残さずはがれ落ちる。

それでも、頭に被害は出ていない。踏み込む一歩。勢いを殺し、それを狩猟笛へと伝える。

ハンマーにはできなくて、狩猟笛にはできること。それは、奏でることばかりではない。軽い狩猟笛は、重厚なハンマーに比べると遙かに容易に振り上げるという動作ができるのである。

狩猟笛を両手で、上へと放り投げるくらいの勢いで振り上げた。そこには悪魔の頭がある、はずだ。

推測が確信を纏い、現実がそれを肯定する。

これまでとは比べものにならないほど確かな手応え。顎を下から突き上げた衝撃は、持続的に放たれていた霧が途端にかすれたことからも確認できた。そして、悪魔の苦悶の声。

声がすべての方角から聞こえるということは、音源が真上に近い位置にあるということを意味する。そして、吹雪が正面から来たと言うことは遮るものが正面にはなく、また側面に雪が不自然に遮られる箇所もなかった。よって、悪魔は後ろにいる。

一瞬判断が遅れていれば、頭から毒液を浴びせられていたことだろう。それでも恐怖なんてなかった。諦めないと決めたから。生き延びてみせると誓ったから。

何より、魔女を信じることにしたから。

悪魔の気配が消える。また、どこかに飛び去ったのだろう。しかし、傷を負わなかったということではないらしく、威嚇の声がどこかからか漏れていた。

残念ながら、セントポーリアにはこれで限界らしい。いつの間にか、狩猟笛は雪の中に落ちていた。腕に、もう満足な力は入らない。

立っていること自体できそうにない。

自分という石像が足下から砕かれていくような、そんな感覚を味わいながら、セントポーリアは力なく後ろへ倒れた。

そして、誰かが優しく抱き止めてくれた。体中を傷だらけにした魔女が、セントポーリアのことを抱き止めてくれていた。

「よく、頑張ったな、姫」

血を流す額に、切れた頬。セントポーリアの涙で滲んだ瞳は、力

強く笑う魔女の微笑みを映し出していた。

第九話「赤眼の王女と戦の笛」（後書き）

狩猟笛の描写は、やはり難しいものですね。何となく音楽っぽくしたくて、組曲惑星のタイトルを無断流用しました。

第一〇話「赤眼の王女と凶眼の魔女」

北海からの乾いた風が水晶の森を凍りつけながら吹き抜ける。時には、空を飛ぶ鳥さえも凍らせるとされる風は木々に氷の鎧を与え、冷たい刃を生えさせる。

命が生きるにはあまりに過酷で冷厳。一切の容赦や贔屓を持つことなくすべての命を森は拒む。

月明かりを乱反射する氷の枝は、淡い光をまとって幻想的でさえあった。悪魔の棲む城は、月を着飾っていた。

木々は壁であり、兵であり、そして門である。密生して生える枝は人が通ることのできるほどの隙間もない。鋭く凍り付いた枝は刃と何ら変わることはない。そして、悪魔はそれを踏み砕いて森の外へと遠征する。

命を削り落とす風に守られ、森は、堅牢な城塞に等しい。そして、どのような城とて、いずれは攻略される定めにある。

セイレムの魔女がヘビィボウガンを構えた。角竜ディアブロスと火竜リオレウス。二種の飛竜の防具を纏い、その銃口は恐暴竜イビルジョーの禍々しい口を模している。イビル・マシーンと呼ばれるそのヘビィボウガンは、この地方で考えられる限り、最も強力に貫通弾を使用できるボウガンである。

まずは銃声。続いて、氷に命中したとは思えないほど甲高い音が響いた。貫通弾は氷の枝に命中すると、かすかな傷だけをつけて森の中へと消えていった。

「これでは一〇〇発あっても足りないな」

魔女は、森へ足を踏み入れようとしていた。そのためには枝を払わなければならない。しかし、凍り付いた枝は、あまりに硬い。ハンターが携帯できるような武器ではどれほど時間がかかるかはわからない。

そして、時間がないのだ。今、たった一人の少女が悪魔と戦っている。ハンターが二人、それなら確実に弱い方を狙う。それが悪魔だからだ。

ヘビィボウガンを担ぎなおして、魔女は森へと歩く。近づく度風がより強く吹き付け、刃と何ら変わらぬ光沢を持つ枝が光る。

角竜の兜に隠された魔女の顔は笑っていた。人の肉を易々と斬り裂く枝を前に、魔女は笑うと、背中から取り出した一振りの大剣を叩き落とした。

それは、黒ずんだ褐色であり、赤と黒である。凄くさびた大剣は悪魔の毒をこぼしながら、枝を瞬時に腐食させ、叩き折る。

大剣は中腹で完全に折れていた。その断面は厚く覆っている錆に挟まれた独特の光沢を有する金属を覗かせていた。この大剣の本来の姿を垣間見せていたのである。そしてそれは、輝くほどの毒を放っていた。

これまでできなかった。確信がなく、また悪魔をいたずらに刺激してしまわないために。しかし、今魔女を止める者もいなければ、悪魔はすでに森の外に出ている。悪魔の毒で森に踏み入ることがで

きるのではないか。

魔女はまた一度、剣を振るう。

月明かりさえ浸食せんとする毒が瞬き、枝が一つ、また一つと弾け飛ぶ。それは小さな破片となって魔女の体に降り懸かった。強固な角竜の甲殻に傷がつき、火竜の鱗が剥がれ落ちる。肌に触れては、たやすく一筋の血が流れた。

傷を瞬く間に寒風が凍り付かせ、痛みが脳髄を刺激する。

だからこそ魔女は、より強く大剣を振り上げた。枝が砕け、その分だけ森の奥への道が開かれる。そして同じだけ魔女の体は傷ついた。

それでいい。この痛みは、それだけ森を突き進むことができるのだと教えてくれる。枝が砕けたことの証左。

「この程度、これくらいで！　私を止められると思うな！」

一際大きな固まりが兜をかすめ、額が切れる。もはや用をなさない兜を荒々しく投げ捨てたところで、魔女は木陰に目的のものを見つけることができた。

それは、赤い、赤い実である。新鮮な血液のような赤さと、酸化した血液のような黒ずみが縁を覆っている。

セイレムでは悪魔の実と呼んでいる、悪魔の毒を持つ実である。他の木々が生育する場所には決して生えず、この水晶の森のような極地にのみ、その実を根付かせる。その果汁は強力な腐食性を持ち、

悪魔の毒そのもので、錆び付いた大剣と同種の力を持つ。

魔女は悪魔の実を荒々しくもぎ取った。一つの根に複数の拳ほどの大きさの実がなっている。まるで地面から直接実が生えているような奇怪な植物は、葉のような邪魔なものがないだけもぎ取りやすい。

もぎ取った途端に、ちぎれた根から流れた果汁がグローブを苛んだ。

魔女はそれを満足気に眺めていた。

アイテム・ポーチから取り出されたのは一つの骨であった。カラ骨と呼ばれる、内部が空洞になった骨を弾丸として使えるように縁を加工したもので、内部に様々なものを詰め込むことで特殊な弾丸を作ることができる。

たとえば、悪魔の実の果汁などどうだろうか。

カラ骨の上で、悪魔の実を握りつぶす。赤黒い果汁がカラ骨を満たし、途端に腐食が始まる。しかし、カラ骨の中でも特に大きなものを使用したため、弾丸はその腐食に耐えた。

言うならば、滅魔弾の完成である。ただ、これは語呂が悪いため、名前は後で再検討する必要がありそうだ。

「姫は休んでいろ。後は、私の仕事だ」

そう言うと、魔女はセントポーリアの体を雪が積もってできた小山に安置した。

魔女自身全身傷だらけで、打撲が主な傷であるセントポーリアと比べると、これではどちらが悪魔と戦っていたのかわかりはしない。

「どこ行ってたの……？」

「森林浴だ」

水晶の森だ。それくらいなら、セントポーリアにもわかった。ただ、その目的も理由も皆目見当がつかない。

悪魔の声がして、魔女はヘビィボウガンを構えながら振り向いた。吹雪の中、それでも悪魔の居場所を掴むのは容易ではない。もっと吹雪いてくれれば、輪郭くらい浮かび上がってくれそうなものなのに。

「姫、悪魔はどちらの方角にいる？」

いきなり魔女に言われたのはそんなこと。瞬きを2回して、それでもよくわからない。だから、とりあえず声の聞こえる方を指さした。まだ体が痛むため、それだけでもなかなかの重労働であった。

「あっち、かな……？」

そう言うと、魔女はいきなりボウガンをぶっ放した。

これまでに聞いたことのないような轟音に耳が痛くなる。同時に、魔女の体が大きく仰け反り、放たれた弾丸は赤黒い――悪魔の毒と

同じ色である――軌跡を描いた。

射線上の降り積もった雪がはぎ取られ、風そのものが壊されてしまったみたいに乱れた気流が生じた。赤黒い光が虚空で爆ぜると、そこには悪魔がいた。

苦痛に悲鳴を上げて、悪魔は体を揺り動かした。弾丸は、首の横と翼をかすめるように命中したらしい。何故こんなことがわかるかというと、弾丸がかすめた部分が、まるで剥がれ落ちたように見えていた。語弊はあるかもしれないが、そうとしか表現のしようがない。不可視の衣がそこだけ剥げててしまったみたいに、首の一部と翼が細長く見えていた。

悪魔の毒には、悪魔を倒す力がある。

一変してしまった射線上の光景。その先で苦しむ首と翼だけの悪魔。

「すごい、これなら……」

「想像外にうまくいったな。だが……」

これほどの威力を見せながら、魔女の顔は――兜をかぶっていないため、よく見える――必ずしも勝利の確信に満ちてはいなかった。

その理由は、黒煙を吐くボウガンにあった。赤黒い光が部品の隙間から覗かせている。たった1度の発射であり得ないほどボウガンが劣化しているのだ。後二発、くらいは撃ててほしい。

悪魔はまだまだ健在で、見えていた部分も――膜を再生でもした

のだろうか――すぐに見えなくなる。そして、また飛び上がった。これで位置をシャッフルされてしまう。

着地の音から、大体の方角へと首を動かした。しかし、魔女は、セントポーリアと同じ方向を見てはいなかった。一瞬見当違いな方向を見てしまったのだろうかと心配したが、悪魔が雪を踏みならす気配があって、ようやく魔女も同じ方向を向いた。

「魔女、……位置がわからないの？」

セイレムの魔女が音を聞き逃す。そんなことがあるのだろうか。

悪魔が再び飛ぶ。やはり魔女の動きは目に見えて遅れた。魔女の体が宙を舞ったのは、その次の瞬間であった。

雪に叩きつけられても、魔女はすぐに立ち上がろうとする。ただ、それが無事であることと同義だとは考えない。雪の上には、明らかな血の跡が残されていた。

理由なんてわからない。しかし、魔女は明らかに悪魔を捉え切れていない。

何か助けることはできないだろうか。残念ながら、体はまともに動かせない立ち上がることさえ一苦労だろう。アイテム・ポーチの中から何かを探す。普段なら簡単に手探りだけで探せるのに、少しあわてるとおかしなアイテムを手にしてしまう。位置を覚えているつもりで回復薬を使おうとして、隣のホット・ドリンクを飲んでしまったとか、そんな話はよく聞く。

今回セントポーリアが意図せず取り出したアイテムは、音爆弾で

あった。握りやすい大きさの黒い球状。

すでに利かないことは確認されている。そして、思い出すのは嫌なこと。最初に修行を始めた際、変に耳を澄ませていたために魔女に脅かされた。普段なら、決して利くことなんてないのに。

もしかすると、悪魔にも、ふと気を抜くだとか、そんな時があるかもしれない。

根拠や確信なんてない。こんな時、世界の半分の人にしか使うことのできない便利な言葉がある。

女の勘である。

どうせ、これくらいしかできることなんてない。

投げてしまおうとして、ひどい倦怠感が体を蝕んだ。虚脱感とか、そんなものではない。これは、悪魔の毒に冒された症状である。

風が吹いていた。以前と同じように、悪魔が――恐らく、広い横幅を持つ尻尾を使っている――風を起こして、それには毒が含まれていた。

悪魔の毒が含まれた風。そして、悪魔の毒は透明の衣を蝕む。では、以前風を起こした後に姿を見せたのは、もしかすると仕方のないことであったのかもしれない。

悪魔自身も風に蝕まれているのだとしたら、そこには、隙が生じている可能性がある。

風は、前回四回起こされた。今回も同じかはわからない。油断しているかどうかもわからない。そして、音を頼りにしている保証なんてない。音爆弾が利く可能性の方が低い。

半分自棄なのだ。これくらいがちょうどいい。

四回目に合わせて、セントポーリアは音爆弾を放り投げた。投擲に力がこもらず、音爆弾は何とも頼りなげに飛んでいく。その向かう先で、悪魔がその姿を現した。

そして、音が空気に波を広げた。風の音が消えて、まるで世界にたった一つの音しか存在しなくなってしまったような錯覚の世界。一瞬が一〇秒にまで引き延ばされたような感覚の中で、悪魔は魔女へとめがけて舌を発射――そう表現した方がいいくらいの勢いである――していた。同時に、錯覚を冷然と否定する。

体を大きく揺り動かしてまでうめいたのだ。舌は軌道を外れ、魔女の脇の雪はもちろんのこと、地面を大きくえぐりとった。明らかに音爆弾の影響を受けている様子で、苦しむように首を振って、なかなか姿を消そうとはしない。

「これが……、悪魔か」

その間、魔女は目を見開いていた。その両の眼に悪魔の姿を写し取る。セントポーリアはこの時知らなかった。魔女の瞳の力と、それに見入られた者の末路を。

セイレムの里に一人の少女が生まれた。いずれはハンターとして、

セイレムの魔女となることを期待された少女は、しかしすぐにそれが不可能であることが判明した。

少女は、左耳が聞こえなかったのである。

人は両方の耳を使うことで音の方角を察知する。片耳が聞こえないということは、闇の中で音の距離だけを頼りにモンスターと対峙しなければならないこととなる。距離と角度から位置を特定することができないからである。

周囲は少女にハンターであることを望まなかった。闇の中で生活に困るだろうと、何かと少女を気遣った。

それを、少女は優しさとは受け取らなかった。気遣いの中に、自分とは違う人間を勝手に下位と見下し、世話を焼くことでそんな程度の低い人間を労ることができる優しい自分を見出たい、愉悦に浸りたいとする意図が含まれていることを察したからである。

自分は回りとは違う。そう理解されることは望んでも、自分は回りとは劣っていると見下される謂われはないと少女は考えた。

ハンターになったのは理由は、今ではほんの少しの意地と怒り、そして、劣っているという事実に屈してしまわないためであった。

耳が聞こえない。しかし目は見える引き金を引くことはできる。少女が頼ったのは、まさにそこであった。

少女は見るということを徹底的に鍛えた。暗視だとかそんなことではなくて、一度見たものを細部まで完璧に記憶できるようにしたのである。

地形を、目で見るだけで完全に頭の中に叩き込んだ。すると、目をつぶってでも見た記憶だけを頼りに見えているように歩くことができた。

モンスターを、見つめるだけでその大きさから輪郭まで完全に記憶する。すると、闇の中、かすかに爪が光ってさえいれば、それが右か左か、前か後ろ足の爪だとわかる。そのを基準として、体の現在の全体像を瞬時に把握することができた。

少女はセイレムの魔女にはなれない。しかし、やがて、8人目の魔女として、悪魔と対峙することとなった。

その瞳は、魂さえ写し取る。

姫の投げた音爆弾で苦しんでいた悪魔も、気を取り直すとともに姿を消した。続けざまに飛び上がる。こうして位置を掴ませないようにして戦うこと、それが悪魔の必殺の戦法であった。

だが、悪魔は致命的なミスを犯した。

魔女の視界の中に降りたってしまったのである。

魔女の瞳は写し取る。地形の様子を、雪の降り積もり方にいたるまで。そのうちのどこか、記憶と異なる姿に変えた場所が――それがどれほど些細であれ――あったなら、その変化さえ写し取る。

悪魔が降りた場所はわかった。耳から伝わる音は距離の正確さを

保証してくれる。そして、雪の崩れ方は、悪魔の足の位置を教えていた。

記憶の中の悪魔が、目の前の風景と重なる。

「写し取るのは、一度でいい」

見えてなどいないが、魔女の目には悪魔の姿がはっきりと視えていた。

ヘビィボウガンを構える。悪魔は体の向きを変えた。それでもかまわない。雪の払われ具合から足の動きを、そして、記憶の中から体全体の動きを把握する。

目を大きく広く、狙うべき獲物の姿を写し出す。

片耳が聞こえない少女として生まれ、ハンターとなった。そして、魔女ならぬ魔女として悪魔に戦いを挑む第八の魔女は、引き金を引いた。

セントポーリアの目の前で、それは発射された。

発射されることで砕けたカラ骨が、内部に密閉されていた悪魔の毒をまき散らす。それは雪を溶かし、大地を削り、風を喰らう。

悪魔が悪魔を殺すための毒。

悪魔の力を借りているとしか思えないほど特殊な技能を持ってい

る。だから、セイレムの魔女は魔女と呼ばれ賞賛された。それが、今正真正銘悪魔の力を使っているのは、一体何の皮肉だろう。

魔女の放った弾丸は、まるで世界が始まった時からの約束事であったみたいに、悪魔の顔面を捉えた。

飛び散る毒が降り懸かる度、悪魔の体が世界にさらされる。皮膚の一部が見えて、爪の先が見えて、翼には点々とした翼膜が見えていた。まるで、消しゴムで乱暴に消してしまったみたいに、悪魔の姿は途切れ途切れに見えていた。

弾丸の直撃を受けた顔は赤黒く変色して、鼻先から伸びていた角は、根本から折れてなくなっていた。

明らかに大きな傷を負った悪魔は、尋常でないほど苦しみ出した。大きく上体を仰け反らせたかと思うと、そのままバランスを崩して横倒しになる。倒れたまま、のたうち回る度、透明の被膜が裂けて、やがて、全身が露わになったあたりでゆっくりと起きあがった。

顔がよく見える。なんて不気味な顔だろう。目は突き出るように大きく、平たい顔は、どこか非生物じみている。あんなに長く強靱な舌なんて、ほかのどんな生物だって持ち合わせていない。

そして、明らかに怒りを湛えた眼も。傷ついた飛竜はどれほど激情に駆られようと巣に戻り休眠しようとする。あくまでも怒りとは防衛本能の発露にすぎず、何よりも身の安全を優先するからである。

しかし、悪魔は違った。そんな理屈をかなぐり捨て、ただ気に食わないから、そんな理由で魔女のことを睨みつけているように思えた。まるで、人間みたいに。

悪魔が動いた。四肢をたくましくつき動かし、大地を砕かんという勢いで突進する。その軌跡には悪魔の毒が赤黒い轍を残した。

すべてを憎んで、すべてを壊す。

そんな殺意と暴威の塊が魔女へと殺到している。

「魔女！」

セントポーリアは思わず叫んだ。

それでも、魔女は笑っていた。防具なんて、すでにぼろぼろで、悪魔どころか鳥竜種の突進にだって耐えられるかどうかわからない。

それでも、魔女は笑っていた。その手にはヘビィボウガンが構えられている。

ないものを嘆くのではなくて、あるもので最大限の力を発揮する。

魔女が引き金を引くと、世界が歓喜に打ち震え、とても大きな祝砲を響かせた。

第一〇話「赤眼の王女と凶眼の魔女」（後書き）

トライでは、龍殺しの実ってアイテムとして使用できますね。龍やられの状態を解消してくれるため、私もずいぶんお世話になりました。この小説に登場する龍殺しの実はとても口にする気にはなれませんが、まあそういう設定です。

なお、ここでいう水晶の森は凍土の東側にあります。エリア六の東側は本来絶壁が連なっているだけですが、そこを大きく切り開いて谷間にしています。そのためエリア六から水晶の森を見下ろすことができるわけです。

何かと設定捏造の多い小説となっております。

第一一話「赤眼の王女と古の龍」

いつもはっきりとしないものが、この世の中には二つある。一つは、自分がいつ寝たのだろうかということと、もう一つは、では、自分はいつ起きたのだろうかということ。

どちらも曖昧で、正確な時間を出すことはできない。

セントポーリアが覚醒したのもやはりそれである。いつ起きたのかわからない。しかし、自分の意識を意識して、目を開いた。

見えたのは天井。セイレムの里に来てから見慣れた天井である。

セントポーリアはしかれた布団に寝ていた。この魔女の家には三人が暮らしているが、寝ているのはセントポーリアだけであるらしい。首を曲げても、ほかに寝ている人の姿はない。代わりに、原型をとどめないほど破壊されたヘビィボウガンが無造作に転がされていることを確認する。

魔女のヘビィボウガンは、悪魔の毒を放つ弾丸の発射に耐えることができなかった。三度目の発射を最後に壊れてしまったのである。銃の構造に詳しいわけではないが、バレルは完全に破壊され、フレームも損害が内部構造にまで至っている様子が見て取れる。これでは、修理するよりも作りなおした方が早いだろう。

戦いは終わった。今セントポーリアが身につけているのは防具ではなく、寒冷帯特有の厚手の服である。

いつまでも壊れた武器を見ていても仕方がない。起きあがって、

扉を目指した。外からは、何やら歓声が聞こえてくる。もしかすると、この声に起こされてしまったのかもしれない。そう考えると、少し不機嫌になってもいいだろうか。

扉を開けて、木造の質素な階段を降りる。床に足をつけるなり見えたのは、お祭り騒ぎをしている人たち。その中で最初にこちらを見つけたのは、アレスだった。

この夢狩り人は、こんな時でも防具を手放していない。グローブに覆われた大きな手を振ってくる。

「まったく、お前は大した奴だ。まさかたった二人で悪魔をしとめるとはな」

そう、悪魔を、私、いや、私たちは倒すことができた。ただそれは、セントポーリアだけの力ではもちろん、魔女の力でも倒すことはできなかった。

先達である七人の魔女が戦い、残した知恵が、悪魔を倒したのである。

あんなに誰に頼って狩りをすることが嫌だったのに、今では、自然に顔が微笑みを作って、顔も知らない七人に感謝することができた。

「私は何もしてない。ほとんど、七人の魔女たちと、それに、魔女がしたことだから」

アレスはそれ以上何もいわなかった。一瞬、惚けたような顔――失礼なことに――をして、それから納得したように笑った。

少し歩いただけで里の人がいろいろな言葉をかけてくれる。ありがとう。里をよく救ってくれた。スノードロップも、とても喜んでくれた。やはり、最後まで顔を合わせてはくれなかったが。

群衆の中から姿を見せたのはヘラばあさん。どことなく妖しげな微笑みは、初対面の時と変わらない。

「世界には、あんな化け物もいるなんて、私知らなかったよ」

「そうかい。私も、こんなに強い姫様がいるなんてこと、知らなかったねぇ」

大きな声をたてた笑うと、やっぱり、この人の笑い声は夜、一人でいる時には聞きたくない。

そして、ヘラばあさんの後ろには、悪魔の亡骸がおかれていた。

木枠で囲まれて、大量の氷結晶がそこには放り込まれていた。貴重なサンプルとして保存するのだそうだ。氷の中、悪魔は顔の半分を吹き飛ばされた姿で、その目を閉じていた。

魔女の放った最後の一撃は至近距離で悪魔の顔を捉えた。

セントポーリアがそのことに気づいたのは、魔女の安否を確認しようと、痛む体にむち打って吹雪の中を進んだ時のことである。

悪魔は、顔の左半分を吹き飛ばされ、その断面は痛々しい赤黒い

色で染まっている。伸ばされた舌はだらしなく雪に埋まり、顔もまた、埋もれていた。

付近には何かの残骸が散乱している。その中の一つ、見慣れた大顎の開口部から、それが魔女のボウガンの破片であることは容易に想像がついた。

「魔女！　ねえ！？」

体が痛くて、付近を見渡すことがなかなかできない。せめて声だけでもと、必死に張り上げた。

回りに魔女の姿はなかった。銃の爆発か、悪魔の突進か、あたりの雪はかき乱されている。

魔女の姿はなかった。

「魔女ってばぁ！」

悪魔は倒したのに、七人の魔女が八人の魔女になってしまうなんて、こんな終わり方とても認めることはできない。

悔しくて、悲しくて、涙が雪の上にこぼれた。そんな涙にさえ八つ当たりの場を求めて、雪を踏みつける。薄い雪は、簡単に固い地面に達してしまった。

もう一度踏みつけてやろうか。そう考えたときのことである。声がしたのは。

「私のことは心配ない……」

声はしても、姿はなかった。そして、どこか遠くから聞こえているみたいに小さくて、どの方向からでも聞こえているような気がする。

「姫に、一つ頼みたいことがある……。姫にしか頼めないことだ」

魔女の姿を探して、足の位置を踏み変えてあたりを見回す。すると、その度に魔女の声が遠くにかすれていってしまうように小さくなった。

「魔女……」

もしかすると、寒さのせいで幻聴でも聞いているのだろうか。そんなこと、信じたくない。

「何さ！　頼みごとって何！　早く言ってよ！！」

雪の中、セントポーリアの声ばかりが響いた。発声するために力んだ足を、何かが掴んだ。

「へ？」

この里に来て二回目の間抜けな声が出た。足下の雪の中から伸びた手が、セントポーリアの足を掴んでいた。

「頼むから、足をどけてくれ……」

セントポーリアは、もてる理解力のすべてをもって状況を判断した。すぐさま跳び退き、雪をかいた。すると間もなく、雪の下から

うつ伏せの状態で埋まっていた魔女を発掘する。

「ちょっと、魔女！」

揺り動かすと、魔女はゆっくりと上体を起こす。

真下に音源があるのなら、左右ばかりに気を取られていればすべての方向から聞こえるに決まっている。

「姫は、まだまだ修行が足りないな」

そう言って笑う魔女の顔は無事を告げるようにしっかりとしていた。

「魔女！」

嬉しくて、考えもなしに抱きつこうとした。すると、魔女の背中に回した手が何か固いものに触れて、鋭く突くような痛みが走った。つい、手を離すと、体が無理な体勢のまま地面に叩きつけられた。そして、セントポーリアは全身に打撲を負っている。体中を走る痛みに、人には聞かせられない奇々怪々な声をだしてのたうってしまった。

「姫が踏んでいたのはこれだ。感触でわからなかったのか？」

セントポーリアが苦痛にうめいていようとあくまでも冷静に、魔女は背中から剣を差し出した。錆び付いて、それでも断面から悪魔の毒を発し続ける大剣である。

魔女は、その大剣をセントポーリアに握らせた。

「とどめをさしてやれ」

「とどめ？」

風に混じるかすかな息づかい。悪魔の残された方の目が、二人を見ていた。顔を半分も吹き飛ばされても、まだ息がある。そのことには、驚きよりも恐怖を覚えた。それを和らげようと、魔女が握ってくれた手は、同時に、現在の魔女にはほとんど握力がないことも示していた。

剣を受け取って、悪魔の顔が見える位置にまで移動する。見下ろすと、悪魔は反対にこちらのことを見上げていた。口からかすかに漏れる吐息は、本当に虫の呼気を思わせるほどにか細い。

悪魔とは、一体なんなのだろう。他の生物とはまるで違って、どこか人間じみた行動さえ行う。戦いが終わった今、ここには憎い敵ではなくて、ただ死を前にした苦しみにさらされている生物がいるだけである。

怒りだとか憎しみは湧かない。ただハンターとして、狩った獲物にとどめをさすことが礼節であるように感じられた。

大剣を肩越しに構える。

すると、悪魔は死を覚悟したように目を分厚い瞼で覆った。それこそ、まるで死を覚悟した人のように。

セントポーリアは、魔女たちの間に受け継がれた大剣を、悪魔と呼ばれ恐れ、蔑まれた何かへと振り下ろした。

今、悪魔の顔にはセントポーリアが与えた傷も残されている。

本当に、悪魔とは何なのだろう。どんな本にもお話にも、こんな生物の話はなかった。いや、お伽話には聞いたことがあっただろうか。

人が悪さをするとやってくるお化けみたいなモンスターのことを。それは古龍と呼ばれ、親のしつけの強い味方である。そして、現実の存在ではない。

考えてもわからない。そう、悪魔から意識をそらすと、群衆たちの中から見慣れない一団が姿を見せた。白い、どこか派手な制服を身につけている。ギルドナイト――そもそも、里に駐在しているギルドナイトの顔は知っている――とはどこかが違った。

そして、そのうちの一人にセントポーリアは見覚えがあった。

「あれ、あなた、確か……」

一団の先頭を行くのは女性である。目元にしわが目立ち始めた女性は、年齢はすでに三〇を超している。それは別に顔を見ずとも判断できる。なぜなら、セントポーリアが生まれる前からミスカトニック王国に仕えているのだから。

女性は、堅苦しい口元ながら、厳しいとも、無表情とも違う凛とした顔をして、ゆっくりと頭を下げた。

「はい。グラジオラスと申します。ミスカトニックに、あなた様のお父上に仕える者です」

別に頭を下げてもらいたいわけではない。しかし、いちいちそれを告げても、押し問答になるだけだということを、セントポーリアはすでに学んでいる。

「お父様は、これが何か知ってるの？」

このタイミングで王国の使者が現れた。セントポーリアを連れ戻しに来たと考えるには唐突で、さらにグラジオラスはそんな小間使いを任せられるような人物ではない。

悪魔を見に来たのだと察することは容易であった。

「手足があるのに翼もある生物なんて聞いたこともないよ。それに、ちょっと語弊はあるけど、姿を消せるモンスターも見たことない」

グラジオラスはためらったように悪魔を眺めて、そして、決意を固めたようにセントポーリアと目を合わせた。

「私たちは古龍と呼んでいます。人の歴史の影に時折姿を現す謎のモンスターです」

そんな話があるのだとすれば、それこそお伽話ではないだろうか。猜疑心が顔に出たのだろうか。

「姫様は、ドンドルマの街をご存じでしょうか？　それが山岳地帯にあることも？」

うなずくまでもなかった。ドンドルマの七つある街の中でも特に大きなもので、国へと成長することが確実視されているほどの規模を有する。知らない者などいるはずもなく、グラジオラスにしても話の導入のつもりにすぎなかったらしい。すぐに話に入った。

「ここでは、我々がシェンガオレンと呼ぶ巨大な甲殻種があまりに長い周期で放浪を続けています。まだまだ先の未来でしょうが、やがてはドンドルマを襲撃するものと予測されています」

「そんなの聞いたことないよ」

「隠しているからです。我々三つの王国とハンターズ・ギルドが協約、いえ、密約のもと」

司法を司るハンターズ・ギルドと行政の最大単位である国が協力すれば、大抵のことはできてしまうだろう。ただ、そんな巨大な生物があんな大きな街のそばに生息できるということは、自然と首を傾かせるに足る事実であった。

「そんなこと本当にできるの？」

「姫様。ドンドルマの街はすでに発展し、人々が利用するルートは確立されています。いつも人が通る道と、決して人が立ち入らない場所とに分かれているのです」

まさか、安全なルートが確立されてなお、危険な遠回りをする人もいないだろう。このことに関しては、頷くことができた。

「姫様。世界はあまりに広大です。既知で覆い尽くされることなどありえません。山を登頂すれば、その先にはまた山々が連なってい

ます。森を切り開いても、さらに奥には森が広がっているのです。そしてまた、既知で埋め尽くされたという油断に乗じて未知は入り込むのです。人の目をかいくぐるようにして」

いつの間にか、話しているのはグラジラスだけになっていた。周りの人々は、誰一人話すことなく耳を傾けている。

世界にはまだまだ未知が多くて、その中にはどんな危険が潜んでいるかわからない。そのあまりに強烈な先例を、この里の住民は知っている。

「こんな化け物がまだいるの？」

「ここは、ほんの一例にすぎません。だからこそ、我々王立古龍観測隊は結成され、日々情報を集めています」

「ミスカトニック王国を守るため？」

「いえ、人の世界を守るためです」

そのグラジオラスの言葉は、とても強い響きをもって、セントポーリアの耳に届いた。

古龍を倒して、それで何かが変わったなんてことはなかった。ただほんの少し強くなれた気がして、ほんの少し周りのことが見えるようになった気がして、だから、ほんの少し前に進める気がした。

人はそんなに急には変われない。いつもと同じ日常をそう易々と

は手放したくないように。

太陽が沈んで、月が我が物顔で空に輝いている時、セントポーリアはまた、丘へと登るために壁に手をかけた。魔女と一緒に水晶の森を眺めて、魔女と一緒に古龍を倒したこの丘へ。

壁を登りきると、魔女がいつものように水晶の森を眺めていた。

「やっぱりこんなところにいた」

意識して大きな声を出した。すると、今度こそ、魔女はすぐにこちらに気づいた。

「おや、姫。また来たのか？」

いつものように、魔女の隣に座って森を見下ろす。いつものように、森は光を発して、綺麗だった。

「ねえ、魔女。三つ、聞きたいことがあるんだけど」

魔女は無言のまま、軽く顎を動かした。

「もしかして魔女、耳が悪いんじゃない？」

「どうしてそう思う？」

「前ここで話しかけた時、すぐに気づいてもらえなかった。それに、音のする方向がわかってないみたいだった」

魔女は軽く笑った。

「そうだ。私は生まれつき片耳が聞こえない」

そう示されたのは左の耳。そして、セントポーリアが座っているのも左側である。右側に移った方がいいだろうか。しかし、今更場所を移るのは気まずい。結局、同じ場所に居座ることにした。

「それじゃあ、どうやって闇の中で戦ってたの？」

「目だ。私は目にしたものを一瞬で記憶できる。だから地形やモンスターの姿を覚えて、それを頼りに戦った。どこか一部でも見えていればいいんだ。足を踏みならす音がして、その位置がかすかでも見えていれば頭の中の記憶と照合して、狙うべき部位を推測することができる」

セントポーリアも行っていた、聴力を視力で補う戦い方を、魔女はより高度に行っていた。アレスがセントポーリアを魔女に預けたのは、単に知り合いの女性であるというだけではなかった。

「悪魔の襲来がわかったのもそのためだ。毎日見ている光景と、あの時は違った」

横顔から覗くことのできる魔女の目は、その事実を知って何かが変わった訳ではなくとも、とてもすごいもののように思えた。

「まるで凶眼ね。あまりいい話じゃないけど、見た相手を不幸にしてしまう目つきっていうのがあるらしいよ。魔女の目は、本当に凶眼だと思う」

「では私は凶眼の魔女か。悪くはないな」

魔女は、しっかりとした目つきをしていながら本当に屈託なく笑う。ただ周りにわめくことしかできなかったセントポーリアとは違う。この人からは、学ぶべきものがあまりに多い。

「これは二つ目なんだけど、最初、音爆弾使ってたけど、あれ、どうやったの？」

最初の訓練の時、音爆弾では地形を様子を把握することはできないはずである。それでも、魔女は闇を気にしていなかった。

「慣れた場所だ。それに、音爆弾の発するかすかな光であっても、私には十分だからな」

やはり、魔女の目は凶眼である。決して目標を見逃さない。とても真似ができるものではない。

「じゃあ、最後の。七人目の魔女って、魔女にとって誰だったの？」

「師匠だった。やはり、私も五年前、師を見送ることしかできなかった。嫌なものだろう。1人にすべてを押しつけて、安全な場所に引きこもっているのは」

そう言って、魔女は笑いながらセントポーリアの頭を撫でた。ずいぶん簡単に古龍との戦いに参加することが許されたと思っていたが、どうやら、戦力としてよりも、同類への同情の方が大きかったらしい。

魔女は、たとえ一人でも古龍と戦うつもりでいたのだろう。本当に、セントポーリアは魔女には遠く及ばない。

「嘘ついたことは、許してあげるよ」

「嘘なんてついていない。確かに私の母の友人の……」

「前、母の従姉妹って言ってたよね？」

確かに師と弟子に血縁関係がなくても決しておかしくはない。ただ、誤魔化されたということも事実であるようだ。

本当に、魔女は肝心なことを話してくれない。

こちらが白い目を向けていても、まるで気にした様子を見せなかった。仕方がない。魔女とは、こういう人なのだから。

ついため息が出た。それでも、このことだけは、しっかりと答えてもらいたい。

「これは、質問じゃなくてお願いなんだけど、やっぱり、私のこと、姫じゃなくてセントポーリアって呼んでくれない」

「姫は姫だろう」

「それはわかってるけど、それでも、私は私だから。国王の娘に生まれた。それでも、私は私だから。別に、王女であることを忘れるだとか、やめるなんてこと、しないしできないよ。でも、必要以上にそんなことに囚われるつもりにもなれない」

たとえセントポーリアが姫であろうとなかろうと変わらないものがある。家族という存在や、魔女という大切な師の存在も。

ただ、姫であったからこそ、アレスや魔女との絆を得ることができた。

セントポーリアでいることと姫でいること。これは、どちらか一方を選ぶようなものでもなければ、囚われてしまうことも馬鹿らしい。

「姫と呼びたい人にはそう呼ばれても構わないけど、魔女には、やっぱり姫と呼んでもらいたくない」

魔女はやっぱり笑って、それでも、その瞳をしっかりとセントポーリアへと向けてくれた。すべてを写し取る凶眼がとても優しい光を帯びる。

「わかった。セントポーリア。次からはこう呼ばせてもらうとしよう」

「ありがとう」

だから、交換条件として、セントポーリアも魔女のことを名前で呼ぼう。セントポーリアと同じく、魔女は花の名前を持っている。

はげしい情熱だとか、そんな意味の花言葉を持つ魔女の名前を、セントポーリアは胸の高まりさえ覚えて口ずさんだ。

「アマランサス」

最終話「赤眼の王女と七人の魔女」

「どうした？　後五周だぞ、セントポーリア」

洞窟は暗い。視力はものの役には立たず、声と、乱れた息づかいだけが聞こえてくる。付け加えるなら、足を引きずるような足音もあった。

「わがっで……」

声が声にならず、言葉が言葉になっていない。

古龍をしとめようと、修行が終わったわけではなかった。そして、いつでも役に立つものは、基礎体力である。暗い闇の中をセントポーリアは走り、時折壁にぶつかっては、男が女性に期待するような可愛らしい悲鳴ではなく、豚が鼻をぶつけたような声が漏れ聞こえる。

魔女アマランサスとセントポーリア。続いて聞こえてきた笑い声は、明らかに男性のものである。

「お前の姉さんは優雅な人だが、お前はいつまでたっても泥臭さが抜けないな」

「うっさい！」

もはや息も絶え絶えだというのに、悪態だけは一人前であった。

そんな未熟なハンターの様子に、この場で唯一の男性であるアレ

スは笑う。満足するまで笑うと、アレスは急に声を潜めた。

「すまないな。突然押しつけてしまってな」

その声はすぐ隣に立つアマランサスへと向けられていた。

「アレス、君は私とあの子を重ねたのか？」

一人は片耳が聞こえない。もう一人は日光を浴びることができない。そして、二人は奇しくもハンターを目指して、同じ男を知っていた。

「ああ。お前なら、あいつに技以上のものを伝えられると思ってな」

「買いかぶりすぎだ。セントポーリアなら、自分で答えを導き出せた。たとえ、私がいなくともな」

「お前がそうであったようにか？」

闇の中、互いの表情は見えなくとも、笑い合う声はかすかに響く。

それから、短い足音がして、布が擦れ合う音がする。

二人は、どれほど深い闇の中でも互いの目を見ることができるほどに顔を近づけていた。

「セントポーリアがいるんだぞ」

「どうせ見えてなどいない」

「しょうがない奴だ」

「見えなくても聞こえてるんだけどね……」

息がひどく切れている。そのこと以上に、声が深い抑揚を持ったのは、怒りが原因である。

セントポーリアが視力なんてまともに働かない闇の中をすでに一時間以上も走り続けているというのに、先達のハンター二人は暗闇で見えていないことをいいことにいちゃついている。そんなことを許せるだろうか。

「いつか覚えてろ……」

ミスカトニック第二王女のほの暗い決意は、わずか数ヶ月後に結実することとなる。

そして時は数ヶ月後に移る。場所はミスカトニック王国。

光を極力取り込まない構造は、セイレムの里同様薄暗い景観を呈していたが、敷かれた絨毯や、闇の中にかすかに顔を覗かせる調度品の類はここが集落ではなく王国であることを示している。

セントポーリアは、それこそ妙に値段の高さを主張する豪奢な椅子に、ふんぞり返って座っていた。筋肉がつきすぎたために、サイズを変更しなければならなくなってしまった純白のドレスを着こな

しながら。

謁見の間。単なる王女にすぎないセントポーリアにそんなものが与えられるわけがないので、部屋の一室から家具を取り払い、一番高そうな椅子を端においてせめてもの雰囲気を演出している。

現在迎えているのは、新しく城に仕えることになったハンターである。

名はアマランサス。セイレムの里に暮らす、魔女ならぬ魔女である。

目元が何とも凛々しく、謁見のためにわざわざ仕立てさせた紺色の制服――男物なのだが――がよく似合っていた。男装の麗人。よく聞く言葉だが、それをものの見事に体現できる女性は決して多くはないだろう。戦士としての確かな実力とそれに裏打ちされた自信が伴わなければならないと、セントポーリアは考えるからだ。

アマランサスは、片膝をついてひざまづいていた。ただ、これはあくまも形式的なものであり、その顔から不遜な笑みは消えていない。

そして、セントポーリアもそれを望んでなどいなかった。

「アマランサス。あなたは以後、特務騎士として、私と、このミスカトニック王国に仕えなさい」

アマランサスは、片手を軽く振って見せた。ずいぶんと軽いが、了承と忠誠を表明したのである。

「それで、私は何をすればいい？」

深き森の中に潜む、鼻から口から炎を吐き、その顎は開けば地をかすめ、上顎が天にも達する巨大なモンスターをしとめてきなさい。そんな命令を期待しているのだとすれば、裏切ってしまう――それは何とも心苦しいが――ほかない。

セイレムの里では、音爆弾を不意に聞かせられたり、ギィギを間近で見せつけられたり、苦しい修行に、そんな最中にもいちゃつかれたりした。

セントポーリアは、自分の顔が邪悪に歪んでいく様子を実感する。

「もちろん、城のしきたりを覚えてもらいます。メイド衆、やりなさい！」

指を鳴らす。すると、薄暗い部屋の隅から、五名の赤い制服を着た女中が素早くアマランサスを取り囲むと、有無いわせず隣室に連行する。

メイドたちは皆妙にのりがよく、皆楽しそうに誘拐を手際よくやってのけた。

隣の部屋からは暴れる声と音。ただし、声はアマランサスのものだけである。もっとも、それも一〇分もしたところで聞こえなくなった。どうやら、観念したらしい。

それからさらに二〇分後。

アマランサスは謁見の間に戻ってきた。

赤を基調とした衣を、大きなエプロンとカフスや襟元の白が際だたせている。大きな屋敷や城で雇われる女中が身につけることの多いその服は、メイドと呼ばれるものである。ついでに髪型も頭の両横で結ばれ、ずいぶん女性らしさを強調するものになっていた。

凶眼の魔女の面影はない。後ろでは、やり遂げた、そんな顔をして胸を張るメイドたち。

「何だ、この服と髪型は？」

とうのアマランサスは困惑した顔を浮かべていた。やはり、可愛らしいというよりは美しいだとか美人だとか、そちらの形容の方が似合う端正で怜悧な顔つきは、メイド服がまるで似合っていない。

「メイドの基本的な服よ。大丈夫、内部に針金を通して、防具としても十分な性能を持ってるから」

実際、狩りに出ても支障がないくらい、メイド服は頑丈である。ありとあらゆる雑務に対応する、いわば家事のコンバット・メイルを侮ってはいけない。

「アマランサス、今日からあなたにはその服を身につけ、メイドにふさわしい振る舞いをしてもらいます。返事は？」

しばらく、無言の睨み合い。しかし、セントポーリアが瞬きもせずに視線を逸らさないでいると、折れたのはアマランサスの方である。

「わかった」

ため息をつきながら答える。恐らく、メイドの真似事でもしてお茶を濁すつもりでいるのだろう。

が、メイドの修行はそんなに甘くはない、ものにしてみせる。

セントポーリアはどこからともかく、厚紙を幾重にも折重ね、根本を縛り柄状にしたものを取り出した。東方から伝わったこの凶器は、その名をハリセンといい、人を叩くと痛みが少ない割にひどく派手な音が出る。人を痛めつけることなく、それでも人を強打した感覚を味わえる一品である。

椅子から飛び出すなり、セントポーリアはハリセンを一閃させた。額を叩かれながらもあまり痛そうではないアマランサス。しかし、小気味よい音が響く。

「返事はもっと笑顔で、甘ったるい声では～いと答えなさい！」

実例として、自分では～いと言ってはみたものの、これを実生活で続けるには相当な精神力を必要とする。言ってしまうなら、恥ずかしい。

かのアマランサスでさえ、顔を赤くして抗議した。

「ば、馬鹿を言うな！」

その頭をまたハリセンで叩く。

「嫌なら、え～そんな～。あるいは、そんなこと言っちゃ駄目ですよ～など！」

言っておきながら、こんな口調は自分にも相当なダメージを与えてくれる。それでも、セントポーリアを支え続けたのは、復讐心である。

「私はもう二〇だぞ。そんな小娘みたいな……」

「あなたは今から永遠の十七歳です。わかった？」

ハリセンの音を響かせながら。

「わかるわけがないだろう！」

次は顎を打つ。

「もっと媚びた声を出せ。胸焼けしそうなほど甘ったるい声だ！」

そして、連打。こんな時大切なのは勢いと勢いと、そして勢いである。倫理だとか知性だとか、そんなものは何の役にも立たない。必要なのは相手に考える時間を与えない速さ。その一言に尽きる。

「いいか、お前はメイドだ！　メイドの星になるんだ！」

もう口調さえ変わってしまっている。

さすがの魔女も、そんなセントポーリアの様子に気圧され始めていた。

「は……い」

その声に、わずかながら高い声音が混じり始める。堤防の些細な決壊を見つけた押し寄せる濁流のように、セントポーリアの瞳が暗く輝いた。

「は～い、でしょ！」

またハリセンの強烈な音。本当に重たい一撃を加えているかのように錯覚させられるいい音である。

「は～……い」

「表情が固い。目つきが悪い。それでメイド・オブ・メイドになれると思うな～！！」

やがて、頑丈な紙で作られたはずのハリセンは、すぐにぼろぼろになってしまった。

それから半年後のある日。セントポーリアは蝋燭の光を頼りに本を読んでいた。別に何の本であるのか、またその内容に意味はない。少し椅子の座り心地が悪いが、それも今は大した問題ではない。

事件は、肌刺す冷気の里から訪れた。

メイドの一人が、何気なく伝えた言葉。

「セイレムの里から客人が参られました」

「ああ、じゃあ、出迎えに行かないとね」

予定されていたことで、特に急なことでもない。本を閉じて、一抹の不安からついそのままの姿勢で一〇秒ほど固まってしまう。

その隙に、メイドはとんでもないことをさらりと言ってのけた。

「いえ、それならもうアマランサス特務騎士がすでに出向いています」

波が引いていくような音がどこからともなく聞こえた。きっと、血の気がひく音というものだろう。

しばらくして、地震かと見紛うほどの轟音が響いてきた。誰かが――大体想像がつくのだが――廊下を爆走している。

部屋の前の角を曲がって門扉が大タル爆弾でも使われたのかというくらい勢いよく開かれる。現れた少女は、セントポーリアの姿を確認するなり雪獅子ドドブランゴも自信を喪失してしまうほどの力で飛び出した。

人見知りで、その分物静かなセイレムの魔女、スノードロップである。

その手は力強い。何故それがわかるかというと、セントポーリアの胸ぐらを、絞め殺さんばかりの勢いで掴んでいるからである。

その目は血走り、ストレスのあまり破けた毛細血管からは血涙が流れ出ていた。人と顔を合わせることができないくらい恥ずかしがり屋なスノードロップが、今は何とすごい形相でセントポーリアの顔を凝視していた。

「一体、どういうことですかぁ～！」

完全な涙声である。

里にいる時にはまるで顔を合わせてくれなかった友人が、これでもかと目を合わせようとしている。セントポーリアは反対に冷や汗を浮かべたまま、目をそらすことしかできないでいた。

「いや、それがね、ちょっと修行が厳しかったかなって、思って、つい、その、メイドの教育にかこつけて、復讐してみたいな～ってね？」

場の雰囲気を和らげようと言葉を選んで、柔らかい表現に終始するも、スノードロップは、これならまだ親の仇を見る目の方が優しいのでは、そう思わせてくれるほどの眼力を姫に飛ばす。

口先だけで、怒りをそらすことは、おとなしい草食種モスと死闘を繰り広げるくらいに難しい。

「……ごめん。まさか、あんなに変わるって、思ってなくて……」

その時、扉から、一人のメイドが姿を見せた。とても柔らかい微笑みと、楽しげな雰囲気、動作の端々にまで可愛らしさがにじみ出ている。

「スノードロップ、女の子がそんな怖い顔しちゃいけませんよ」

何かが切れた音がした。スノードロップがゆっくりと後ろへと倒れ、完全に意識を失っていた。感情が高ぶりすぎてしまったのだ。

感情が高ぶりすぎて意識が飛んでしまった人物を見たのは、セントポーリアにとって後にも先にもこの一件だけであった。

それから三年。セントポーリアは王立古龍観測隊の責任者を任せられるようになり、通称七人の魔女と呼ばれる直属のハンターを部下に持つようになった。

ミスカトニック王国の図書館。ここに、七人の魔女すべてが、一年ぶりに集う。

フィロソフィア、フィリア、ソフィアの三姉妹とは二年前に炎猛る山で出会った。炎王龍と呼ばれる古龍との戦いに古龍観測隊として協力し、三人の魔女を得た。

水晶の森を臨む里からは、スノードロップ。あれ以来、人見知りが悪い方向に先鋭化されてしまい、無愛想で人には容易に心を開かない少女になってしまった。それでも七人の魔女の一人としてセントポーリアに仕えてくれるのは、姉がそれを望んでいるからの一言に尽きた。

そして、薄暗い部屋の扉が開かれた。

グラジオラス。七人の魔女の中で最年長のこの女性は、この頃髪に白髪が混じり始めたと愚痴をこぼしながらも、誰よりも危険な場所に出向き古龍のことを調べる大先輩でもある。

身につけた防具が、どんな装備であったのかわからないくらい改

修と修復が施されている。そんなくたびれきった防具を身につけ、グラジオラスは誇らしげに頭を下げた。

「ただいま戻りました。セントポーリア様」

「博識のグラジオラス、お話は、後でゆっくり聞かせて」

グラジオラスが脇にひざまずく。これで、うまく左右に二人ずつであった部下は、二人と三人でバランスが悪くなってしまった。

七人の魔女にはセントポーリア自身を赤眼の魔女として含める。これで、ここには六人の魔女が揃った。

最後の一人。その到着を、セントポーリアは長らく会っていなかった恋人を待つような心地で時間を潰していた。

以前の魔女を知っている人は変わり果ててしまったと言う。ただ、セントポーリアはそうは考えていなかった。

魔女は何も変わっていない。

人をからかうことが好きで、それでもどこか憎めない。その銃の腕前はどんな標的も撃ち抜いて、何より、人を思いやってその道しるべになってあげられる強さを持っていること。

扉が開かれると、赤いメイド服の色が目の飛び込んできて、セントポーリアが魔女と認めた最初の一人が、明るく微笑んでいた。

柔和な微笑みに縁取られていようと、凶眼は、強さ故の優しさを内包する瞳は、どこも色褪せてなどいない。

「お帰りなさい、アマランサス」

三年前に交わした約束。それは、姫だとか魔女だとか、そんな呼び方ではなくて、お互いを名前で呼ぶこと。

「ただいま、セントポーリア」

普段外では姫様だとか呼んでいると聞かされているアマランサスも、セントポーリアに呼びかける時には必ず名前で呼んでくれる。

約束したそのままに。

「凶眼のアマランサス、ただいま戻りました」

特務騎士という言葉があまりに不釣り合いな声音で、アマランサスはひざまづく。

始まりは三年前。一人の王女と一人の魔女が出会い、悪魔に挑んだ。それはほんの序章にすぎない。この三年の間、異変は加速し、事態は刻々と変化を続けている。

しかし、七人の魔女が集い、変異は次第にその正体を白日の下にさらそうとしている。かつて2人が倒した悪魔が、今では古龍と呼ばれ、研究が進められているように。

凶眼の魔女と赤眼の魔女。

二人は揃って同じ方向に視線を合わせた。それは部屋の中央。王女の後ろ側。巨大な円柱の水槽の中には、顔の半分を消失した古龍

が、3年前の姿のままで浮かんでいた。

それは、三年前の約束が、今なおその姿をとどめていることと同じように。

「私は王女として、お姉様やお父様の力になれると思うし、なりたいという気持ちは、私自身のものだから。でも、そんな力、私にはないよ。だから、アマランサス、私の魔女になってよ。私も七人の魔女が欲しいんだ。古龍が来ても、人々を助けてくれるそんな、魔女たちが」

「私でよければ力になろう。セントポーリア、お前がその志を持つ限り、私はお前の魔女になる」

水晶の森のその上で交わされたその約束は、決して変わることなはない。

七人の魔女。それは、守りたいもののために命をかけた英雄たちの名前であり、そしてそれは、これからも続いていく。

魔女と呼ばれることの誇りと力を持つ二人のハンターがいる限り。

凶眼の魔女アマランサス。

赤眼の魔女セントポーリア。

二人は、古龍に挑んだ、二人の魔女であった。

最終話「赤眼の王女と七人の魔女」（後書き）

七人の魔女。

フィロソフィアとソフィアは三作目に、フィリアは一作目に登場しています。

スノードロップは三作目。

グラジオラスは四作目に登場しました。

一応、少しずつ登場させようと考えていましたが、三作目に集中している辺り、登場を急いだ形跡がありますね。

全員優秀なハンターなのですが、五作目に登場する際の武器と防具は未定……。

後書き

これでモンスターハンターも四作の短編を書き終わりました。はじめはあくまでも世界観を共有する短編集にしようともくろんで、それではもったいないので、話を発展させようとして、全五部作の作品にしようだとか悩みました。

大体二作目を書いたあたりから五部作構想が出てきて、三作目を書くあたりにはそれが定着しました。

もっとも、あくまでも短編として読めるよう留意しながら、同時に伏線をばりばり張るという手法は、私自身もさることながら、読者のみなさまを混乱させているのではないかと危惧しています。

今回は一作目、二作目に登場したアマランサスの誕生秘話、とでもいうのでしょうか。通してお読みくださっている方にはおわかりいただけるとは思いますが、アマランサスとは狩りにメイド服で出向くおかしな人物です。しかし、狩りの腕前は抜群であり、王国の姫とも関係を示唆されるなど謎の多い人物でした。設定として王国の密偵になったのは、実は一作目の後半のことでした。そのため、前半は――一応不自然ないよう設定を選んでいるつもりですが――若干違和感のある設定が残されています。

また、今回登場した凶眼の力、これは実はすでに何度か登場しています。

一作目では、複雑な壁画の様子を、ただ一度目にしただけでその損傷具合まで正確に描写しています。

二作目では、霧の中のヒプノックをわずかに見えている部分から足の位置を正確に推測し、狙撃を成功させています。

最終章となる五作目でも、この凶眼の力を大活躍させてやろうとの野望を抱いています。

さて、私の作品、気づいたところ共通点がありますね。それは、

アルビノの少女が登場すること、ではなくて、障害者が主要な登場人物に含まれることです。

この理由を考えてみると、私のコンプレックスが原因のようです。実は、私には障害が、ありません。多少アレルギー体質で、カフェイン飲料を飲めないとかはありますが、別に自動販売機の半分を購入できなくて、水か甘ったるいジュースしか飲めない不便などありますが、そのくらいです。みなさん、コーヒーは紅茶はもちろんのこと、栄養ドリンクやコカ・コーラにもカフェインは含まれています。そんな視点で自販機を覗いて見てください。結構な数が購入できません。

さて、話がそれました。

ただ、私が子どもの頃、友人の一人が、やはり障害を抱えていました。当時の私は、そのことを気にかけていたつもりです。自分とは違って、不便も多いだろうと考えて、できることなら力を貸してきたのです。

それが、私には重荷になっています。

ドラマや新聞なんかでは、障害者を差別するような人がいますね。でも、自分は、障害者のことを気遣ってあげられるしっかりとした人間なんだ。

そんな、ただいい気になりたいがために友人に気を使っていた、そんな気がするのです。

もちろん、手を貸すなといっているわけではありません。しかしながら、自分とは違うから、障害があって大変だからとか、そんな同情は余計なのです。

人は誰かに同情する際、それは突き詰めてしまえば見下していることと変わりません。自分とは違う誰かを勝手に下だとか劣っていると見下してしまう。同情には、多かれ少なかれ侮蔑が含まれてしまう気がしてならないのです。

同情なんてするべきではありません。理解しさえすれば十分なのです。腕が使えないなんて可哀想。歩けないなんて可哀想。目が見

えないなんて可哀想。
　そんなことは本人が判断することであって、端から決めつけていいことではありません。周りは、ただ理解すればいいのです。腕が使えないなら、どんな助けがいるだろうか。歩けないなら、こんな助けを必要としているのではないだろうか。目が見えないなら。
　私は、友人に同情していました。そんなことを言葉で示したこともあります。あなたは私にできることができない。だから、私はあなたを哀れだと思うし、手を貸してあげたい。子どもは純粋で、それ故疑うということができません。それをいいことと一度決めつけると、それを正そうとはできません。
　私の言葉や態度は、もしかすると友人のことを傷つけていたかもしれません。
　しかし、善意でした。
　友人は、決して不快感を示しはしませんでした。しかし、今私が悩んでいるように、友人も同情の中に含まれている侮蔑に気づいていない保証はありません。
　障害者に同情してはいけません。
　腕が使えないなんて可哀想。何故ですか。それが、その人の人間性や能力を何ら否定するものでもないのに。
　あの人は腕が使えない。それだけでいいのです。
　障害を負っていても、その人は普通の人間です。俗に健常者と言われる人と何も変わりません。劣ってもいなければ異質でも異常でもない。
　障害者は可哀想な人たちだから、気を使ってあげないといけない。子どもの頃の私は、そう考えていました。それこそが、障害者差別の正のベクトルとも言うべき行動だと気づきもせずに。
　今も、友人のことを思い出す度、私は苛まれます。友人を、普通の人とは見ていなかったからです。
　私が障害者を登場させるのは、もしかするとそんなことの裏返しなのかもしれませんね。登場人物の中に男性や女性、子どもや大人

が登場するのは当たり前です。人を構成している、ごく当たり前の最小単位だからです。そして障害者もまた、そのごく当たり前の因子にすぎません。別に特別でも何でもない。
障害者は、害とは悪い意味しかないため、障碍者と書き換えようとする動きもあるようです。悪いことなんて何もない。ただ、ほんの少し不便があるだけなのだからと。

さて、細々と続けざるをえなかったモンスターハンター・シリーズも次で最終章です。
次回ではいよいよオリジナル・モンスター――名前未定――を登場させて、四作品に登場したハンターたちを再登場させた総集編にでもしようかと考えています。
これまで登場させたモンスターや、登場させられなかったモンスターたちも登場させて、これはモンスターハンターなんかじゃない、怪獣大戦争だとか言うようなお話にしたいですね。
一作目には、ゲネポス、ガレオス、アプトノスに、リオレイア亜種、アイルー、シェンガオレン、ディアブロス、そして、ディアブロス亜種が登場しました。ハンターはハンマー使いの女性ティルテュ。
二作目には、アプトノス、モス、ランゴスタ、そしてヒプノック希少種?。ハンターは片手剣使いの少年でした。
三作目はオルガロムにベルキュロス、そして、ドラギュロスとクシャルダオラ。ハンターは、大剣と太刀の二人。
そしてこの四作目には、ショウグンギザミ、バギィ、ドスバギィ、ギィギ、ベリオロス、そして、オオナズチ。ハンターは、狩猟笛の王女でした。
異変は地震から始まって、ディアブロスの子育ての変化。深奥にしかいないはずの種が現れたり、ありは助燃性の霧。そして、古龍の撃退と討伐。
話の内容も、ただの村娘の狩りから、村長の息子の奮闘、王国の

暗躍を示して、ついには王女が表舞台に現れました。
まあまあ適度にお話が広がっているのではないかと。次はそれこそ世界――とは言ってもドンドルマ地方を抱える大陸ですが――を巻き込む戦いにしたいですね。
そのため、一〇話前後とはいかず、多少長くなってしまう恐れがあります。だいたい、３０話程度で終わるのではないでしょうか。
そして、書いている途中でＰＳＰサードが発売される。ゲスト出演になてしまうとは思いますが、新たなモンスターを登場させるのも面白いかもしれませんね。
タイトルは現在の予定では、「ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ～太古の巨龍と戦旗の王女～」にでもなるでしょうか。
せっかく最後ですので、こんなのモンスターハンターじゃないと言われるくらい設定を作って、それでもモンスターハンターらしさを残すような、そんな作品に仕立てようと模索中です。

では最後に、みなさん、別に遠慮はいりません。少しでも感想書こうかなという気になればいつでもどうぞ。まだまだこのサイトには居座るつもりですし、別に悪いことしか書けないという人も歓迎します。
激励あれば力になりますし、叱咤があれば改良と考察を加える材料になります。
つまらなかった。読む価値がない。そんな意見でも絶賛受け付けています。
ただ、何がどうしてつまらないと思えてしまったのか、自己考察を加えていただけると幸いです。私自身でわかるものなら、とうに改良すべく動けますから。みなさんの多様な感性による忌憚のないご意見、お待ちしております。
感想は書きたいけど、うまくオブラートに包むのが疲れる。以前感想を書いたら消去された。感想を書いた途端に小説が削除されてしまったり、長期連載休止になってしまった。他の読者に感想で反

論されて、危うく感想欄を炎上させかけてしまった。そんなことにお悩みの方も、是非どうぞ。

もっとも、明らかに荒らしだなと考えられるご意見は無論、削除しますが。

さすがに、「お前の母ちゃん、でべそ」とだけ書かれても、お答えのしようがないので。

ただ、何故私の母がでべそだと考えるに至ったのか、そんな独自の考察と解釈を道筋だって説明できる方がいらっしゃるのであれば、反対にその理論を拝聴したい気もします。

しかしながら、作品の感想ではないため、そんなことありましたら、やはりメッセージで送っていただけるとありがたいですね。

結論として、みなさん、感想をください、ということです。

では、五作目、少々時間をいただいて、一週間後くらいにまた投稿します。

最後に一言。

海竜種との水中戦を一度くらい書いてみたかったですね。あまり前情報を仕入れる質ではないのでわかりませんが、サードでは泳げるのでしょうか？　水獣ロアルドロスはいたような……。上質な海綿質を手に入れるのにバギィ装備を着こんで狩り回ったことが思い出されます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5314o/

MONSTER HUNTER第四章～赤眼の王女、凍土を奏でる～

2011年3月23日12時13分発行